
魔法再現者

左リュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法再現者

【Nコード】

N8131W

【作者名】

左リユウ

【あらすじ】

かつて、『魔法』が存在した。しかし、魔法という文明は突如滅んだ。そのかつて存在した魔法にあこがれた科学者達が、現代に滅んだはずの魔法の再現に成功した。『ポータブル』と呼ばれる様々なタイプが存在する魔法再現装置により、人々は再び魔法の力を手にした。この魔法を『再現』する者を『魔法再現者』、または『再現者』と呼ぶ。そして、魔法を扱う事を学ぶ場として、『魔法再現者育成機関』を設立。この第一学園から第7千学園まで存在する内の一つ、第千百二十七学園にはある噂が流れていた。――—どん

な依頼もこなす、凄腕の魔法探偵が居る、と。その魔法探偵の名は、天野漣。彼は、相棒や仲間と共に探偵部を設立。最初の依頼として人探しを行うのだが、そこから彼等はある巨大な事件に巻き込まれていく。そして彼には、ある特別な才能と、特別な魔法を有していた。その特別な魔法とは．．．．． 主人公最強物です。多分チート。ハーレム要素も含みます（予定）

プロローグ 魔法を使う者を『再現者』と呼ぶ

魔法。

それを使う者を、『魔法使い』と呼ぶが、それを言うならば現代の人々は全て『魔法使い』と呼ぶだろう。

しかし、厳密に言くと、『現代の魔法』は、童話等によく出てくるように杖を一振りすれば使える、という物でも無い。

昔、『魔法』は実在した、と言われている。しかし、何らかの理由により『魔法』という文明は滅びた。

そして、『現代の魔法』の発祥は『過去の魔法』に憧れたある科学者達が、科学の力により『魔法』を造ろうとした事がそもその始まりだ。そしてその研究の果てに、魔法の開発に成功した。

それを実現したのが、魔法再現装置、『ポータブル』。

これにより、現代に魔法が再現された。この『ポータブル』は様々なタイプがあるが、一般的なのは指輪タイプ。そこから術式を構成し、魔法を発動する事が出来る。いや、この場合は『発動』というよりは『再現』と言う方が正しいのかもしれない。よって、この時代の魔法使いは通称、『魔法再現者』、もしくは『再現者』と呼ばれている。

『ポータブル』を扱うにはある程度の技術を伴う。魔法のコントロールという物は難しいのだ。よってやはりそこは才能が要る。才能が無ければそこはやはり未熟な魔法しか発動出来ない。

そこで政府は、『ポータブル』をコントロールを学ぶための場として、『魔法再現者養成機関』を設立。もはや現代の子供達にとって、『魔法を学ぶ』という事はもはや当たり前なのだ。

『魔法再現者育成機関』は、この日本国内で全部で第一学園から第七千学園まで存在する。

その中の一つが、『魔法再現者育成機関第千百二十七学園』だ。

第千百二十七学園には、ある噂が流れていた。

——どんな依頼もこなす、凄腕の魔法探偵が居る、と。

魔法再現者育成機関第千百二十七学園。

魔法再現者を養成するための学園であり、子供達が日々、魔法を学ぶための場だ。魔法再現者を育成する為の学園なだけあってその設備は充実している。例えば通常の座学を学ぶための教室は勿論、魔法の実習を行うための実習場等も完備されている。

そんな魔法再現者育成第千百二十七学園は今日、入学式を迎えていた。新入生は新しい場での新生活に心を躍らせ、在校生は進級し、自分達の生活のステップアップに様々な思いを抱えているだろう。

魔法再現者育成機関の真新しい制服に身を包んで、まさしく学園の方向に歩いている少年が居る。手には最もスタンダードなタイプの指輪型ポータブル。今のペースを持続して歩けば時間的には遅刻はしない。丁度入学式の一時間前に着く計算だ。

そして、少年の前にたくさんの荷物を抱えた老婆が。

そんな老婆を見た少年は、ある一つの行動を取った。

入学式が終わると、生徒は一組から十組に振り分けられ、それぞれの教室へと移動する。その移動した教室で、これから一年間、各々魔法の再現方法を学んでいく。

例えばその中の一つである一年四組の教室。中ではこの学校についての説明が担任の先生の口から話されている。

「と、言うわけでこの学園についての説明は以上です。何か質問がある人は……」

と、先生が説明を終えようとした瞬間、ガラリと教室の前のドアが開いた。外から教室へと入ってきたのは、一人の少年。真新しい学園の制服を身に纏い、茶髪髪に手には指輪型のポータブル。そして、一年四組の教室の机が一つ開いている事を考えると、どうやらこの少年は遅刻してきたようだ。

「……遅れました」

「あ、えつと、そ、それでは席についてください」

「はい」

少年はそれだけ返事すると、開いている席へと向かった。教室は入学式早々遅刻してきた少年を物珍しそうに見ている。

（ま、そりゃ入学式早々に遅刻、それに加えてこのタイミングじゃあ、注目を集めるよな）

とりあえず少年は教室の中を移動しながら見渡す。ほとんどが顔を知らない生徒ばかりだったが、中には良く見知っている顔も居た。

——少年の、相棒の姿だ。

「あ、そうだ。まずは簡単な自己紹介をしてください」

担任の教師が、席に着いた少年に自己紹介を求める。そして少年は席を立ち、

「あまのれん天野漣。——探偵だ」

第一話 情報屋

入学式の後の教室でのクラス紹介。それが終わると、もう今日は新人生はする事が残されていない。各自、下校するだけだ。漣は、相棒の少年と、そして一人の少女と共に下校するために、校舎内の廊下を歩いていた。

「おばあさんの荷物持ちをして遅れた！？ バカじゃないのアンタ！？」

「うるさいな。別にいいじゃねえか。困ってたんだからよお」

「諦めろってハル。漣はそういうヤツなんだからよ。お前だってよく解ってるだろ？」

「それはそうだけど、まさか入学式当日に遅れるとは思わなかったわ……………」

「ハル」と呼ばれた少女は、はあ、と思いため息をつく。しかし、当の漣本人は入学式の遅刻の事など気にも留めていないようだ。少女の名前は、如月ハル。漣とは幼稚園の頃からの幼馴染だ。ハルも漣と同じく、魔法再現者育成機関の制服に身を包んでいる。顔立ちはとても美人で、歩くたびにセミロングの髪がふわりと揺れる。誰だどう見ても『美少女』にカテゴリされるであろう少女だ。

「いやあ。それにしてもまさか入学初日からあんなぶつとんだ自己紹介するなんてなあ。中学の時と同じだ」

と、漣に軽口をたたいている少年は、後藤霧彦。ハルと同じく、

漣とは幼馴染で、そして、漣の相棒だ。

「そうね。最初の自己紹介で『探偵』なんて口にするのはせいぜい
アンタぐらいでしょうね」

「だな」

「悪いかっ！」

と、三人は雑談を交わしながら廊下を歩く。じろじろと漣達を好奇心に満ち溢れた目で同じ新人生が見つめる。当然、理由の解らない視線を感じる三人だったが、そんな事は気にしない。

そもそも原因はハルにある。そもそも、ハルは実際美少女なので、周囲の男子共の注目を集めるのは至極当然だ。それに加えて、そんなハルと共に親しく歩いている二人の少年も、一体ハルとはどのような関係にあるのか、と思うのは当然だった。

——そしてそんな周囲の視線の中に、ただ単なる好奇心とは違う感覚を持った目で、彼らを見つめている視線があった。

次の日。

入学式の次の日とは言っても、まだ授業は行われない。まずは校舎内見学。魔法再現者育成機関の設備は充実している。それだけ、魔法という再現された文明に力を入れている、という事なのだろう。今日のスケジュールは、校舎内見学だけで終了の予定だ。漣はポータブルに備え付けられている、エアディスプレイに表示されたシステム手帳機能に目を通し、そのスケジュールを確認する。

ポータブルは、魔法を再現するために必要なツールではあるが、現代に普及したポータブルは、もはや携帯端末として扱われている事が一般的だ。例えば、魔法を再現するだけでなく、通話機能やメール機能は勿論、漣が使ったようにシステム手帳のような機能もついている。もはやポータブルは現代人にとって、なくてはならない生活に必要なツールの一つと化している。

「そういえば、校舎内の見取り図、ポータブルにインストールした？」

ハルが漣に聞く。

「当たり前だろ。探偵にとって情報は命だ」

漣は指輪型のポータブルから校舎内の見取り図を『再現』^{ひょうじ}する。この魔法再現者育成機関の校舎は、一つの校舎が四階まであり、それが三つ平行に並んでいる。そしてその校舎を、渡り廊下がつなくこの見取り図は、校内にある『ナビゲーションボード』と呼ばれる、掲示板画型のポータブルからインストールが可能となっている。生徒は、このナビゲーションボードから、学校行事や連絡等、様々な情報を習得する仕組みとなっており、また、ナビゲーションボードから生徒個人のポータブルへの情報のインストールも可能となっている。

現在時刻は午前十時。見学するにはまだ時間が有り余っている。

「まずは校舎内から見回るか？」

「そつね」

三人はとりあえず、近場の『図書室』へと向かう事にした。図書室に納められているのはデータもそうだが、印刷された『本』もしつかりと存在する。魔法の再現が普及した今でも、普通に店頭では紙を印刷した雑誌や、漫画等があふれている。

「よっ、入学式早々遅刻した奴」

不意に、図書室へと向かおうとした三人に背後から声がかけられた。漣が振り返ってみると、そこには染めているであろう茶髪の髪に（因みに漣の茶髪は地毛）、手には指輪型のポータブルに混じってアクセサリーとしてはめている指輪に、首にはネックレスをした少年。身を包んでいる魔法再現者育成機関の制服が真新しい所を見ると、漣達と同じく新入生だろうか。

「よっ、このチャラ男」

「初対面から遠慮ねえなコノ野郎」

「で、一体誰よアンタ」

「おおっ。これはこれは校内で早くも噂されている美少女の如月春さんじゃあないですか」

目の前のチャラ男の言葉に眉をひそめるハル。

「なんでアタシの名前を知ってるの？」

「うわっ！ さびしっ！ 昨日自己紹介したのにつ！」

この発言からして、同じクラスの者だと知る漣。そして霧彦がチ

ヤラ男を見て、

「コイツは同じクラスの園咲西人だ」
そのざきさいと

「ああ。同じクラスだったの？ 全然記憶に留めてなかったわ」

「酷いっ！」

ガーン、とショックにうちひしがれる西人。

「で、チャラ男が何のよう？」

「言っただじゃん！ 西人って言っただじゃん！ しかも俺、見かけよく反してそんなにチャラくねえし！ そこのお前、遅刻男、もとい、天野漣、だったよな？」

「そうだけど」

その言葉を聞いて、西人はにつ、と微笑む。

「俺と、組まねえか？」

西人は、情報屋だった。そもそも、始まりは小学生の頃、新作ゲームについての情報を集めた事がきっかけだった。そこから情報を集める事、そして手に入れた情報売る事が楽しくなってきた。そして中学二年生の時点でそれなりの情報屋には既になっていた。それに伴い、情報収集スキルがメキメキと上達してきたのだが、その手に入れた情報を生かす人材、または、情報を提供する程の人

材が、西人の周りには居なかった。

そして、昨日。

魔法再現者育成機関に入学した日。他愛の無い自己紹介が終わり、担当の教師がこの学校についての紹介を終えたその瞬間、漣が現れた。

『俺は天野漣——探偵だ』

探偵。

多くの生徒がなんの変哲も無い自己紹介をした後に行われた漣のぶつとんだ自己紹介に、言葉に西人は衝撃を受けた。

（探偵！ 俺の情報屋としてのスキルをいかに発揮できるとっておきの人材じゃねえか！）

そして昨日は声をかけようとしても周囲の注目を集めまくっていた状況。そして今日訪れたチャンス。西人は思い切って声をかけた。

「…………と、言うわけだ。どうだ！」

「いや、どうだって言われてもな」

ドヤ顔で説明し終えた西人の扱いに困る漣。それはハルも霧彦も同じだった。

「でも、人脈を広げるっつー意味では知り合いぐらいになってもいいよな」

「まあ『組む』つつつても、『ギブアンドテイク』の関係ぐらいに思ってもらって結構だ。俺は俺の能力を発揮してくれば、文句ねえしな」

「ま、いいんじゃないの？ 漣。探偵に情報屋が居ても可笑しくは無いだろ？」

「だな」

そんな漣と霧彦のやりとりを見る西人。

「ん？ もしかしてコンビ？」

「ま、そんな所だ。つつーか、そんな安易な考えで組んでもいいのか？ 俺達の実力を確かめもせずに」

霧彦の言葉に西人は軽く手を振る。

「ああ。さっきも言った通り、俺達はおくまでも『ギブアンドテイク』の関係だ。お互いが必要としなければ別にそれでいいし、必要な時は手を組む。それぐらいでいいんだって。それに、アンタ達がそれなりに出来るって事ぐらい、見れば解る。俺と組める奴を探している内に、大体ソイツが出来るか出来ないかぐらいは見分けがつくようになってきたしな」

「でも俺達はお前の実力を知らない」

「うっ。痛い所を突きやがる」

確かに、漣達と西人は立った今出会ったばかりだ。西人は漣達の實力を察する事は出来ても、漣達にはまだ西人の情報収集能力がどれほどの物かは解らない。

「うゝん。そうだな．．．．．」

そして西人は何か思い立ったかのようにぴつ、とハルを指差す。

「如月春！ 五教科合計四百六十八点！ 学年順位は十三位！！」

「ええっ！？」

今、西人が言ったのは、ハルの魔法再現者育成機関入学テストの点数と順位だ。この順位は学園のポータブルのシステムの中に保管されている情報で、ハルの結果はハルト、学校側の関係者以外には解らない。通常の生徒が知りえるハズの無い情報だった。

「な、なんで知ってんのよ！？」

「フッフッフ。企業機密って奴だ。他にはお前のスリーサイズまで知ってるぜ？ 上から順に．．．．．」

「ぎゃ——！！ 死ねこのド変態ッ！！」

青空に、西人の断末魔がこだました。

第二話 魔法の再現

「ふあふえ（訳：さて）」

ハルの綺麗な右ストレートにより、顔がこれでもかというぐらいに腫れてしまった西人。最早これが日本語かどうかすら怪しい。

「ふおれふあらはふあふあふいふえにふえんふあふふるふあ（訳：これから真面目に見学をするか）」

「最早日本語になってねえぞ」

「ふいふあふあふえふえふあふお？（訳：仕方がねえだろ？）」

わけのわからない日本語（？）を話しながらチラリとハルを見る西人。ハルは少しぶすつ、とした様子で、

「……悪かったわね」

と言うと、ハルは自身のポータブルから、治癒の効果を持つ魔法を『再現』する。途端に、光の粒子が現れ、たちまち西人の頬の腫れを治癒した。

魔法の再現。

元々、この世界に存在した魔法。はるか昔に、一つの文明として栄えていた魔法。現代の魔法は、その元々存在していた魔法を『再現』する事で、魔法が発動する。

今ハルが発動させた治癒魔法、『リカバリー』も元々、はるか昔

に存在していた魔法を『再現』した物だ。

「これならもう文句ないでしょ？」

「おおつ。流石」

治癒された自分の頬をさすりながら、直った事を確かめる西人。

「筆記試験で十三位だっただけの事はあるなあ。実技の方もかなり出来るみたいだし。治癒魔法が得意なのか？」

「ん。まあ、ね」

と、少し照れながら言うハル。

「よし、俺の顔も治った事だし、校舎内見学に行くかつ！」

いつの間にか西人に引っぱられる形で見学を始める事になる漣達であった。

しかし、そんな校舎内見学で、あるトラブルが起こる。

そのトラブルは、丁度体育館の前で起こった。原因はズバリ、ハルにある。いや、原因、といえば原因なのだが、だからと言ってハルに責任がある、というワケでも無かった。

まず、丁度体育館を見学していた三人に、声をかけた人物が居た。原因と言えば、その人物こそが原因だろう。いや、元凶というべきか。

「こんにちは」

と、声をかけてきた少年。その背後にはまた別の少年と、一人少女が居る。声をかけてきたのは、丁度真ん中に位置している少年だ。そして少年が声をかけたのは漣でもなく、霧彦でもなく、ましてや西人でも無かった。少年が声をかけたのは、ハルに向けてだった。その事にハルが気がついて、じろり、と声をかけてきた少年を見つめる。

「誰？」

「一年一組の『那霸信也』^{なはしんや}と申します」

礼儀正しそうに、信也は自己紹介をする。

「那霸……？　ってまさか」

西人がさつ、と表情を変える。

「オイオイ……マジかよ」

「」「誰？」「」

と、綺麗に声をそろえる三人。その反応を見た西人はぎょつ、と信じられない、と言った表情で三人を見る。

「那霸っていったら魔法再現者の名家、『那霸家』の事に決まっているだろ！？　有名な魔法再現者が数多く輩出されている那霸家だよ！　最近じゃあ、那霸家の長男が『国際魔法再現者研究室』に勤

めてるって話だぜ!？」

因みに、『国際魔法再現者研究室』と言つのは、魔法の再現術を研究している部署で、ここであらゆる魔法の再現が行われ、現在もまだ再現されていない魔法の研究も行われている。

入るにはかなりの技術を必要とし、まさに『選ばれた者』にしか入れない部署だ。『国際魔法再現者研究室』の一員、というだけでもかなりの実力がある事が証明される。

そして研究員は、魔法の実力も高い。魔法を高度に扱えている者だからこそ、高度な魔法の研究が行えるのだらう。

「で、その那覇家が私になんの用なのよ？」

「い、いえ。たいした用は無いのですが……」

言葉をにこらせる信也。

「だったら話しかけないでよ。ホラ、行くわよ。漣」

「お、おう?」

ぐいつ、と漣を引っ張っていくハル。そんなハルの態度を見た、信也の側に居た少女の一人が声を荒げる。

「ちょっと。那覇さんに向かってその態度はなんですか? 無礼ですよ」

「はあ? じゃあ逆に聞くけど、なんで私がコイツに礼儀正しい態度を取らなきゃならないのよ」

「ッ！ アナタ、生意気よ！」

「そっちこそ！」

互いににらみつけるハルと少女。その様子を漣、霧彦、西人はただボーっとして見ていた。

「なんか、色々と大変だな」

「ま、女には女の世界があるって事だろ？ つーか女の喧嘩は恐いな」

「つーか那覇家にああやって逆らう事が出来るって、スゲーな」

しかし、どうやらその少年達も部外者ではいられないようだ。ハルが呼びかけた『漣』という名前に、信也が反応する。

「『漣』、というのは誰だ？」

「？ 俺だけど」

「そうか。お前が『漣』か。ハルさんとはどういう関係だ？」

「はっ？」

突然の質問に言葉を失う漣。

「い、いや、どういう関係だって言われてもただの幼馴染としかいようがないんだけどな」

回答をしても、信也が納得する様子が無い。漣が次の返答に困る中、まだ少女二人は言い争っている。

「だ・か・ら！ 私はあんな奴に興味は無いっつてんでしょうが！」

「なっ！？ 那覇さんになんて失礼な事をつ！」

そのやりとりを見て、漣はどうやら助け舟が来なさそうなのを確認する。ましてや、霧彦や西人が助けてくれるとは思えない。漣はため息をつき、

「本当だ。別に特別な関係でもなんでもない」

「別にそれについて言及するつもりは無い。ただ、確かめたいんだ」

「は？」

「君が本当に、ハルさんの側に居る人間として相応しいかどうか」

「一体何を言って——」

その先の言葉が紡がれる事は無かった。なぜなら、漣の真正面に、剣を突き出した信也が迫ってきたからだ。

その剣は勿論、魔法。

信也が再現させた物だろう。先ほど、ハルが西人に治癒魔法を再現させたように、魔法の再現の際にはある程度のタイムラグが生じる。しかし、信也はそのラグを最小限に留めて魔法剣を再現した。

その剣の名は、『モーメント』。

剣からの魔力を受け取る事により、剣を振るうスピードを上昇させる事が出来る剣だ。

例えば、剣を振るうスピードが遅い物でも、この『モーメント』の能力により高速で剣を振るう事も出来るようになるだろう。

しかし、信也の場合は那覇家の者としてそれなりの鍛錬を積んでいる。通常の剣でも軽々と振り回すだろう。そして、そんな信也が、剣を振るうスピードを強化する『モーメント』を使えばどうなるか。

——その剣を振るうスピードは、高速を超える。

剣の切っ先が、ガゴンツ！！と、何かに防がれた。高速を超えるスピードで振るわれたモーメントを止めたのは、紅い刀。

漣が手に構成した剣を縦に構えて、その刀身でモーメントの剣を防いだのだ。その驚異的なスピードを、見切り、捉えて。

「……………」

「何しやがる。危ねえな」

防御に徹していた剣をすぐさま攻撃に転じ、振るう。モーメントを弾く。瞬間、第二波が漣を襲う。再び振るわれる、高速を超えた速さのモーメント。

真横に大きく振るわれたモーメントを低くしゃがんでよける。そして、そのしゃがんだ体勢から真上に一気に剣を振り上げる。

「ッ！！」

剣はモーメントを真上に弾く。くると大きな弧を描いて、地

面にモーメントが突き刺さる。そしてその様子を見た一人の少年が、魔法を再現させる。

「那覇さんッ!!」

再現されたのはライフル銃。はるか昔に『ライフル銃』という物は存在しなかっただろうが、これは『現代風に再現』した結果である。

例えば、『ボウガン』の魔法を再現する場合、『現代風に再現』すればそれはまさしく『ライフル銃』や、『拳銃』にもなるだろう。つまり、その『再現させたい物をどう再現させるか』、で元となるかつて存在した一つの魔法から様々な魔法が現代に再現されるのだ。

しかし、少年が再現したライフル銃は、使われる事は無かった。

なぜなら。

霧彦が放った銃弾によって、手から弾かれたからだ。ガシャツ、と音を立てて地面にライフル銃が落ちる。

「ぐうつ!!」

自身の魔法であるその拳銃の銃口を威嚇するように少年に向けたまま、霧彦は呟く。

「二対一は卑怯じゃねえのか？」

「くつ……!!」

そんな漣達の様子を見たハルが、目の前の少女に向かって言う。

「アンタのご自慢の『那覇さん』もあのザマだけど？」

「アナタ、それ以上の侮辱は許さないわよ……………」

今度は少女が魔法を再現しようとする挙動を見せた。しかし、信也はそれを制した。

「やめろ！」

「ッ！」

ビクッ、と肩を震わせる少女。信也は魔法を解除する。地面に突き刺さったモーメントが光の粒子となって消滅する。

「無礼をしたな。すまない」

「ん？ ああ。別にこっちにケガは無いからいいんじゃないの？」

漣のあっさりとした様子に少し驚く信也だったが、すぐに調子を整える。その際に、チラリとハルを見る。ハルの瞳はただ真っ直ぐに漣に注がれている。漣だけを、心配そうな目で見ている。

「確かめてみてハッキリした。君をライバルと認めよう」

「は？」

「またの機会に」

それだけ言い残すと、信也は少年と少女を引き連れて去っていつ

た。その事をしっかりと確認した後で、西人が漣に駆け寄る。

「びっくりした。まさかあんなに簡単に魔法を再現はつていさせるとはなー」

通常、学園では魔法は許可が無ければ再現してはいけない規則となっている。なまじ学生、と言う子供でも魔法という巨大な力を持っているため、魔法を用いた喧嘩にでもなれば軽い怪我では済まないだろう。

ゆえに、さっきのように喧嘩目的で安易に魔法を再現させる事は基本的には禁じられている。

「にしても、なんで急に魔法を再現させたんだ？」

「さあな。心当たりが無い」

それは本心だった。

「よし、さっさとここを離れようぜ。騒ぎすぎて、人が集まってきた。先生に見つかり、廊下に立たされるぐらいじゃ済まないぞ」

校舎内見学どころでは無くなってきた。先ほどの騒ぎを聞きつけた生徒達がぞろぞろと集まってきた上に、教師まで魔法の再現を行っていた生徒を探し出そうかと騒ぎ出す始末だった。

教師が探索系の魔法を使えば正直見つかったかもしれないが、幸いそれほどの事態までには行かなかったようだ。

結局、漣達は今日の校舎内見学を、逃げる事について満足に見学する事が出来ずに今日は終了した。

「結局、あんまり見回れなかったわよね」

「まあいいじゃん。俺は楽しかったけどなー」

と霧彦。

「まあ俺はちよつと暴れられたからよしとしよう」

と漣。

「俺は良いもん見させてもらったからなー。まさか那覇家の人間にあそこまで出来るなんて。やっぱり俺の目に狂いは無かった」

と西人。

「．．．．．アンタ達つて、ホントバカね」

ハルが頭を悩ませている。そして漣をチラリと見て、

「で、アンタはなんとも無いの？ その、ケガ、とか．．．．．」

「ああ。攻撃は全部避けられたし」

「そ、そう。それならいいのよ」

ぷいつ、とそっぽをむくハル。漣はワケが解らなかったが、気にしない事にした。

「そんじゃ、放課後になった事だし、良い所に案内してやるよ」

「良い所？」

漣が眉をひそめる。その反応を見た西人はにつ、と微笑み、呟く。

「『学園ギルド』にな」

第三話 学園ギルド

学園ギルド。

魔法が現代によりみがえった事が、良い事ばかりでは無い。例えば魔法を悪用した犯罪も起きる。その罪を犯した者を捕まえるのが警察の仕事なのだが、政府は『学生にでも活動できる範囲』での事になら、学生にも手伝わせようと、学園ギルドを創った。

ようは、学生に依頼をしようというのだ。

この学園ギルドに来る依頼はあくまでも、『学生が手伝える範囲』でしか無い。しかし近年、依頼するだけなら特に厳しい規制の無い学園ギルドには学生の手にも負える範囲で無い依頼も紛れ込んできた。とは言っても学生もそうバカでは無い。明らかに自分達の手に負えない依頼には触らない。

それに加えて、管轄の者の目が光っている内はそのような依頼は受注させないようにしている。学園ギルドは全国各地に存在し、日々、様々な依頼が舞い込んでいる。勿論、その依頼を達成させれば報酬も与えられる。

四人は放課後、学園を出てしばらく歩いた所に位置する、『学園ギルド』と大きな看板が設置されてある施設へと足を踏み入れた。中に入ってみると、ある一つの部屋にたどり着いた。入ると、その奥の方にカウンターののような物が見える。そしてその両サイドにはナビゲーションボードが設置されている。

学園ギルドの中に設置されているナビゲーションボードは学園ギルド用にカスタマイズされており、魔法再現者育成機関学園内の物よりも高性能となっている。

大量の依頼を処理しなければいけないためだ。

「ここではまず二つの方法で依頼を受ける事が出来る」

ぴっ、と右手の人差し指と中指を立てる西人。

「まず一つは、『チーム』で依頼を受ける事。まあ『チーム』つつつても、例えば部活動でもいい。誰かと組んでいれば、それがもう『チーム』だ。そしてもう一つは、個人で受けるって方法だな。と言ってもまずはどんな依頼を受けるか決めないといけないが．．．．．
．．どうせ、何か受けるんだろ？」

「当然」

と漣が言う。

まずはナビゲーションボードの方に近づいてみる。ボードの周りには、多くの学生がたむろしていた。よく、こうやって依頼をこなしているからだろうか。

「ナビゲーションボードから、ギルドの情報をインストールすれば、リアルタイムでドンドン依頼が更新されるから、しておいた方がいいぜ」

「解った」

漣は、自身のポータブルに学園ギルドの情報をインストールする。そしてナビゲーションボードの方から離れ、近場のテーブルに集まり、どんな依頼が入っているのかを確認する。依頼欄のすぐ隣に、連鎖爆弾国内密輸入事件や、連続爆破事件、連続放火事件、連続誘拐事件等のニュースが流れている。

依頼にはランクが付けられており、一番最高ランクで『S』。そしてレベルが落ちる事に『A』、『B』、『C』、と、最低ランクが『F』となっている。

「ま、学園ギルドじゃあ、高くてもせいぜいランク『B』が限界かな。それ以上は『魔法再現者公式ギルド』の方にまわるし」

魔法再現者公式ギルド——通称、公式ギルド——、というのは、学園ギルドがアマチュアならば公式ギルドはプロ、という所だろうか。

学生が依頼をこなす学園ギルドとは違い、公式ギルドは主にプロの魔法再現者がこなす依頼だ。例えば、最近巷で噂されている連鎖爆弾国内密輸入事件などは、公式ギルドに正式に登録されている者達の仕事となる。この依頼は学生には荷が重過ぎる上に、危険度も高い。

公式ギルドにはそういった事件解決の依頼等、政府や警察からの依頼も多くある。

「はあ。なんかめんどくさそうね。なんでこんな所に案内したのよ」
「だって、あれだけの物を見せてもらっただ。俺達『探偵部』で早く活動したいだろ？」

「た、『探偵部』！？ 何それ！？ 私、そんな物に入っていないわよ！？」

「今漣が登録してたけど。俺達全員」

「な、何やってんのよ漣——！！」

「痛い！ な、殴るなよ！」

その後も殴られながらも依頼を探す漣。そして、ある一つの依頼に目を止める。

「よし、これに決めた」

他の三人が、漣のポータブルから表示されたエア・ディスプレイに集中する。そこには、ある一つの依頼が表示されていた。

内容は――

「人探し、か」

霧彦が呟く。西人は「面白そうだな」と呟く。ハルもハルで、「はあ。仕方が無いわね」とやれやれと言った様子で諦めた。前からこういう事は何度かあったし、それにもう漣が受注してしまったからだ。

その場で（勝手に）結成されてしまった探偵部の初仕事が始まる。

次の日。

漣達は、依頼人と、近くの喫茶店に来ていた。一応『探偵部』という形を取ってはいるが、何しろまだ創って間もない為に部室が無い。よって、学校の近くの喫茶店に集まったのだ。

依頼人は、同じ学園の生徒の生徒だった。

名前は、小野田清二^{おのだせいじ}。二年五組に所属している少年だった。

彼の依頼内容は、行方不明の兄を探す事。数日前から行方不明となっている兄をどうやってさがそうかと迷っていた所だったのだが、とうとう学園ギルドに依頼を発注するようにしたのだ。

「えっと、それにしても、どうして『学園ギルド』なのかしら？」

『行方不明』みたいな大事なら、『公式ギルド』に頼んだ方がいいんじゃない？」

「多分、まだそのお兄さんが行方不明になってから間があまり経っていないから、じゃないですか？」

ハルの疑問に、漣が答える。そしてその漣が答えに対して、清二が返答した。

「そうなんです。実はまだ兄が行方不明になって一日しか経ってないんですよ……」

「一日ぐらいなら大丈夫じゃね？ 俺らみたいなコーコーサーにはあるだろ。そういう事」

「はい。そういつて警察もまだ取り合ってはいくれませんでした……でも、普段の兄なら、絶対にありえないんです。家族にも黙って一日家を空けるなんて……とても、真面目な兄なんです」

「ふん。それならそれで心配だよなあ」

と、霧彦がうなずく。

「アンタ達はもう少し依頼人クライアントには敬語を使いなさい」

ドゴツ、と西人と霧彦の頭を叩くハル。

「……なんだかんだ言って、ハルもノリノリだな」

「う、うるさいっ！ い、いいでしょ別に！」

「そうか。手伝ってくれてありがとな」

と、漣はにつこりと微笑みかけたのだが、

「っ！？ そそそ、そんな事どーだっていいでしょー！」

なぜか、ハルの右ストレートが漣の顔面に飛んできた。その光景を見て、清二が「大丈夫なのだろうか」と思ったのは至極当然の事だった。

その後、西人はさっそく、行方をくらました兄の情報収集を行うため、意気揚々と喫茶店を出た。そして漣達は依頼人の清二と共に、兄と最後に一緒に居たという場所まで赴く事にした。

兄の名前は小野田清一。おのだせいいち最後に清二と共に居たのは、通学途中だった。いつものように通学していると、突然兄の誠一が、「用事を思い出した。先に行つてくれ」と清二に言い残し、家の方向へと走っていったのを見たのが最後だった。

それが、入学式当日の事だった。

そして、現在漣達が居るのは学園の近くの路地だった。別に周囲にはなんの変哲の無い路地だ。ここで、最後に清二は兄と別れて、それっきりだ。

「ここで別れたんだよな？」

「……………はい」

それを確認すると、漣は

「なあ、その兄ちゃんの使ってたポータブルとか、持ってねえか？」

「ポータブル、ですか？」

一瞬きよんとする清二。しかしハッ、と我に帰ると、急いでカバンの中を探り始めた。

「兄の操作に役立つと思って持ってきたんですけど……依然、兄の使ってたポータブルです。最近、急に新しいポータブルに変えたらいいんですね」

と、清二はカバンの中から指輪型のポータブルを取り出す。

「その新しいポータブルにはいつ変更した？」

「つい最近です。変えてからまだ一週間ぐらいしか経ってませんね」

「それなら問題無しだ」

指輪型ポータブルを受け取り、漣は自身のカバンの中から一つの小さな長方形の箱を取り出す。そしてその箱の裏側を受け取った指輪型ポータブルにかざす。

「？ あの、何をしてるのですか？」

「このポータブルの中にある魔力情報を読み取ってるんだよ」

「魔力情報？」

「そつ」

情報の読み取りを終えると、今度は箱の中から、一組のコンタクトレンズを取り出す。どうやら中に入っていたのはコンタクトレンズだけのようだ。

そのコンタクトレンズを、漣は両目に付ける。

「コンタクトレンズ．．．．．？」

清二の疑問に、答えたのは霧彦だ。

「あれは『探偵七つ道具』^{セブンス・アイテム}ってヤツだ。その内の一つがああのコンタクトレンズ。あれはポータブルから読み取った魔力情報を元に、登録された魔力を持つ人間をサーチするって物だ。ま、いわゆる探知機だな」

「『探知機』はやめろ。そんなアナログっぽい言い方。探索^{サーチ}レンズと呼べ」

「なんで」

「そつちの方がカツコイ^{ハードボイルド}িদろ？」

「へいへい」

半ばあきれながら霧彦が返事をする。ハルも少しあきれぎみだ。と言つても、この二人は既になれているのだが。

「『探偵七つ道具』^{セブンス・アイテム}．．．．．だつたらまだ他にもアイテムが？」

「おう。あ、そうだハル。例のアレ、持ってきた?」

「ああ、あの帽子? 持って来たけど?」

「『例のアレ』って言ったんだからいきなりその正体をバラすような事言っなよっ!」

「はいはい」

ハルは半ばあきれ気味でカバンから一つの帽子を取り出す。漣はそれを受け取ると、自分の頭にかぶせる。

「それは?」

「『セブンス・アイテム探偵七つ道具』の内の一つ、『ハードボイルド帽子』だ。最近少し無茶をやりすぎてな。壊れてたからハルに直してもらった」

「ぶっちゃけただの帽子だ」と霧彦。

「何て事を言うんだ!! これはただの帽子じゃねえ! かぶるとたちまちハードボイルドになれる帽子なんだよ!!」

（.....ただの帽子じゃない）とハル。

再び、この人達に任せても良いのだろうかと不安になる清二だった。

再び気を取り直し、探索^{サーチ}レンズを使う漣。視界に、清二の魔力情報が表示されるが、なぜか誠一の現在位置が表示されない。

「あれ？ 壊れてる、ってワケでもねえし．．．．．仕方が無い。ルート検索に設定を変えるか．．．．．」

この探索^{サーチ}レンズは、使用者のポータブルと連動している仕組みになっている。漣は自分の手にはめてある指輪型ポータブルから探索^{サーチ}レンズの設定を変更する。

設定したモードはルート検索。登録した魔力情報を持つ人間が、どのようなルートを通ったかを表示出来る機能だ。

設定を、入学式当日にすれば、入学式当日にその魔力情報を持った人間がどのような道を歩いていたのかが表示される。

「こっちだ」

漣が三人を導く。その先に待つのは、一体なんなのかも解らずに。

第三話 学園ギルド（後書き）

探偵と言えばやっぱりハットの帽子に探偵七つ道具と
思っている
キリッ

第四話 侵入

表示されていたルートは、かなり複雑だった。いや、改めて見てみると、『ワザと複雑に歩いている』としか漣には思えなかった。

普段、兄妹が通いなれていた通学路を大きく離れ、街中にまで来ていた。また、この街中に来るまでに同じところを何回も通ったり、真っ直ぐに進めば良い通路を何度も何度も遠回りしていたりと、かなり時間をかけている。

「なあ、清二」

「は、はい？」

清二は二年生なので、昨日入学してきたばかりの漣に呼び捨てにされるのは本来ならば本意なのだが、清二はそんな事は気にしなかった。少し気が弱いという所もあるせいなのかもしれない。

「お前の兄ちゃんって、何かしてたのか？ 例えば、研究とか」

「あ、えっと、確か術式の研究をしてました」

「術式の研究？」

「はい。大規模の質量を短縮し、保存する事の出来る術式の研究です。兄自身の得意な魔法とは違いますが。兄は学園の『研究部』に所属していて、色々なテーマの研究をしてましたから。それなりに名も通ってるんですよ」

「ふーん」

術式。

魔法を再現するに当たって、術式というのは重要だ。言うなれば『術式』は『魔法を再現させる為に必要なデータ』なのだ。

どんなに優秀な魔法でも、起動させる為の術式データが無ければ使う事は出来ない。それと同じだ。

しかし逆に言えば、術式データを改良すれば、再現する魔法も変わってくる。同じ魔法でも、術式が違えば少なからずとも効力が違ってくる。

例えば、『炎を出す魔法』を再現するとする。そして術式を、『燃焼量を増やす術式』を組めば、その炎の燃焼量は上昇して物を燃やす量が増え、そして『燃焼範囲を増やす術式』を組めばその再現する炎の魔法の燃焼範囲が増えるだろう。

魔法の再現の『発動』と『性質変化』。それこそが、術式の主な役割だ。

「術式の研究って複雑らしいし、それで名が通ってるのなら結構頭の良い兄ちゃんだったんだな」

「はい。．．．．．僕の、いえ、僕達家族の誇りです」

と、まさに誇らしげに言う清二。実際、言葉の通りに思っているのだろう。

その後もしばらく、漣達は歩く。ルート検索で、最終地点を表示させる事も可能だが、被害者が通った道筋を辿るのも重要だ。

「それにしても、最近は何騒ね。連続誘拐事件とかも起こってるらしいし」

「そうだな。今回のこの依頼も、その連続誘拐事件に関係が無かったらいいんだけどな」

と、ハルと霧彦が言う。その会話を聞いて、清二が表情を変える。

「そ、そうだといいんですけどね……………」

「いや、俺は関係がある方がいいんだけどな」

漣がそっけなく言う。その言葉を聞いた清二が驚きの表情を見せた。

「ええっ！？ どうしてですか！？ 第一、そういう事件って普通は『公式ギルド』の範囲ですよ！？ 僕達みたいな子供だけではどうにかなりませんって！」

「だって、おもしろいじゃん？」

「お、面白いて……………」

漣の言葉にガクツ、とうなだれる清二。そして、清二は、その事件にもしも兄が関わっていたら、と予想し、顔を真っ青にする。

街中を歩く四人。もう探索を始めて、一時間は経つ。辺りには本屋やスーパー、ゲームセンター等があり、学生達の姿も多い。

しかし、この中で人探しの為に動いているのは恐らく漣達だけのだろう。

「それに、その方がどうもつじつまが合うんだよなあ。まだ全部解らないけど」

「……………？ 一体何を言って……………」

「あれか」

漣が指をさす。その先に、一つのビルが建っていた。そのビルは、まるで漣達を招かざる客のように見下ろしているようにも、漣には思えた。

見つけた。

西人は、ある一つの情報を入手した。それは、突如行方をくらました清一の現在位置だ。正直、いくらか危ない綱渡りをしたのだが、それも無事通り抜ける事が出来た。

必ず情報を入手する、という気持ち。それが、西人の中に芽生え始めていた。前までならば、そんな事は考えられなかった。

危ない物からは手を引く。確実に情報を入手出来る場合のみ、挑む。しかし、今の西人にはそれだけの事をするだけの価値のある仲間が居る。

（前までなら考えられなかったよなー。こんなキモチ）

ポリポリとネットカフェの一室で頭をかく西人。因みに、ポータブルから魔法を発動させているので、ハッキングや居場所を知られる心配は無い。西人の魔法はこういった情報収集能力に特化している。他がからつきしな分、高度に出来ている。

（それにしても……………）

西人は、画面に表示されている、学園のサーバーから盗み出した入学テストの順位をじっと見る。表示されているのは、入学テスト同点一位の二人のデータ。

そして、その家庭事情。

（那覇家や学園ギルドの事もそうだけど、あまりにも知らなさ過ぎると思ったら、こういう事か……。）

西人の瞳に映る人物。

入学テスト同点一位の人物二人の画像の下に、名前が表示されている。

魔法再現者育成機関の入学テスト、というのは筆記試験だけでは無い。同時に簡単な魔力テストという物があり、その人物の現時点での魔力レベルの測定も行う。魔力レベルには、ギルドに来る依頼のように最高が『S』、その下に『A』、『B』、『C』、『E』、『F』の六段階となっている。

筆記試験、魔力テスト。この二つで入学試験であり、この二つの総合点が、入学テストの順位となるのだ。

・入学テスト順位

一位 天野漣：五百点満点。 魔力レベル：S

一位 後藤霧彦：五百点満点。 魔力レベル：S

漣のポータブルに、通話が入る。学園内で登録済みだった、西人からだった。どうやら、情報を入手したらしい。漣は通話機能をONにし、西人の通話に応じる。

「漣か？ 気になる情報をゲットしたぜ。今何処に居る？」

漣はチラリとビルのあるナビゲーションボードに目を通す。そこには、『太田ビル』と表示されている。この目の前に聳え立っているビルの名前だ。

「街中の太田ビルだ」

「こりゃ驚いた。俺が入手した情報でも、清一さんが太田ビル付近で行方をくらましている」

「ビンゴ、だな」

「もう一つ。気になる事がある」

「？ どういう事だ」

西人は、一つ間を置いて、

「どうやら清一さんだけじゃねえんだよな。行方をくらましてるの。他にも術式を研究している学生が何人か行方をくらましている。公式ギルドのデータベースに潜り込んでみたんだが、行方不明の人を

探してくれ、って依頼が何件かきてる。それも全員、術式研究者ばかりだ。最も、行方をくらました時間帯や日にちがバラバラだし、『偶然』で片付けてしまえられればそれで終わりだしな。……………でもよ、調べてみる価値はあるよな？」

「……………^{トーゼン}当然だ」

そして、漣は太田ビルを見上げる。まるで、その中に居る何かを見据えるように。帽子を深く被り、漣は太田ビルに一步、足を踏み入れた。

太田ビル。

普段は、買い手を待っている状態のただの『空きビル』状態と化しているビルだ。しかし、最近「ビルの中のフロアを一つ貸してくれないか？」という電話をかけても、「先日購入されました」というような内容の返答が返ってくるだけとなっている。

と、いうのが、西人から聞いた情報だ。ようするに、現在太田ビルは誰かが買い占めて独占しているという状態だ。外から見て、『空きビル』状態となっているように見えているという事は、日頃から使っていない、という事だ。

ビルをワザワザ買い占めて、外から見た際に機能していないように見えるのは、『中で長時間、なんらかの作業のみを行っている』という事も考えられる。

どのように使うのかは、買い手しだいなのだから。

考えようによっては『連れ去った人達を閉じ込める』事にも使う

事が出来る。

ビルの真下にある自動ドア。その前に立っても、ドアが開く気配は無い。どうやら、自動ドアは機能していないらしい。

「漣。近くに関係者用のドアがあったぞ」

「よし、そこから入るか」

自動ドアのすぐ側の所に、『関係者以外立ち入り禁止』というプレートが付けられたドアがあった。ハルが、ドアノブを持ってガチャガチャと引っ張るが、開かない。

「ダメ。鍵がかかってる。オートロックみたい」

ドアのすぐ隣に、パネルのような物が設置されている所を見ると、どうやら電子ロックがかかっており、暗証番号を入力して、その上にカードキーを差し込まなければいけないらしい。

「ど、どうしましょう?」

「どうするもこうするも、ここから入るしかねえだろ」

「でも、どうやって?」

清二が不安げな表情を見せる、しかし、漣は対照的ににやりと笑う。そして、ポケットからUSBメモリのような物を取り出した。これも、ポータブルの内の一つだ。

「こうやって」

USBメモリ型ポータブルの差込端子を伸ばす。ケーブルから伸びた接続端子を、ドア隣にあるパネルに付いている差込口に接続する。

「それは？」

セブンス・アイテム
「探偵七つ道具の一つ。『USBハッカー』だ。コイツで、電子ロックのセキュリティにハッキングをしかけて、このドアを除する」

「ゆ、USBハッカー……………」

「因みにUSBは、ウルトラすごいぜフレイカーUSBの略だ」

「相変わらず、変な略よね」

「ほっとけ」

すると、ガチャツ、と複雑な音が小さく響く。暗証番号と、カードキーのロックが解除された証だ。

「よし、入るぜ」

漣は中の様子を伺いつつ、そつ、とビルの中に入る。霧彦とハルも続く。そして、清二も続こうとした所で、漣に静止された。

「っ?」

「こっからは危険だ。外で待っていてくれ」

「えっ、いや、でも」

「依頼を達成する事もそうだが、依頼人を守る事も大切なんだよ。それだけは解ってくれ」

それだけ言い残すと、漣はビルの中へと消えていった。ドアが閉まる。閉じたドアから、再びガチャツ、という複雑な音が響いた。恐らく、オートロックが働いたのだろう。

清二は、たとえ危険だと解っていても中に入るつもりだったのだが、普段の少しお気楽な印象を受ける漣とは全く違う、その鋭いまなざしに怯んで、中に入る事が出来なかった。

その瞳の裏に、何が隠されているのかは清二には解らなかった。しかし、ただ待つ事も出来ずに居る自分が、清二の中に居るのも確かだった。

漣達は、ここまでの作業はとも手馴れた物だった。と、いう事は、普段、いや、前々からずっとこのような、危険を含むような可能性のある事をしてきたのだろうか。

自分よりも年は一つ下の後輩が。

清二は漣が、漣達が、少しだけ自分とは違う世界に居るのかもしれない、と不意に思った。

第五話 狙撃

漣達は、太田ビルの中に侵入する事に成功した。中に入ってみると、まず最初に視界に飛び込んだのは二つの巨大な螺旋状の階段。上を見上げてみると、その階段はかなり高い。最上階はるか高い所に位置していた。外見から見た太田ビルの大きさはあきらかにサイズが違う。内装から予測するに、ゆうに外見の五倍の高さはある。

「魔法か？」

霧彦が上を見上げながら言う。それに漣は、同じく上を見上げながら答える。

「そうみたいだな。再現されている魔法は恐らく『コンポジション』。本来は、よく建築工事等で建物の中を少し構成し直すぐらいに使われる魔法だが、これは明らかにその規模とはかけ離れている。かなり大規模な魔力が使われている」

「こりゃかなりめんどくせえ事になってるな。やっぱり」

漣は隣のハルにチラリと視線を移す。

「ハル。お前も外で待つとけ。ここから先は危険だ」

「何言ってるの？ 行くに決まってるじゃない。アンタ達だけじゃ心配で夜も眠れないわ」

漣には、ハルの気遣いが解った。そしてもう一度視線を移す。今

度は真つ直ぐにハルの瞳を見る。それでもハルの視線に揺らぎは無い。覚悟を決めている目だという事が解った。

「そうか。．．．．．解った」

確認だけすると、今度は一歩、中へと踏み出す。そこで霧彦が漣とハルよりも一歩前へと進み出る。

「んじゃ、ここからは別行動って事で。俺はこっちの階段から行くぜ」

向かって右の階段に霧彦は向かう。罨があるかもしれないのだが、そんな事には物怖じともせず、一段一段丁寧に上る。まるで、その未知なる階段を上る事を楽しんでいるかのように。

「頼んだぜ、——相棒」

「おう。こっちは任せろ。だから、そっちは任せたぜ。相棒」

霧彦はそれだけ言い残すと、再びその歩を進めた。

「じゃあ俺達はこっちの左の階段、だな」

「そうね。行きましょう」

漣とハルは、共に階段を上り始めた。

「チツ．．．．．」

西人は、常に漣達の行動を察知出来る様に、漣達のポータブルの反応常に監視していた。しかし、情報を与えた太田ビルに漣達が侵入した瞬間にその反応が途切れた。

「『ジャミング』か．．．．．俺の『サーチ』を妨害出来るレベルの『ジャミング』。かなり強いな．．．．．漣達は大丈夫か？」

西人の扱う魔法は『情報制御系』が多い。それに特化している為に他の魔法のレベルは決して高いとは言えないが、その分高レベルの『情報制御系』の魔法を再現する事が出来る。それゆえに多少の『ジャミング』の魔法を再現されてもある程度は探知を続ける事が出来る。しかし、その西人の魔法を妨害する事が出来る程のレベルの『ジャミング』。

これだけで、相手がかなりの実力を持っている事が解る。

（この事件、色々な点が怪しいんだよな．．．．．そもそもなんで清一さんは自分から姿をくらましたんだ．．．．．？）

現状では圧倒的に推理する為のデータが少なすぎる。

「．．．．．俺も、動くか」

西人はネットカフェから出る。自分の足で、現場へと赴く為だ。西人が動くのは、何も画面上だけでは無い。現場でしか得られないデータ情報もある。

階段を上り始めて、五分が経った。最上階はまだまだ上にある。漣が違和感を感じているのは、階段を上る途中で、フロアが一階も無かった所だ。

ひたすら、最上階へと続く階段ばかりだ。ただただ、足の疲れだけが蓄積していく。

「この階段、一体何処まで続いているの………?」

ハルがそう呟いた瞬間だった。漣が階段を一段上ると、突如広い空間へと出た。さっきまでこんな広い空間は無かった。突如、現れたのだ。

「建物内の自在構成だけじゃない………まさか、空間制御までこなしているのか?」

通常、一つの魔法を再現したその上に、別の魔法を再現する事は難しい。なぜならば、ただでさえ複雑な術式がさらに複雑になるからだ。その上魔法同士の相性が悪ければ術式が乱れ、元の魔法の効力が弱体化する恐れもある。

このビル内部に施されている魔法は『コンポジション』。その基本的な効力は『一定範囲の物質の構成変化』だ。要は、指定した範囲にある物質を変化させる事が出来る、という効力だ。そして、その『コンポジション』の術式の上から、新たに『空間制御系』の魔法を組み合わせて再現。指定した空間を変化させる魔法により、漣達をその空間の中へと誘う事に成功したのだ。

気がつく、さっきまで隣の螺旋階段を上っていた霧彦の姿が見えなくなっていた。やはり、ここは別の魔法によって生み出された空間なのだと認識する漣。

目の前に広がる広い空間は、パツと見は広場のようなだった。漆黒

の床が、あたり一面に広がっている。上へと続く階段は見当たらない。

完全に閉じ込められてしまった。恐らく、罠なのだろう。空間制御系の魔法に閉じ込められると、術者が解除するまでは基本的に出る事が出来ない。

「閉じ込められたみたいね……………」

「不安か？」

「あ、当たり前でしょ！」

ハルだって、空間制御系の魔法についての知識はある。だからこそ、不安になるのだ。

そしてその時、まるでタイミングを見計らったかのように漣とハルに向かって、弾丸が放たれた。

「……………ッ!!」

それにいち早く気づいたのは漣。すぐさまポータブルから魔法を発動。紅い刀を出現させ、放たれた弾丸を一刀両断する。

キンツ、と軽い金属音が漣の足元から二回響く。ハルは漣の足元に落ちた弾丸の残骸を見て、驚きの表情を見せる。

「っ!？　だ、弾丸!？」

「どうやら、敵のお出ましだな」

どこから狙撃してきたのかは解らない。しかし解っている事は、敵は漣とハルの位置を把握しているが、漣とハルには相手の居場所が

解らないという事だ。

「あつちは空間制御系の魔法で俺達を閉じ込めているからな。姿を隠すのも思いのまま。完全にアウェーだ」

「それは解ってるわよ。けど、私が一番心配なのはどうやってこの状況を切り抜けるかって事よ！」

ハルが叫んだその瞬間。再び、二発目が放たれた。狙いは漣。ハルはいつでも倒せると判断しての事だろう。そして今度は漣は、手に持つ刀で弾丸を切ろうとはしなかった。漣は、自身の頭に放たれた弾丸をギリギリまで避けなかった。狙いは、観察。弾丸の発射ポイントを見切る為だ。

（見えた．．．．．！）

漣は、弾丸を避けた。避け方は至極簡単。ただ頭を少し逸らす。ただそれだけだ。頬に弾丸がかすむ。赤い血が、一筋の雫となってタラリと頬をつたう。

掠めた弾丸が、床に突き刺さる。広い空間に響き渡る、弾丸が地面を抉る音。その中で、漣は反撃の糸口を見つけていた。

漣とハルを狙撃しているのは、ある一人の男だった。男は再現した自身の魔法により、漣とハルを魔法空間の中誘い込む事に成功した。もはやこの空間の中は男のホームグラウンドだ。この空間の中に限って、男は自在に身を隠す事が可能だ。

最初の第一射。漣はその弾丸を軽々と防いだ。それだけならば別に驚かない。確かにこの魔法によって作り出した空間の中に閉じ込め、行動を制限はしたが、別に魔法を使えないようにしたわけでは

ない。これぐらいの事では男は動じない。

しかし、第二射目。漣は避けなかった。男にも、漣の狙いが解っていた。恐らく、狙撃ポイントを見切る為だろう。男は、この空間制御の罠を仕掛けた時に、そういうケースも考えた。侵入者が男居場所知る為に、弾丸の発射コースから弾丸の発射ポイントを調べようとすることは。

この男の手に持つライフルは、勿論魔法で再現した物だ。弾丸の発射コースを見切られないようにするためにこの空間内限定で、弾丸にある程度のコース変更を行えるようにしている。放たれた弾丸は男の意思で、あらゆる角度に曲がり、発射コースを変自在に更する事が出来る。

……
それでも。

男は見た。第二射を避けた漣が、見えないはずの自分を見つめていた事を。

そもそも、男は漣があんなギリギリのタイミングで弾丸を避ける事自体可笑しいと思った。漣の魔法は見た限り、あの紅い刀を構成する魔法。

弾丸をかわす、という事は、魔法による物だと考えていた。しかし、漣の魔法は紅い刀を構成する魔法には、なんらかの術式により弾丸を切る事は出来ても、かわす事は不可能のハズだ。

第一射の時もそうだ。常人では弾丸を見切り、刀で切る事が出来るわけが無いのだ。

（まさか……………）

しかし今のこの現象に、男には思い当たる物があった。

魔力才能（Magic Talent）。通称、MT。

はるか昔に魔法という文明は滅びた。しかし、『魔法の才能を持った人間は滅んでは居なかった』。例えばMTというのは、魔法に関する才能を持った人間の事だ。特別な才能と言ってもいい。このMTを持つ者は、魔法が再現され、MTの発見に至るまで『超能力者』や『霊能力者』と呼ばれていた。

元々その人が持っていた才能を魔力が強化している、という物だ。ありえない反応速度。発射ポイントの特定。

あの紅い刀では不可能な現象でも、MTによる物ならうなずける。しかも、MTを二つも持っていると考える。そうでなければ弾丸には反応出来ても発射ポイントの特定までは行えない。

(恐らく、あのガキの持つMTは『反応速度』と『先読み』、か?)

『反応速度』のMTで弾丸を避け、『先読み』のMTで発射コースを読んだ。と、男がそう結論付けようとした瞬間、漣が見えないハズの男に語りかける。

「俺のMTは、『反応速度』と『先読み』、と考えてるな？」

(・・・ッ!)

完全に、考えを読まれている。

「『反応速度』は確かに正解だが、『先読み』は少し違う。俺のMTはその上に行く。ま、ヒントを上げるとすれば『先読み』の上位互換、って所か？」

（『先読み』の上位互換．．．．？　どういう事だ？）

男は勿論声をあげてはいない。しかし、漣は男の反応が解っているというように語り続ける。

「そもそも、『先読み』程度ならMTじゃなくてもある程度訓練すれば誰だつてある程度習得出来る。けど、俺のMTは違う。のもう一つのMTは、言うなれば『映像化』だ」

（『映像化』、だと？　なんだそのMTは！？）

魔法の再現技術が生まれた現代に置いて、MTの発現者もある程度確認されている。同時に、どのようなMTが開花したのかも近年徐々に明らかになっている。その中に『反応速度』や『先読み』というMTも確認されている。しかし、男は『映像化』というMTは知らなかった。

「簡単に説明してやるとすると、『先読みした現象を頭の中で映像化出来る』って事だ。『先読み』だけなら相手がどんな行動を取るのか、『どのような選択をするのか』が解るだけだが、俺の『イメージ』の場合は先読みした行動を映像として映像化する事が出来るから、お前の弾丸の軌道や、相手の『動き』まで読む事が出来る。弾丸の発射ポイントをつかめたのも、映像化した弾丸の軌道を辿っただけだ」

（なっ．．．．！）

この話が本当ならば、確かに漣が弾丸をかわしたり、発射ポイントをつきとめたりしたのが解る。

男はすぐさま作戦を変更した。銃口の狙いを定め、弾丸を放つ。狙ったのは、――ハルだ。

漣は『映像化^{イメージ}』の最初の段階、『先読み』でその事を察知。同時に、手の中の紅い刀を変化させる。

漣の手にはもう刀は無い。構成されたのは、緑色の、盾。手の甲に巨大なひし形の盾が構成されていた。その盾で、漣はハルの前へと回り込み、を弾丸から守る。チュインツ、と盾に弾丸が弾かれる音が響き渡る。

「大丈夫かつ！ ハルツ！」

「う、うん。ありがとう」

ほっ、と胸をなでおろす漣。そして男は、その闇の中で驚きの表情にまみれていた。

（刀が盾に変化した！？ バカなッ！）

再現される魔法の中で、『刀』が『盾』に変化する魔法は存在しない。術式の構成でなんとかなる物でも無い。いや、変化させる事だけなら可能だ。しかし、成功したとしても術式の相性が悪くてその効力は半分にも満たないだろう。そもそも、『相手を攻撃する術式』を持つ『刀』の魔法に対して、その間逆の『相手の攻撃を防ぐ術式』を持つ『盾』の魔法の相性が良いわけが無い。

そして、考えられる答えは一つ。

「まさかその魔法、『オリジナル』かつ！？」

この時初めて、男は声をあげた。

『オリジナル』。

現代の魔法は、『昔存在していた魔法を再現』した物だ。しかし、その逆の魔法が存在する。それが、『現代で新たに生み出された魔法』、だ。

現代で新たに生み出された魔法。その魔法は、『オリジナル』と呼ばれる。

漣の持つ魔法こそ、まさしく『オリジナル』の魔法だ。

その名を、

「———」
『システム^{システム} - Delta^{デルタ}』。それが、この魔法の名だ。ついでに説明するとシステム^{システム} - Delta^{デルタ}の特徴は『三段階の術式変化』。つまり、あともう一段階の術式変化を残している」

男はあせる。恐らく、今撃ち込んでもまた防がれるのだろう。そして、男がこの状況をどうやって反撃しようかと策をめぐらせようとするよりも早く、漣の手の中のシステムデルタの術式が変化した。

変化した『システム^{システム} - Delta^{デルタ}』。その形状は———銃。そして漣は、青い銃の銃口を目に見えぬ男へと向ける。男の中に、確かな焦りが生まれる。

「お前は一体、何者だ!？」

「———探偵だ」

漣は鋭いまなざしを、姿の見えぬはずの男へと、確かに向ける。そしてハルに向かって、優しく語り掛ける。安心させるように。

「ハル」

「な、何？」

「お前が心配するような事は何も無い。．．．俺が、守ってやるからよ」

「えっ？」

漣は呟くと同時に、その引き金を、引いた。

ガンッ！！ と銃口から轟音が響く。銃口から放たれた弾丸は正確に、男の持つライフルへと突き刺さる。同時にライフルが爆散し、自身の武器であったそのライフルの破片が男を襲う。

その瞬間、男の再現した魔法が解除された。気がつくやうに漣とハルは、本来の姿に戻った太田ビルの最上階に居た。

漣とハルから離れた所に、自らの武器に襲われた男が倒れていた。

第五話 狙撃（後書き）

ついに、ついに主人公の能力が発動した・・・ッ！！

第六話 剣 対 銃

霧彦は、螺旋階段を上り続けていた。途中、漣とハルの姿が消えたのを霧彦は見た。恐らく、敵の罠にかかったのだろう、と推測する。

空間制御系の魔法を罠として設置されていた場合、やっかいなのは罠を感知するのが難しいという事だ。少なくとも、『相手の魔法を感知する魔法』でも使っていないければその罠をかくぐる事が出来ない。

漣は現在も『探知レンズ^{サーチ}』をつけていた。探知レンズ^{サーチ}を使ってこのビル場所をつきとめた時も、正確には『居場所をつきとめた』のでは無く、『清一の反応がこのビルから途切れていた』からだ。

このビル全体に、探索系魔法や、情報操作系の魔法を阻害する妨害系魔法の内の一つ、『ジャミング』の魔法が再現されているのかもしれない。

ゆえに、探知レンズ^{サーチ}の機能も発揮せずに罠を感知出来なかったのかもしれない。

「『ジャミング』に『コンポジション』、それに加えて空間制御系の魔法。三つの術式を一度に組み合わせ、それでなおかつ大規模展開……単独で出来るレベルをはるかに越えているな」

自分なりに分析しようとするが、しかし犯人までは解らない。そもそも、犯人にあげるべき人物も居ないのだ。

そして、階段を上っていたハズの霧彦の周囲が、変^{かわ}わった。

「お出ましか」

霧彦は手に、ポータブルから自身の魔法である銃を展開する。ハンドガンそして敵の攻撃に対する警戒を始める。

そして、周囲がゆがみ、構成され、分解され、そしてまた構成を始める。霧彦を、術者が作り出した空間の中へと誘っているのだ。

霧彦は微動だにしない。しかし警戒も怠らない。やがて、空間の構成が終了した。霧彦が居たのは、大広間だった。

周囲は石で出来ており、床は赤い絨毯のような物が敷かれている。しかし、壁には窓も無い。登っていたハズの階段もいつのまにか消えていた。まさしく、敵の作り出した空間の中に入ったのだ。

敵の作り出した空間。その中に居ても、霧彦は動じない。ただひたすらに、敵からのアクションを待っている。

コツ．．．．．と、四方を石の壁に囲まれ、入り口も出口も無い空間から足音が響いた。霧彦は靴音が響いた背後へと振り返る。

そこにいたのは、男。手には剣を持っている。年は二十代前半だろうか。若く、そして整った顔立ちをしている。

トラップ
「畏に引つかかったと思ったら子供か。どういう事だ？」

「さあな。こつちだつて驚いてるよ。単なる人探しかと思つたらこんなバカみたいな大規模魔法を使うヤツ等と戦わなければいけないなんてな」

「人探し？ ああ、集めたヤツ等の事か。それは残念だったな。あの子供達にはやつてもらわなければならない事がある。その為には、子供と言つても加減はしない」

「加減？ 要らねえよ。そんなもん」

霧彦は手の中にあるハンドガンをかまえる。そしてその銃口を、敵の男の方に向ける。

「俺は卑怯者の影岡のように隠れたりはいしない。俺の名は海道茂^{かいどうしげる}。子供。名を名乗れ」

「．．．．．後藤霧彦。探偵だ」

ゴッ！　と、空気が揺れる。霧彦が名を名乗った瞬間、海道は前へと踏み込んでいた。元々両者の間にあった距離は目測で約十メートル。それを海道は、たった一歩で詰める。容赦なく、その剣を振るう。

しかし、霧彦はその一太刀を避けた。剣の振るわれる軌道を読み、後ろにバックステップした。刃がギリギリの所で、霧彦の目の前で、空気を斬った。

霧彦は手の中にあるハンドガンの安全装置を外す。そして、ハンドガンを構える。霧彦の持つハンドガンは、形は五十口径拳銃に似ている。しかし、通常、五十口径拳銃は日本人には向かない銃だが、これは霧彦自身の魔法であるためにそういった問題はクリアするうちに術式が組まれている。

霧彦はなんのためらいも無く引き金を引いた。狙いは剣を持つ、手。ガンッ！！　という轟音が部屋の中に響き渡る。しかし、海道はその動きを読んでいたかのように銃口から弾丸が発射される前から動いていた。サイドステップで右に弾丸をかわす。

外れた弾丸は部屋の床を挟る。血のように赤い床の絨毯を突き破り、冷たい石の床に弾丸が突き刺さった。

「剣対銃。この距離に置いては勝負にもならんやつ！」

海道は叫びつつもその距離を詰める。霧彦はハンドガンで反撃する事は間に合わない。よって霧彦は、ハンドガンで剣を防いだ。

ガギンツツッ！！ とハンドガンの銃口が、剣と激突する。

「いいのか？ そんな銃で受け止めて。この剣は採掘系魔法の術式を組み込んでいる。固い岩石等を削ったり砕いたりするのが得意な採掘系魔法の術式を組み込んでいるこの剣は、貴様の武器すらも削り取り、破壊するッ！！」

海道が剣を霧彦のハンドガンに押しつける。ガリッ、ゴリッ、と言った嫌な音がハンドガンから響く。しかし。ハンドガンには傷一つ無い。

「……………ッ！？」

霧彦は、海道の表情が変わったその瞬間をつき、ゴッ、と海道の腹部を蹴り上げる。

「がっ！」

同時に、ハンドガンから銃弾を放つ。しかし海道はサイドステップで通常の倍の距離を瞬時に移動し、その銃弾をかわした。恐らくなんらかの加速系魔法を使っているのだろう。

海道は、霧彦の手の中にあるハンドガンに目を向ける。その白いハンドガンは鈍い光を放っている。

「気になるか？ コイツが」

「……………」

海道は、腑に落ちないで居た。その、霧彦のあまりにも精密な射撃に。

今まで霧彦の放った弾丸は、全て海道の剣を持つ手を狙っていた。一見なんとも無い事だろう。しかし、それが可笑しいのだ。放たれた弾丸は全て剣を持つ、右手に対して直撃コース。

……
全て、狂い無く。

不自然なのはその年齢。海道は目測で十六歳の少年だと判断した。（実際はその通りだが）こんなにも正確に、しかも戦闘中に行うとなると、その難易度はさらに高くなる。

普通の少年ならば、こんな事は不可能だ。しかし、それを可能にする方法を海道は知っている。

（まさか、MTか……ッ！！）

元々持っているある一定の才能を、魔力によってさらに強化された才能だ。なんらかのMTが目の中の少年にあるならば、この精密な射撃もうなずける。

そしてその『なんらかのMT』とは――

「『集中』。それが貴様のMTか？」

「……当たり前ッ！」

言い放つと同時に霧彦は弾丸を放つ。響き渡る轟音。しかし、今度は海道の振るわれた剣によって弾丸があつさりと弾かれる。

それでも霧彦は反撃を止めない。次々と弾丸を放ってくる。海道は防御にまわらざるおえない。距離を詰めれば確かに剣の方が分があるのかもしれない。

しかし、海道は魔法により脚力を強化している。よって、通常の行動ならばとかく、とっさの回避ともなるとどうしても制御が不安定となり、回避の為の一步がどうしても大きくなる。

距離が開く。それはつまり、剣が不利となり、銃に分がある、という事だ。それに加え、霧彦の白いハンドガンは魔法で造られた物。よって、弾切れが存在しない。銃内で弾丸を構成して、そのまま放つ。

（『集中』、かそれならば考えられる。これほど連続し、そしてピンポイントで弾丸を放ち続けるなど、MT、もしくは魔法以外は考えられない）

海道は、剣を振るい、弾丸を放ちつつ別の魔法を再現する。再現した魔法は、構成タイプの魔法、『ウォール』。自身の目の前に、床の物質から壁を構成する魔法だ。海道は、すぐさま『ウォール』を発動。

目の前に構成された石の壁が、霧彦の放った弾丸から海道の身を守る。石の壁に弾丸が突き刺さり、容赦なく石を削り取る。

数秒しか保たないだろう。しかし、海道にとってはこれでよかったのだ。少しの間でも、弾丸から逃れ、反撃する事が出来れば。

石の壁から強化した脚力で回り込み、横から距離を詰める。霧彦はかろうじて、一撃だけ弾丸を放つ事が出来た。攻撃方向がいきなり変わった為だ。

しかし、ある程度の反撃は海道も読んでいた。放たれた弾丸を剣で弾く。

ゴッガアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ンツツ！！ と、弾丸を弾いた剣が、爆発した。

「がっ
・
・
・
・
・
・
あっ！？」

海道は、理由が解らなかつた。なぜ、剣が爆発したのか。しかし、その答えは霧彦が呟いた。

「なぜ急に剣が爆発したのが解らない、って顔をしてるな？ 答えを教えてやる。お前の剣が爆発したんじゃない。『俺が撃った弾丸が爆発したんだ』」

「……………ッ！！ その、ハンドガンは、まさか、『オリジナル』……………かつ！？」

「『SYSTEM - システム Epilson エプシロン』。これが、俺のオリジナルの魔法の名だ。そしてその能力内の一つは『あらゆるタイプの弾丸の構成』にある」

今、霧彦が放ったのは、『ショック』魔法を持つ弾丸。対象と衝突した瞬間、魔力爆発を起す弾丸だ。

『SYSTEM - システム Epilson エプシロン』は、瞬時にあらゆるタイプの弾丸の換装を行う事が出来る。同じ弾丸でも、それが同じ能力をした物かは解らない。

「どんな弾丸ものが来るか解らない銃。面白いだろ？」

「くっ……………！！」

海道は、ダメージを負いながらも、立った。砕けた剣を握り続け、立つ。

「命までは取るつもりは無い。けど、まだ立ち上がるなら俺はお前を——撃つ」

銃口を、海道へと向ける霧彦。そして、弾丸を放つ。

「ッ!？」

海道は、それがなんなのか解らなかった。放たれたのは、『青い光』。それは進むこと無く、一定の距離を進んだ後は止まり、空中で静止し続けている。

「なんだ．．．．これは!？」

「今に解るさ。そしてこれが、最後だ」

霧彦は、青い光に向かって今度は『赤い光』を放つ。赤い光が青い光の中に飲み込まれた瞬間、ザンツツツ!!! と、海道の周囲を銃弾が駆け抜け、青い光の中に飲み込まれた。

「．．．．．ぐッ!？」

「『集約弾』」

この弾丸、『集約弾』は、簡単に言えば『一度放った弾丸を一点に集約させる弾丸』だ。霧彦は無意味に弾丸を放ち続けたわけではなかった。全ては、この一撃の為の布石。

一度攻撃の為に放ち、何も出来なくなった弾丸を、再び攻撃の為に使用する。

海道の体は、集約された弾丸によってボロボロとなっていた。そして、海道は力を失ったように倒れ去った。同時に、周囲の空間制御系の魔法も解除される。

たどりついたのは本来の内部の姿を取り戻した太田ビルの最上階。そして霧彦から少し離れた所に、漣とハルが居た。

漣が、霧彦に気づき、そしてにやりと微笑む。

「どうやら互いに無事だったようだな。——相棒」

「……ああ」

霧彦は苦笑しつつ、罨を切り抜けた相棒に向かって呟いた。

第七話 ハッキング・探索・解析

「あれ？ 清二さん？」

西人が太田ビルに駆けつけてきた。そして西人が見たのは、ビルの前で立ち尽くしている清二だった。清二も西人に気づいたようだ。

「どうしたんスか？」

「ああ。西人君。漣君達が入っちゃってね。僕は外に居るように言われたんだ」

「ふーん」

西人はまるで興味が無いといった様子だ。そして手に持っているのは、一台のノートパソコン。この時代のパソコンには全てポータブルが内蔵されている。ポータブルは魔法を再現させる為に必要なツールで、この時代の重要な携帯端末だ。

ポータブルは一つあれば通話からデータ編集まで様々な事を行う事が出来る。しかし、パソコンレベルともなると、その処理スピードや、処理する事の出来る情報量は段違いだ。

一般的な指輪型ポータブルよりも高速で、大量の情報を処理出来る、という点では、一般のポータブルよりも高性能だ。しかし、パソコンで魔法を再現する事は出来ない。いや、厳密に言うならば、『術式を構成する事はパソコンでする事は可能だが、再現は出来ない』という所だろうか。

一般的にパソコンに内蔵させているポータブルは『魔力による情報処理能力』の一点に特化している。よって大量の情報を高速で処理出来るが、再現までは出来ない。

構成した術式を魔法の再現出来るポータルにインストールすれば、パソコンで構成した術式、魔法を再現可能だ。

「ノートパソコン？ 一体どうするのですか？」

「へへっ。こーするんですよ」

ノートパソコンを地面に置き、そして別に持っていたケーブルと関係者用のドアに付いている端末とノートパソコンを繋ぐ。そして何やらタタタツ、とキーボードを叩き始めた。

「な、何してるんですか？」

「んー？ ハッキング」

（……なんだからもう犯罪行為ハッキングが当たり前なのかな。最近の一年生って）

すると、すぐにその関係者用のドアのロックが解除された。

（この自動ドアも危ない気がする………こつも高校一年生に簡単に開けられちゃうと………）

しかし、西人はパソコンの操作を止めない。まだキーを叩き続けている。

「ドアは開きましたよ？」

「解ってますよ。でも、このビルの端末から敵の魔法の術式に干渉して『ジャミング』を崩しておこうと思ってますね。これじゃあ連

絡もとれやしないし、その上中の状況も解りやしない。清二さんも、連絡が取れるようにしておいた方がいいでしょう?」

タタタツ、と口を動かしながらもキーボードを叩く西人。清二が画面を見ても膨大な数の数字や文字が表示されているだけで、何がどうなっているのかは解らない。今行っているのは魔法の術式に干渉している事だから、清一が見れば何がどうなっているのかが解つただろうな、とぼんやり考える清二。

「よしっ、終わりっ」

西人が最後のキーをタンツ、と叩く。その時、太田ビルの周りに居た清二にも解るぐらいに、空気が一瞬、震えた。

「これだけ強力で大規模な術式だったから、ムリヤリ崩すとやっばり少なからず影響が出るか。まだまだだな。俺も」

そう呟くと西人は手にある一般的な指輪型ポータブルから通話機能を展開する。通話をかける相手は勿論、漣だ。

霧彦と合流した漣とハルは、最上階の探索を開始しようとしたその瞬間、漣と霧彦、そしてハルは空気の震えを感じた。元々魔法を再現していたのは、この太田ビルの内部。その魔法がムリヤリ崩された為、外部よりも内部に強く影響が出たのだ。

「なんか今…….空気が震えたっていうか…….」

「そうだな。俺も感じた」

そして、漣のポータブルに通話が入る、西人からだ。

「よう大将。『ジャミング』の術式なら崩しておいた。これで『サ
ーチ』が出来るハズだ」

「お前か。ナイスだぜ。西人」

「どうやらそっちにはそっちの探索用ツールが有るみたいだから、俺はそっちの状況を把握する事に集中するよ。ビル内部マップは要るか？」

「頼む。それと、敵の情報が欲しい」

「オツケー。倒した敵とか、居る？ お前なら先兵程度なら軽く蹴散らしてそうだけど」

ケラケラと西人が笑う。

「俺と霧彦で一人ずつ倒した。こいつ等をどうすればいい？」

チラリと倒れている二人の男を見る漣。

「……………マジでか。軽く蹴散らしたとかは冗談だったんだけどな……………ああ、倒したならそいつ等の顔写真を頼む。まあポータブルもあれば言う事ないんだがな」

「解った。顔写真は送るとして、ポータブルはそうだな。ハルに持
っていかせる」

「はあ！？　なんで私！？」

ぎゃあぎゃああとハルが漣の隣で騒いでいるが、漣は気にしない。

「つーか大丈夫なのか？　こんな安易に電話なんかしてきて。盗聴されてたら？」

「そこは大丈夫だ。ちゃんと対盗聴用の『ジャミング』をかけてある」

「さすがだな」

「へへっ。俺を誰だと思ってるんだ？」

その後電話を切り、漣は二人の男から指輪型のポータブルを取り外し、顔写真を撮る。そしてメールに添付して西人に送信する。その後で、ハルに男達から奪ったポータブルを手渡す。

「ハル。頼む」

「……………はあっ。わかったわよ。仕方が無いわね」

そしてハルは来た階段を下りる。さっきまでは構成系魔法、『コンポジション』と空間制御系魔法で構成されていた為に巨大な構造をしていたが、もう元の大きさに戻った。下のフロアには敵は居ないだろう。居れば罫など張らないのだから。よって、下に引き返せば安全だ。

「ありがとな」

「そのかわり」

くるり、と階段に歩を進めるハルが振り返った。そしてその瞳でじっ、と漣を見つめる。

「——必ず、帰ってきなさいよ」

「……………ああ。約束する」

漣は、そのハルの揺れる瞳が本当に心配してくれているのが解った。それが解った上で、漣は返事をしたのだ。

そしてハルは階段へと、安全な領域へと歩を進めた。対して漣と霧彦は、未知なる危険な場所へと足を踏み入れる。漣は深くハットの帽子を被った。

「行くぜ相棒。俺はどうやら必ず帰ってこなければいけないらしい」

「へいへい。ったく。めんどくさいバカカップルだな」

二人は、共に歩を進める。未知なる、闇へと。

「……………バカカップルってなんだ？」

「この鈍感野郎」

どうしてこうなったんだろう。

少女は、思う。そして、振り返る。

—— 始まりは、たった一つのメールからだった。

『アナタの力が必要です。是非、アナタの術式の研究を我々の為に役立ててくれませんか？』

日田陽子は、先日魔法再現者育成機関第千百二十七学園に入学したばかりだ。しかし中学の頃から、魔法の術式の研究をしていた。元々陽子は本が好きだった。たくさん本を読んで、沢山の知識を得た。そして、その知識を生かしたいと思い、術式の研究をはじめた。そしてその研究を役立てたかった。父と母のように。

得た知識を生かしたいと思って術式の研究を始めたのも、研究者である父と母の影響だろう。そして中学に入った頃に陽子が術式の研究を始めると、両親はとても喜んでくれた。陽子には、それが嬉しかった。そして、もっと両親のよろこぶ顔が見てみたいと思った。そして、頑張り続けた。

陽子が研究でなんらかの成果を出すと、両親はまるで自分の事のように喜んでくれた。その事が、陽子にはどんな賞をとった事よりも嬉しかった。

さらに陽子は頑張った。次はどうすれば両親が喜んでくれるのだろうか。そんな事を考えていたある日、このメールが来た。

自分を必要としてくれている。

そして自分を必要としてくれている人を助けてあげれば、両親は喜んでくれるのだろうか。

陽子は、その差出人不明のメールの依頼を受けた。そして数日後、太田ビルに陽子は足を踏み入れた。最初に、大きな部屋に入れられた。

そこには様々な術式研究の為の設備が備えられていた。

部屋へと案内した男は、陽子を部屋に入れる前にポータブルをいきなり取り上げ、ただ一言だけこう言った。

「そのパソコンにある魔法の研究データが入っている。そのデータの術式を完成させる」

そこからは、ただただ作業の連続だった。最低限の休みや食事しか与えられず、それ以外は作業に集中。しかも完成させると言われたデータはまるで意味不明だった。

しかも任せられているのは何か巨大な術式のデータの一片のようだ。ますます意味が解らなかった。そんな意味の解らない術式の完成など、どうすれば出来るのか。しかし、それでも、両親の元に帰りたい一心で必死で術式を完成させていった。

そして、ある時に聞いてしまった。それはトイレへと行こうと部屋を出ようとした瞬間だった。部屋の外から、陽子をこの部屋へと入れた男の声が聞こえたのだ。

「もうすぐ『パターン五十六』の作業が完了します。ガキにしては驚異的なスピードです。あのガキは？ はい。解りました。作業終了後に『あの部屋』に集めてからまとめて——」
「消します」

「. . . . ツー!!」

身が凍るような思いだった。

何とかしなければいけない、と思った。だけど、どうする事も出来なかった。ただただ、心の中で叫び続けるしか無かった。

（誰か、助けてっ!）

しかしその叫びは、誰にも届かない。

「見つけた」

漣は、復活した探索^{サーチ}レンズで、清一の居場所を突き止めていた。さらに、西人のくれたマップデータもある。一番効率の良い通路を通って来る事が出来た。

しかし、問題があった。まず部屋が二つある。一つの部屋の前に、もう一つの部屋がある、といった形で。そこは問題では無い。問題なのは、見張りが居る、という事だ。

探索^{サーチ}レンズでサーチ出来るのは清一のように魔力情報をインストールした人間、もしくはデータを登録している人間のみだ。

「倒すか」

漣が身構える。

「俺は手をださなくていいよな？」

「ああ。俺一人で十分だ。それに、相手がどんな反撃を行ってくるか、大体、映像化^{イメージ}出来る」

漣は、手の中に紅い刀を展開し、踏み込む。数秒遅れて、見張りの男が気づく。魔法を再現しようとする男。しかし漣は男が魔法を展開するよりも早く、男に刀で一閃を与える。

「がっ……………!!」

「安心しろ。峰打ちだ……って、もう聞いていないか」

ずるり、と男は力を失ったかのように床に倒れこんだ。

「さて。まずはドアをなんとかしなきゃな」

漣がドアを見てみると、今度は入ってきた時の自動ドアではなく、鍵付きのドアだった。電子ロックのドアでは無いので、ハッキングは行えない。入るには鍵が要る。

「この男が持ってたらしいんだが、のんきに探している時間は無いな。『USBハッカー』を使う」

漣はポケットからUSBハッカーを取り出す。そしてUSBハッカーの端子をぐいつ、と押す。すると、逆の方から複雑な形をした針金のような物が飛び出した。USBハッカーが行えるのはハッキングだけではない。実際の鍵も開けられるように、どんな鍵穴にも対応出来る形にした針金が展開出来る様になっている。

そして漣は、清一の反応のする部屋のドアをまず開けた。ガチツ、と鍵が開いた音が響く。

「そっちはどうする？」

「念のため、ぶった切る。何があるのか解らないしな。それに」

「それに？」

「……そっちの方がハードボイルドだろ？」

「いっぺん頭冷やして来い。この半熟野郎」

漣は、ドアのすぐ側に人が居ないのかを察知し、紅い刀を構える。

「……………いくぞ」

「おう」

バンツッ！！と霧彦はドアを勢い良く開け放つ。そして漣は、ドアを真つ二つに一刀両断した。ゴトン、とドアが倒れ、鈍い音が響き渡った。

霧彦が中に入る。そこに居たのは、何やらデスクの上に座ってパソコンで作業をしていた清一だった。清一は突然入ってきた霧彦に驚き、そして霧彦がこのビルの間では無い事を知ると、ほっ、としたような表情を見せた。心から安堵した表情を。

「……………小野田清一さん、ですね？」

漣は、扉を一刀両断し、部屋の中に入った。そこには一人の座り込む少女が居た。見た目は漣と同じぐらいの年の、物静かで、おとなしそうな少女だった。

そして少女は顔を上げ、漣の存在に初めて気づいたようだ。

「誰？」

「俺は天野漣。探偵だ」

少女の中に、沢山の思いが溢れかえった。

「ふいー。なんとか依頼は達成出来そうだな。漣……………」

ピタッ、と霧彦の言葉が止まる。それは、目の前の光景を見たからだ。

簡単に説明すると、目の前の漣が、一人の少女に、『抱きつかれていた』。

その少女は唇を振るわせる。

「……………こわかつ……………た……………っ！」

「ああ……………もう大丈夫だ。安心しろ。俺が、俺達が助けてやる」

そんな光景を見て、霧彦は、はあっ、とため息をついた。

「あーあ。こりゃめんどくさい事になりそうだ」

その頃。ハルは下の西人達と合流し、西人の解析結果を待ち続けた。ハルはただただ、中の状況だけが気になる。

「……………っ？」

「ん？ どうした如月？」

「いや、なんかこうイラッ、と来たというかなんというか」

「そりゃ恐い」

タンツ、と西人がキーを叩く。そして、解析の結果が現れた。その解析結果に、西人は目を疑う。

「これは．．．．．」

もしかしたら自分達はとんでもない事件に首をつっこんでしまったのかもしれない、と西人は思った。

第八話 救出／分断

「名前は？」

「日田．．．．．陽子」

漣達は、とりあえず、さっきの二人の男が倒れている居場所まで引き返してきた。清一と陽子の状態を落ち着かせ、状況の説明や事情を聞きだすためだ。

「どうしてここに？」

「ある日、急に突然．．．．．メールが来たんです」

「メール？」

漣は眉をひそめる。そしてその陽子の発した言葉に反応するように清一が言葉を紡ぐ。

「僕の所にもメールが来たんです。『術式を完成させてくれないか』と。僕はそれに同意しました。でも、危険な事だったので家族に心配をかけたくありませんでした。それで勝手に弟を放り出して、飛び出して．．．．．」

清一がうつむく。そして、漣は陽子に質問した。

「部屋に閉じ込められて何を？」

「この術式を完成させろ、と言われたんです」

「術式？　どんな？」

「．．．．．『一つの魔法の術式』、というよりは、『何か巨大な魔法の術式の一片』という感じでした。でも詳細がイマイチ解らなくて．．．．．」

漣と霧彦が顔を見合わせる。当事者二人を助け出して、ようやく事件の内容が見えてきたのかと思ったのだが、それでも無かったようだ。

そして今度は霧彦が清一に質問をする。

「もしかして、あなた達二人以外にも、まだ他に誰か居るんですよね？」

「はい。多分そうだと思います。このビルの人間がそんな感じの事を話してましたから。でも、どうしてそれを？」

「いや、こつちにも良い情報屋が居てね」

霧彦はチラリと漣を見る。そして漣は、陽子に質問する。

「陽子さんは．．．．．他には何も？　例えば、他の人達の居場所とか」

「多分、どこかの部屋に集められているのだと思います。一つの部屋に集めて、『消す』と言ってましたから．．．．．」

「．．．．．チツ。こりゃモタモタしてられねえな」

漣と霧彦は、同時に立ち上がる。そして、清一と陽子が閉じ込められていた部屋のある方を見る。さっきの件で、誰か他の仲間が駆けつけてくるかもしれない。

「霧彦。お前は清一さんと陽子さんを下に。俺は．．．．．このまま奥へと進む」

「．．．．．解った」

霧彦は二人に立つように促す。肉体的疲労と、精神的疲労が重なって、清一と陽子はふらふらと立ち上がる。

「とりあえず下に．．．．．ッ!？」

漣は異変を感知した。その理由として、探索レンズに反応があった。探索レンズは、登録した魔力情報を探索出来る機能がある。そして基本的にはデータ登録した魔力等しか探索出来ないのだが、攻撃性魔力のサーチも可能だ。一口に攻撃性、と言っても、『攻撃の意志のある魔力』を感知する。

そして現在レンズに表示されているそれこそ、攻撃性のある魔力だった。

「ッ!! 上だッ!!」

ゴトンッ!! と、漣達の真上から天井から、壁が落ちてくる。そして、漣、陽子、霧彦と、清一が分断されてしまった。清一が一人になってしまう状態になってしまった。

「清一さん! 大丈夫ですかっ!？」

「はい。でも、どうやらこの壁を崩すのは難しそうですね．．．．．
僕は下の弟達の所まで戻ります」

「．．．．．そうしてください。俺達もすぐに降ります」

漣は、清一の足音を聞くと、次は通路の奥へと足を向ける。

「陽子さん。こうなったら一緒に行きますよ？」

「．．．．．はい」

ぎゅっ、と陽子は自分の今着ている制服の袖をにぎりしめる。そして三人は、通路の奥へと進み始めた。

しばらく歩いているが、ただひたすらドアの無い廊下が続くだけだ。何も、見当たらない。そして漣は陽子に話しかけた。

「陽子さん。陽子さんのメールはどういった内容だったんですか？」

「えっと、さっきの人と同じです。『術式の研究を我々の為に役立ててくれませんか？』といった感じの内容だけです」

「．．．．．そうですか」

と、漣が返事をした瞬間、漣は何かを感じ取ったかのように瞳を揺らす。そして歩んでいた足を止めた。

「これは．．．．．」

霧彦も、何かを感じ取ったかのように足を止める。

「まさか、空間制御系の魔法の中、か？」

恐らくそうだろう、と霧彦の言葉に漣は同調した。探索^{サーチ}レンズを指輪型ポータブルから操作して、魔法探索機能をONにする。漣の直感通り、やはり漣達の周囲に空間制御系の魔法が再現されていた。

「くそつ。入った瞬間は気づくハズなんだけどな。一体何時からだ？」

「初めからよ」

廊下の奥。そこからコツツ、コツツ、と足音が響いてきた。漣はそつ、と背後を振り返る。そこにいたのは、一人の女。黒いドレスを身に纏った、女だった。

「お前は……………」

漣が女に問おうとした瞬間、漣のポータブルに通話が入る。マナモードにしていたので音は鳴らないが、ポータブルから空上画面^{エア・ディスプレイ}から通話が入ったという画面が表示される。

「どうぞ？」

女が漣に通話を勧める。漣は無言でその通話に応じる。通話は、西人からの物だった。

「漣か？ 相手の詳細……………とまではいかなえが、大体の見当はついたぞ」

西人は漣の返答を待たずにそのまま話し続ける。

「相手は組織だ。それも、そいつ等は最近になって活発になって活動してきた破壊活動を主にしている凶悪な犯罪グループ……………」

「

「^{MAKES}創り出す者達。でしょ？」

「ッ！？　おい！　漣！　そこに誰か居るのか！？　まさか敵じゃあ……………」

「西人。一つ、聞きたい事があるんだけどよ」

「っ？」

漣は西人の言葉を遮る。

「そっちに清一さんは戻ってるか？」

「清一さん？　いや……………まだ……………」

ヒュオツ、と、何かが風を切る。そして、その『何か』が漣に向かって放たれていた。

「ッ！！」

漣はすぐさま紅い刀を展開する。放たれていたのは、ムチ。それを紅い刀で一気に、弾く。ガギッ！　と刀に弾かれ、ムチが軌道を変える。そして漣達のすぐ隣の壁をムチが抉り取る。

「そろそろ長電話は終わりにして欲しいわね。レディの前で失礼よ？」

「そりゃ失礼」

漣は通話機能をOFFにする。そして、両手で刀を構え、戦闘態勢に入る。

「霧彦。ここは俺がなんとかするからお前は陽子さんを連れて先に……」

「あら。そうはさせないわよ？」

女がムチを持っている方とは逆の手——左手——をすつ、と前へとさしだす。すると、今度は漣と霧彦、陽子を分断するように魔法陣の壁が現れた。これは恐らく、防御壁の魔法をそのまま分断する為に使用しただけだろう。

「これで一対一よね？」

「そのようだな」

ヒュオツツッ！！ と、再びムチが風を切り裂く音が響く。ムチは複雑な軌道を描き、漣へと迫り来る。しかし、漣は映像化のMTイメージにより、その軌道を読んでいた。刀を振るい、そしてムチを弾く。

「なかなかやるわね。さすが『影岡』を倒しただけの事はあるわね。良い反応だわ」

「そりゃどーも。チツ。女と戦うのは趣味じゃねえんだけどな」

「女だからと言って侮っている、痛い目見るわよ？」

「．．．．．もう普段から十分痛い目を見てるけどな」

チラリと、脳裏にハルの顔が浮かんだ漣。

漣はムチを弾くと同時に、一気に距離を詰める。ムチが放たれてからまだ持ち主の手元に戻りきつては居ない。これならば、反撃も出来ない。

しかし、漣が予測していたスピードよりも速く、ムチが女の手元へと戻った。いや、ムチが手元へと戻るスピードが、加速した、といった方が正しい。

恐らく、ムチを自在に放ったり戻したりしているのは、ムチの中の魔力の流れによって行われているのだろう。そして女はその『流れ』を加速させたのだ。

「ッ！？」

そしてムチの形が螺旋状に変形し、身を守る為の盾となった。刀は、女には届かない。盾となったムチによって攻撃が遮られた。

「確かにアナタの『映像化^{イメージ}』のMTはやかいだわ。その『反応速度^{イメージ}』もね。だけど映像化のMTって、『先読み^{イメージ}』の上位互換だけであくまでも『先読み^{イメージ}』には変わりないのよね。だから『先読みした裏をかけば^{イメージ}』、あなたの映像化した物とは違った結果になってくる。そもそも、『先読み^{イメージ}』っていうのは相手の手段^{カード}が出揃った時こそ、一番効果があるのよ？ 自分の知りえない手段^{カード}を出されると、どうしても裏をかかれちゃうのよね」

「それがどうしたっ！」

漣はムリヤリ刀を押し通す。そして一気に振りぬくと、女は空を飛んだ。どうやら刀で押し返される前にバックステップで飛び、衝撃を軽減したのだろう。

（ん）。だけど裏をかいてもどうしても『反応速度』のMTで反応されちゃうから意味無いのよね。それに長期戦になればなるほどこちらの手段を出さざるおえなくなる。となれば、相手の映像化のMTが生かされてくる。本当に厄介だね。この子）

女は華麗に地面に着地する。両者の距離は約七メートル。ここで、女が名を名乗った。

「私は『創り出す者達』の伊波直美^{いはなおみ}。組織のルールで、実力を認めた相手には名乗らなきゃならないのよね。影岡は名乗る前にやられちゃったけど。あなたの名は確か……………」

「天野漣。探偵だ」

漣は赤い刀を青い銃^{ハンドガン}へと変化させる。

「それがアナタのオリジナルの魔法……………」

「SYSTEM - Delta^{デルタ}・Version^{バージョン}・SYSTEM - Beta^{ベータ}。」

漣の持つオリジナルの魔法、『SYSTEM - Delta^{デルタ}』は、三種類のバージョンが存在し、その三つ全てのバージョンを総称して『SYSTEM - Delta^{デルタ}』と呼ぶ。

紅い刀は『SYSTEM - Alpha』。

青いハンドガンは『SYSTEM - Beta』。

緑の盾は『SYSTEM - Gamma』。

と言った具合に。

あらゆる状況に臨機応変に対応出来る魔法。それこそが、SYSTEM - Deltaのコンセプトだ。しかし、それはあくまでもコンセプトであり、能力では無い。

「ハンドガン……か」

「いくぜ」

ガガガガッガガガガガガガッガガガッガガガッガガッガッガッ！と、ハンドガンを連射する漣。ハンドガンの仕様は、霧彦の持つSYSTEM - Epsilonに似ている。（SYSTEM - Epsilonのように弾丸の換装は出来ないが）弾丸を銃内で構成し、放つ。通常のハンドガンには出来ない弾数を連射する事が出来る。また、魔法で造りだした弾丸の為、薬莢も落ちる事は無い。

伊波はそれら全てを盾へと変形させたムチで防いでいた。しかし、これだけの連射では反撃を行う事も出来ない。しかし、それは漣も同じだった。当たらない攻撃を繰り返していても、状況は変わらない。

漣は、SYSTEM - Betaによる連射を止めた。そしてSYSTEM - Alphaへとハンドガンを変形させる。そして再び、踏み込む。

七メートルの距離を二歩で間を詰め、そして刀を振るう。一閃。

「……………ッ!!」

しかし、その一閃を伊波は、『防がなかった』。

バックステップをとり、その一太刀を回避した。なぜ自分がそうしたのか、伊波は解らなかった。いや、解ってはいるが解らない。

「くそつ。外したか」

今の一太刀は、伊波の今までの戦闘経験による直感が、『避けなくてはならない』と告げていたからだ。

「アナタ……………今のは？」

「よく気づいたな……………けど、」

ヒュンツ、と漣は^{システム}SYSTEM - ^{アルファ}Alphaを軽く振る。刃が風を切り裂く音が響いた。

「次の一撃で、終わりだ」

漣は^{システム}SYSTEM - ^{アルファ}Alphaの切っ先を、伊波へと向け、構える。

その刃は確かに、敵である伊波へと向けられていた。

第九話 思い

漣は、目の前の敵、伊波へと、静かに『SYSTEM - Alpha^α』の切っ先を向ける。刀を構えるその動作、姿勢は素人の物では無く、達人の域に達している、と言っても過言では無い。伊波は漣のその鋭い瞳、刀を構える動作、姿勢。そこから幾度かの死線乗り越えてきた者のそれと同じ雰囲気を感じた。

伊波自身も、所属している組織上、いくつかの死線乗り越えてきた。実践での経験も培われ、その経験から導き出される勘も備え合わせている。そして、その勘が告げている。

（——次の一撃。これは何か……来る……ッ！）

自身の再現した魔法により床や天井、壁がメチャクチャに挟られている。それは勿論、伊波が行った結果であり、その再現した魔法の威力が伺える。しかしそれでも、目の前の天野漣という少年には、傷一つ見受けられない。

伊波は犯罪グループの『創り出す者達^{MAKERS}』の一員だ。しかし、その伊波の実力を持ってしても、漣にはダメージ一つ与えていない。どちらかというと、これまでのやりとりの中では伊波が押されているだろう。

その漣が次に何かを仕掛けてくる。

伊波にはその確信があった。しかし、それがなんなのか解らなかった。漣には『反応速度』と『映像化^{イメージ}』というMTがある。しかし、伊波にすれば脅威のそのMTですら、漣にとっては切り札ではない。

「……………いくぜッ!!」

じゃりっ、と漣はかすかに足を前へとじらす。そしてその直後、ガンッ!! と、足元に落ちている瓦礫を蹴り上げ、一気に伊波との距離を詰めにくた。

「ここが勝負所という事かしら？」

今から出すのは間違いなく、漣の切り札。まさしく、勝負所で、同時に危険な賭けでもあった。確かに漣は今までの戦いで未だ切り札を隠している。しかし、伊波もまだその切り札を隠し持っている状態なのだ。そしてこの勝負所で勝つ、という事は、相手の切り札に勝つ事だ。そしてそれは勝敗にも大きく関わる。負けるという事は切り札を破られるという事。敗北は避けられない。

伊波は自身の魔法であるムチを振るう。今から伊波が放つのは、伊波の持つ切り札。

ムチから次々と大量のムチが紡ぎだされる。そしてやがてそれは一つに収束し、纏まり、一つの槍と化した。ただ相手をその刃で突き刺し、殺す為の姿。

伊波の手にはかつてはムチという形だったランス。そしてその切っ先を容赦なく漣へと向け、突き出した。

今までは、伊波自身の魔力を流動するムチをコントロールする為に使っていた為に拡散していた。しかし、そのムチをこのランスという姿へ変化した事で、魔力をただ一点に集中させる事が出来た。それにより、貫通力が爆発的に増大した。

伊波が、このムチを槍に変えるまでにかかった時間は約二秒。そして、槍を突き出すと共に『SYSTEM - Alpha』の刀身が、システム
アルファ槍の切っ先と激突した。

この槍は、途中で魔力を集約させ、爆発的に威力を上昇させる事

が出来る。伊波は激突が行われた瞬間、この魔力集約を開始した。相手の切り札が出る前に一気にカタをつけようとしたからだ。

しかし。

(ッ！？ 槍が．．．．ッ！)

伊波が異変を感じたのはまさしく、刀と槍が激突している時だった。槍は既に、魔力集約を始めていて、通常ならば既に槍の威力が爆発的に増大していなければおかしい。しかし、槍の威力が増大しない。まして。

ピシッ。と、槍に亀裂が入る。

(一体、何がッ！？)

伊波は更に魔力集約を行う。しかし、依然として槍の威力が増大しない。それどころか、次々と槍に亀裂が入ってゆく。そこでようやく、伊波は、『SYSTEM - Alpha』の、いや、『SYSTEM - Delta』の真の能力に能力に気づいた。

(これは魔法破壊．．．．いや、魔法を再現する為の、『術式を破壊する魔法』！？)

『SYSTEM - Delta』。

そのコンセプトは『あらゆる状況に対応する魔法』。しかし、コンセプトはあくまでもコンセプトであって、本質では無い。

術式破壊。

魔法を再現するにあたって、『術式』は必要不可欠であって、その魔法を再現し、発動する為の核とも言える。魔法を破壊するのではなく、『術式』に対して直接ダメージを与え、破壊する魔法。

槍の魔力集約を行っても魔力が集まらなかったのは、『SYSTEM - Alpha』と槍が激突した際に術式が破壊された為に、本来の機能を発揮できなかった為だ。

つまり、互いの切り札が激突した瞬間に、既に決着はつけられていたといえる。

伊波の敗北、という形で。

「くっ………ッ!」

伊波の持つ槍は既に崩壊していて、あとは『SYSTEM - Alpha』によって切り裂かれる事を待つのみだった。

切り札を出し、それを破壊され、もう何も、伊波には残されていない。

「俺はお前達が嫌いだ」

今、漣の脳裏に浮かぶのは、兄を探してくれと頼む清二の表情。自分が助けに来た時の、陽子の震えた体。おびえた表情。

「………ッ!」

漣は『SYSTEM - Alpha』で槍を粉碎しながら、言葉を紡ぐ。対して、伊波も何かを吐き出すように言葉を放つ。

「何が解るの………?」

「.....」

伊波の口から、堰が切れた言葉が、思いが溢れる。もう、止まらなかった。

「アナタに何が解るっていうのツツツ!?」

ギシッ! と槍を持つ手に力が入る。すでに崩れかけつつあるその槍を握り締め、伊波は自分の思いを言葉へと変える。

「私は昔ね、目の前で恋人を失ったわ。相手の飲酒運転の交通事故なんていうくだらない理由で。だけど相手は上手く言い逃れて罪に問われなかった。その時の私の気持ち、アナタに解るっていうの!? 全てが嫌になった! 大好きだった風景も、大好きだった人が居たこの世界も! だから私は決めた! 全てを壊すと! だから私は『創り出す者達』^{MAKERS}に入り、壊し続けた! だから私は、この世界に復讐する! 彼を殺し、罪を犯した犯人を生かしている世界にッ!」

世界に対する復讐。

それが、伊波の戦う理由。

嫌だった。

失うのも。苦しむのも。.....自分だけが、苦しむのも。

目の前で大切な人を失って、どれだけ苦しんでも、世界という存在は無情だ。周りの人は笑い、楽しみ、そして大切な人と共に暮ら

す。

それを見ているのが嫌だった。自分だけ苦しむのも嫌だった。

——だから、他の人も苦しめた。

「……確かに前のお前の気持ちは、俺には解らねえ。そっちにもそっちなりの事情があると思う」

「ッ!？」

漣の刀を持つ手に力が入る。刀身は依然として、槍と激突している。

「別に復讐をするなどは言わねえ。恋人を殺した犯人を殺すなどとも言わねえ。どんな理由があろうとも人を殺すなどとも言わねえ。……けどな」

ビシッ! と、今度は槍に大きな亀裂が入る。そしてその亀裂は次々と広がっていき、槍を侵食する。まるで、漣の思いが、伊波へと染み渡っていくように。

「関係の無い人を巻き込む事は、復讐じゃない。ただの子供の癪癪^{ガキ}_{わがまま}だ——出直して来い……ッ!」

ガッギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイインツツ!!
と、槍が砕け、そして、『SYSTEM - Alpha^{システム} - Alpha^{アルファ}』から生み出された衝撃波が伊波を確かに捕らえた。

伊波の体は衝撃波により数メートル程吹き飛ばされ、そして床に

叩き落された。同時に、漣と霧彦、陽子を分断していた魔法陣の防御壁が解除される。これは恐らく、術者である伊波が倒された為に術式のコントロールが途切れた為だろう。

そして漣は、力ついて床に倒れ去っている伊波に向けてポツリと呟く。

「復讐がしたいならすばいい。俺も罪を犯したまま生きている人間を許す事は出来ない。けど、今度は他人に被害を与えないようにアンタの手で、相手の罪を償わせる方法を考える。罪人に罪はあっても、無実の人に罪はねえからな」

伊波は、床に倒れ去っていた。完全に術式を断ち切られ、もう魔法のコントロールが出来ない。

（結局、初めから最後まで手加減されてたわね．．．．．）

最後の決め手となったのは、『システムSYSTEムM - アルファAlphァa』から発せられた、案力による衝撃波。本当はこの衝撃波の代わりに刃にする事も出来たハズだ。

（それにしても、『復讐をしてもいい』って言われたのは初めてかも．．．．．フツ。変わった子。普通は『復讐は止める』とでも言いそうなのにね）

伊波は、倒れた今、思う。

もしかしたら自分は、止めて欲しかったのかもしれない。

無意味に世界に復讐する自分を。

世界に復讐して、他の人を巻き込むのは止める。だったら、彼を殺した相手に復讐すればいい。

あの少年の言った事はつまりは、そういう事なのだ。

伊波の過去を知り、伊波の心を知り、そして知った上で漣は、『復讐しろ』と言ったのだ。

（全く。本当に変わった子。それに、『あの^{はんにん}人』の正体も知ってるみたいね。この様子だと）

犯人の正体。

それが何を意味するのかを知った上で、あの少年達は進もうとするのだ。

たとえ、どんな結果が待ち受けているのかを知っていても。

「それにしても、手こずったな」

「……………ああ。それに『術式破壊』まで使っちゃったしな」

実際、漣にダメージは無いが伊波は強かった。再現する魔法こそ平凡な物だったが、それを使いこなし、そして尚且つ『変形』という術式の応用を見せていた。

かなりの使い手だったと言えるだろう。

「あ、あのっ」

「ん？」

陽子がおどとした様子で漣に聞く。何か質問をしようとするぐらいには精神的余裕が戻ってきたようだ。

「その、『術式破壊』……なんて能力があるのなら、どうして初めから使わなかったのですか？」

「『術式破壊』、は元々この『SYSTEM - Delta』に備わってた能力なんだけどな。威力が高すぎて、『術式以外の物も破壊しかない』から普段はパワーを抑えているんだよ」

元々、『SYSTEM - Delta』は『術式破壊』という能力を備えた一本の刀だった。しかし、『術式破壊』の威力があまりにも高く、相手だけではなく、周囲にいる人間にすらダメージを与えてしまう可能性もあった。そこで、あまりある強大な魔力を抑えるために『三段階の術式変化』という能力が付け加えられた。その結果が、『SYSTEM - Alpha』、『SYSTEM - Beta』、『SYSTEM - Gamma』という三つのバージョンなのだ。そして三つのバージョンに拡散された『SYSTEM - Delta』の『術式破壊』という能力は、なんとかある程度は抑える事が出来た。

しかし、『三段階の術式変化』という機能を付け加えられても直、その『術式破壊』の威力は強大な物だ。

「だから普段は出来るだけ使わないようにしてるんだ」

「そ、そうですね……それにしても、そんな魔法があるな

んて………」

ブツブツと研究者の顔に戻った陽子をよそに、漣はポータブルから西人に通話をかける。一度目のコールで、西人は通話に応じた。

「漣っ！！ 無事かつ！？」

「ああ。なんとかな」

「そ、そうか………それにしても、焦ったぜ。急に敵が来るんだもんな………」

「西人。このビルの全体をスキャンしてくれ。そして人間が多く集まっている場所を教えて欲しい。他にも閉じ込められている人間が居るのかもしれない」

「それについてはどうやら問題無さそうだぜ」

「？ どういう事だ」

漣は、西人の意外な言葉に眉をひそめる。

「ビルから次々と学生達が解放されている。多分残っているのはお前達だけだ。解放しているっつゝ事は、犯人達も恐らく逃げ出している後だろうからな」

漣は、西人の言葉に反応して周囲を見渡す。狭い廊下なのは変わり無い。しかし、伊波が意識を失ったおかげなのか、もう空間制御系の魔法は解除されており、他の部屋も出現している。そしてその部屋のドアは開け放たれており、（どうやら漣達が空間制御系の魔

法空間の中に閉じ込められている際に部屋を出たようだ）もう人の気配が無かった。

しかし。

「いや。まだだ」

「？　まだ、誰か居るのか？」

「このビルの中にある魔力がまだ完全に消えていない。恐らく術者はまだこのビルの中にいる」

「……………ッ！」

漣は、霧彦の方を見る。

「霧彦。悪いが、陽子さんを下へ。俺はそのまま奥へと行く」

「俺が行った方がいいんじゃないのか？　お前は連戦して魔力が消費されている。まだ一戦しかしていない俺が行った方が——」

「いや」

漣は、その鋭い瞳を通路の奥へと向ける。まだ見ぬ、このビルの主。罪の無い学生達を閉じ込めていた犯人へと。

「これは、俺がカタをつける」

「……………解った。ったく。こつ言い出したら止まらねえよな。ホント」

陽子は霧彦に連れられながら、漣の背中を心配そうに見つめる。

「探偵さん．．．．．お氣をつけて」

「．．．．．解ってます。ま、どうかの誰かさんにも、帰ってくるって約束をしますしね」

漣と霧彦、陽子は同時に、互いに背を向けて歩く。

そして漣は、このビルの主の待つ部屋へと向けて、歩を進めていった。

第十話 犯人

メールの受信を終え、ポータブルのメール機能を閉じる。漣は手の中にある瓦礫をポケットの中にしまう。

暗い廊下を進む。太田ビルの最上階。現在、その中の廊下を漣はたった一人で歩いていた。このビルの中で漣は幾度か戦闘を行ってきたが、どれもまず最初に『空間制御系』の魔法を再現し、フィールドを区切って戦闘が行われてきた。

そしてそのフィールドに待ち構えていたかのように敵が現れる。しかし、漣は疑問を感じていた。そもそも空間制御系の術式は構築、再現、共に難しい。空間の制御ともなるとやはり通常の魔法とは術式が大きく違ってくる。しかし、今までの敵は全員、その空間制御系の術式を構築した上で、攻撃用の魔法を再現してきた。

そこに、漣は疑問を感じていた。

（どうしてこうも全員、あんなに簡単に空間制御系の術式を操る事が出来る？ しかも、他の魔法と併用した上で）

ポータブルから再現出来る魔法は一つでは無い。再現しようと思えば、いくつかの魔法を複数再現出来る。しかし、空間制御系の術式は特殊なので、他の魔法の術式と併用するのが難しい。しかも、その構成した空間を維持した上で、他の魔法をあれだけの威力で再現しているともなると、ただでさえ難易度の高い空間制御系の術式が、さらに高度となる。

そして漣は、その疑問を解消する手段としてある一つの答えにたどり着いた。

（もしかして、今までの空間制御系の魔法を再現してきたのは、別の人物？）

それならば、全て説明出来る。そもそも、漣は初めに影岡と戦った際から異変を感じていた。空間制御系の魔法という高度な魔法をいとも簡単に再現、維持した上で、自身の魔法の能力をかなり引き出していた。

空間制御系の魔法を再現していた人物。

その人物はまだ、このビルの中に居る。

根拠はあった。

漣が最上階の廊下を一人で歩き始めたあと、いくつかの空間制御系の魔法が再現された。恐らく漣の行く手を阻むためのトラップだ。

システム

デルタ

『SYSTEM - Delta』の『術式破壊』でトラップを破壊しながら、漣は闇の中を進む。

このビルの主は、現在は屋上に居るハズだった。それは、設置されていたトラップが屋上へと続く通路に設置されていたので、漣はそう推測した。

そして、漣は階段を上り、ある一つのドアの前で足と止める。そしてそのドアには、『屋上』と、素っ気なく書かれたプレートが付けられていた。

漣はひんやりとすっかり冷たくなってしまった鉄のドアノブにそっと手を置く。

そして一気に扉を開いた。同時に、ビュウツ、と外の春風が舞い込んで来る。ハットの帽子が揺れる。制服の袖が風に優しくなでられる。そして、漣が視界に捉えた、その人物は――

霧彦は、陽子をつれてようやく下の、西人達の待つ太田ビルの裏へとやってきた。正面の入り口から出てても混乱を招くだけなので、とりあえずは裏口から出てきたのだ。幸い、まだ警察も対した行動は起していない。せいぜい、ビルから解放された学生達を保護している事ぐらいだろうか。しかし警察が手間取るだけあって、閉じ込められていた学生の数もなかなかの物だった。

そしてしばらくして、五人は近くのカフェの中に集まった。ビルは見える所にある。

「西人。『例のアレ』の解析は終わったか？」

「勿論。ビンゴだった」

「……………そうか。警察の状況はどのくらいだ？」

「そうだな。保護の完全完了まであと十分って所だな。その後は多分、ビルの中に攻め込むと思う」

「解った……………」

霧彦はチラリとビルの裏口から、屋上を見上げる。屋上では現在、犯人と漣が対峙しているハズだ。

「とりあえず、陽子さんを警察へ引き渡した方がいいんじゃないのか？」

「それはそうなんだけどな」

霧彦の歯切れの悪い返事と共に、陽子があわてて付け加える。

「い、いえつ。私が頼んだんです。一緒に待たせて欲しいって」

陽子の言葉に、ハルが眉をひそめる。

「どうして？ 閉じ込められていたんでしょう？ 家族の所へ帰りたくないの？」

「そ、それはそうなんですけど．．．．．探偵さんがまだ中に居ますし．．．．．」

心配そうに陽子が言葉を紡ぐ。対して、ハルはじつ、と陽子を見つめる。

「．．．．．もしかして、あのバカと何かあった？」

「ふえつ？ えつと．．．．．」

助けに来てくれた漣に対して思わず抱きついてしまった事を思い出して、カーツ、と陽子の頬が紅く染まる。元々陽子は物静かで、おとなしい性格の子なので、あんな行動を起してしまった自分が信じられなかった。

そしてその陽子の反応だけでハルには十分伝わったらしく、

「．．．．．あのバカ、帰ってきたらお仕置きね」

「そりゃ漣も可哀想だ」

西人は心底気の毒そうな表情をしている。そしてすぐに真剣な表情になると、フツ、と霧彦の方を見る。

「．．．．．そろそろ、この事件の発端、いや、犯人について話してもらおうか。どうせ、もう解ってるんだろ？」

霧彦が真剣な眼差しを向ける。同時に、四人に緊張が走る。

「単刀直入に言おうと思う。俺と漣がビルの中に侵入した結果、推理した犯人は――」

「――小野田清一さん」

春風が吹くビルの屋上。三メートルはあるであろうその巨大なフェンスの前に、小野田清一がビルの下景色を見つめていた。そして清一は漣の声に反応し、ビクッ、と肩を震わせる。

「あ．．．．．探偵、君？ あ、ははは、ビルの下に急いで行こ

うとしたんだけど、道が塞がってて、それで仕方が無く屋上に・
・・・」

漣は悲しげな瞳を清一へと向ける。そして、口を開く。

「『連続誘拐事件』」

ピクツ、と清一の肩が震えた。

「アンタが、この事件の首謀者なんだろう？」

「．．．．．その証拠は？ 僕は逆に被害者ですよ？」

漣は、屋上のコンクリートの上をスタスタと歩く。そして、清一との距離を詰めた。まるで、追い詰めるかのように。

「最初に違和感を感じたのは、アンタの話を聞いた後に、陽子さんのメールの文面を聞いた時。陽子さんのメールの文面は『術式の研究を我々の為に役立ててくれないか？』だった。だけどアンタは違う」

「違う？」

清一は眉をひそめる。

「そう。アンタは言ったよな？ アンタに来たメールの文面は、『術式を完成させてくれないか』」

「そのどこが可笑しいのですか？」

「可笑しいよ。だって、陽子さんとアンタとでは、メールの内容が違うのだから」

「・・・・・・・・っ」

春風が、優しく両者の頬をなでる。そして漣は再び言葉を紡ぐ。

「陽子さんはあくまでも、『術式の研究を役立ててくれ』ぐらいにしか書いていなかった。だから、来た場所でようやく『術式を完成させる』という仕事内容が解る。だけど、アンタの場合、『初めから何をするか知っている』。これは、メールを貰った時点では犯人にしか知りえない情報なんだ。それをアンタが初めから知っていた」

「・・・・・・・・だけど、メールの文面が全員同じだとは限らないでしょう?」

「限る」

「!?!」

漣は、ポータブルからメールを開く。データが一つ添付されていた。これは、ここに来るまでに西人に解析を頼んでおいた物だ。そしてその内容は、行方不明となっていた学生の、ここに来る理由となった紹介メールが全てリストされていた。

「アンタが話してくれていた内容のメールは、行方不明となっていた奴等の中で、アンタだけなんだよ」

「・・・・・・・・それが、何になるんですか? それでは完全に僕が犯人だとは断定出来ないじゃないですか」

「まだあるぜ。アンタは俺達と分断された後、言ったよな？ 『僕は下の弟達の所へ戻ります』ってな」

「はい。それが何か……………ッ！」

「気づいたみたいだな。そもそも、どうして『弟達』が居るって解っているんだ？ 俺と霧彦はアンタに『助けに来た』とは言ったが、他のメンバーが下の階にも居る』とは言ってねえぜ？」

清一は何か言おうと口を開いたが、それを途中で止めた。そしてすうつ、と息を一度吸った後、

「アナタがしている事は人の言葉のアヤの揚げ足をとってるだけです。実際に、証拠にはなりません」

「そうだな。コレは俺達が聞いただけの事だ。だけど、確固たる、『動かぬ証拠』ってヤツがここにある」

ゴソツ、と漣はポケットから小さな瓦礫のような物を取り出す。それは、清一と分断された時に天井から突然出現壁の一部だ。漣が清一と別れた後に壁を少し削り、ポケットに入れていた物だった。

「それは……………瓦礫、ですか」

「そうだ。あの時、分断された壁から少し削り取った物だ。このビルの魔力を探索しても、アンタの魔力は反応しなかった。けど、俺達と合流する事になって相当焦ったんだろうな。再現した魔法の中に『ジャミング』の術式を組み合わせる事を忘れてたおかげで、この瓦礫とアンタの魔力が一致した。そして、これとは別にとった瓦

礫を相棒に下に持っていつてもらって、それを優秀な情報屋に解析してもらった所、このビル全体に再現されていた空間制御系の魔法と、アンタの魔力が一致した」

もう逃げられない、と言うように漣は一步、距離を詰める。

「小野田清一。犯人はお前だ」

「そんな……………」

清二は顔を真つ青にしている。自分の兄が、MAKES創り出す者達という犯罪グループの一員であり、この連続誘拐事件の首謀者だったのだから。

「ったく。あの意味の解らん瓦礫の解析結果からして薄々勘付いてはいたが、まさか本当だったとはな……………」

「何かの間違いじゃ、無いの？」

ハルの問いに霧彦は「そうだといいいけどな」と苦笑した。

「何かの間違いです。兄が、あんなに優秀な兄が……………」

「清二さん」

霧彦が清二の言葉を遮るように言葉を放つ。

「清一さんの普段再現している魔法、得意としている系統の魔法は

何か、解りますか？」

「……………それは、」

清二は何かを思い出すようにして、必死に混乱状態の中兄の無実を証明する物は何か無いかと考える。そして、思い出す。記憶の中の兄が、どんな魔法を再現していたのかを。

「——空間制御系の魔法です」

霧彦は、兄の無実を少しでも証明しようと必死に言葉を振り絞った少年に対して、悲しげな表情を浮かべた。そして心の中で「すまない」と自然と頭を下げた。

弟の口から放たれたそれはまさに、兄に罪を言い渡す言葉だった。

「……………驚きです。まさか、弟の小さな依頼から、ここまで追い詰められるとは」

清一は何かを観念したかのように、そっと呟く。

それはまさに、『自白』だった。

「普通なら『犯罪グループ』なんて事が関わってくれば、投げ出す物でしょう？」

「悪いな。どんなに小さな依頼でも、依頼人の為に達成させるのが探偵なんだ」

「．．．．．そうですか。ふふっ。今年は良い新入生が入ってきたみたいだな」

フツ、と悲しげな笑みを浮かべる清一。

直後。

「残念だ」

その悲しげな笑みは、邪悪な物へと変わる。清一の、本性がにじみ出た瞬間だった。

「．．．．．こんなに優秀な一年生を、消さなければならないなんて」

ギギツ、ギリツ、ギリギリギリツ．．．．．！と、歯車がかみ合わないような、不吉な音が清一の周囲に響き渡る。それは空間魔法系の魔法が再現されようとしている事を表していた。これは、空間が制御される際に起こる、一種の小さな空間のゆがみの音だ。

「言つたる。どんな依頼も必ず達成させる、って．．．．．だからこんな所で消されるかよ。それに、約束もあるしな」

漣はポータブルから『システム - デルタ』を発動する。
そして、『システム - アルファ』の術式を発動させた。

少年は、戦う。

依頼を達成する為に。そして、

—— 彼自身の約束の為に。

第十一話 信念と誇りと約束

空間が歪む。ギギッ、ギリッ、ギリギリギリッ……！！
と、歯車がかみ合わないような、不吉な音が最初は奏でられていた。
しかし今は違う。

メキメキツビツビッ、と、その音は更に不吉さを増し、そして
見るからにその空間に異常をきたしている。

それはつまり、再現しようとしている空間制御系の魔法の威力が
高すぎるためだ。

「さすが、術式の研究者って所か？」

「後輩から褒めてもらえるなんて嬉しいよ」

口では笑いながらも、目は笑っていない。いや、笑う、というより、楽しんでいる、と言った方が正しい。そして、その目が楽しそうに輝くたびに、清一の周囲の空間の歪みも酷くなっていく。

（それにしても、個人の魔法にしては魔力が大きすぎる上に性質が違う。まさか、儀式系統の魔法か？）

儀式。

それは文字通りの意味で、『儀式を行う魔法』だ。一定の手順を踏み、一定の事を、一定の分で行う。その方法は儀式によるが、そうする事で通常の魔法よりもはるかに強大なパワーの持つ魔法を再現する事が出来る。ただし、儀式系統の魔法はどれも大規模である為に、儀式場が必要だし、何より時間もかかる。

（儀式を行うためなら、ワザワザ屋上に居るのも納得できる。．．．
まさか、伊波達も、罨も、全て儀式の為の時間稼ぎか？）

儀式はその性質上に大規模である事が多いのは漣も知っている。
だからこそ、一気に叩く必要がある。漣は、『システム-アルファ
pha』をぎゅっ、と握り締め、『システム-Delta』の
『術式破壊』を発動させる。これで相手の術式を破壊すれば、例え
『儀式』であつてもその効力を一気に失う。

（放置しても良い事なんてありやしねえ。．．．．．一気に叩く
ッ！！）

ダンッ！！ と漣は最初の一步を大きく踏み出す。そして臆す事
も無く、清一へと突き進んでいく。そんな漣の様子を見た清一はフ
ッ、と微笑む。

「良い度胸だ。だけど、度胸が決して勇敢とは限らない。それに、
よく「度胸を持て」なんて言葉を耳にするけど、度胸が必ずしも良
い結果を生むとは限らないんだよ？」

ビキンッ！！ と、清一の周囲にある、歪んだ空間が二箇所、同
時に砕けた。それは清一の両サイドに展開されており、丁度バスケ
ットボール程の大きさの空間の穴を生み出していた。

そして両方の空間の穴から炎が放たれる。それは勿論、再現され
た魔法だ。

「ッ！？」

漣は進めていた足を止め、すぐさま『システム-アルファ
pha』

を『SYSTEM - Gamma』へと変形させる。システム ガンマ

刀から盾へと変化した『SYSTEM - Delta』を漣は向かってくる炎の方向へと向け、その炎を防ぐ。システム デルタ

盾となった状態でも『術式破壊』はしっかりと機能しているのだろうが、術式を破壊し続けても、続けてまた炎が放出される。恐らく、破壊しているのは術式の断片的な物だけであって、その『核』を破壊しきれていないのだろう。

漣はその炎を防ぎながら炎の発射源である空間の穴を見つめる。

それはただ、淡々と炎を放出し続けるばかりで、何も見えはしない。
(空間制御系の術式で空間を破壊し、別の場所から炎を放出する魔法を再現させて破壊した空間を通過させる事により、別の場所からの直接の魔法攻撃を可能にしているのか！？)

用は、別の場所で再現している魔法の攻撃を転移させているのだ。空間制御系は、清一が使っていたように空間を変化させたり、対象を別の空間に転移させる事は可能だが、魔法攻撃の転移なんて、漣には聞いた事が無い。

しかし、このままでは無駄に時間が過ぎるだけだ。そして何より、いくら盾でガードしていると言っても、現状では漣の体力が炎の熱気によって失われていくだろう。

漣はガードを行った状態で、ムリヤリ炎の斜線上から離れた。炎が消滅する。そして、今度は『SYSTEM - Gamma』を『SYSTEM - Beta』へと変形させる。システム ベータ

そして、一気に、容赦なく弾丸を撃ち込む。

「今度は銃か？ 忙しいな」ハンドガン

不適に清一は笑うと、今度はまた別の空間がバギンツ！！と音を立てて。砕けた。そして、今度はその穴の中に放った弾丸が別の

「ったく。なんでも飛び出すビックリ箱か？」

「ふふつ。面白いだろう？」

再び、空間に穴が開く。今度出てきたのはまた、同じレーザーのような光だった。いくら『映像化^{イメージ}』、『反応速度』というMTがあるとはいえ、数が倍になればいくら漣でも捌ききれない。

映像化^{イメージ}出来ても、反応出来ても、体がついていけなければ意味が無い。

よって。

漣は、映像化^{イメージ}したレーザーの攻撃コースを、攻撃に転じる為では無く、避ける^{回避}為に使う。

光が向かってくる。それらに向かって漣は、走り出した。

そして、次々とかわしていく。顔に来た光は顔を少しひねるだけで避け、胴体に直接来るレーザーは刀で弾く。しかし、弾くと言ってもその数は最小限の数だけだ。後は体をひねったりするだけで避ける。

避ける動きは、出来るだけ最小限に留める事が重要なのだ。そうする事で、とつさの自体に反応出来るだけでなく、体力や魔力の温存にもつながり、相手との距離を詰めるスピードが上がる。

魔法攻撃は全て空間の穴の中に吸い込まれる。だったら、直接攻撃を加えてやればいい。実に単純^{シンプル}な事だ。

しかし。

「君の狙いはこちらも読んでいるんだよ」

(・・・死んだかな)

と、清一が結論付けようとした瞬間だった。

「誰が・・・だ？」

「・・・！」

ゴウツ、と土煙が漣の手の中にある刀によって、なぎ払われた。

「驚いた。まさか生きていたとはな」

漣は答えない。代わりに。

「ずっと考えていた」

「？」

「これだけの儀式。一体何処が『儀式場』で、一体何が『道具』なのかを」

儀式を行うために必要な物が二つある。それは、『儀式場』と『道具』だ。

『儀式場』とは文字通り儀式を行う為の場所で、その儀式場が無ければ儀式系魔法は再現出来ない。また、その儀式場の規模や、相性によってその儀式による威力が変わってくる。例えばこの清一が発動している儀式系魔法の場合は、前者。その規模によって威力を決定付けている。

そして、『道具』というのは、その儀式を再現する為に必要な『アイテム』だと考えればいい。そしてそのアイテムが、儀式の核、

と言ってもいい。

「そして、ようやく答えが見つかった。．．．．『儀式場』は最初、屋上の床だと考えていた。だけど違った。その証拠に、お前はアッサリと床を破壊したからな」

清一の顔色は変わらない。しかし漣は、そのボロボロの体でさらに続ける。

「そして結論として、『儀式場』はこの『ビルそのもの』。違うか？」

漣はじつ、と清一を見つめる。しかし、清一はまだ最後の一线を守ろうとするかのようにかたくなに黙秘を続ける。漣が再び、口を開いた。

「そして『道具』。これは何かが解らないが、多分お前が別の場所に隠しているんだろうな。それが何か解らないが」

「．．．．だから、どうした？　それが解ったからと言って何になる？　お前は俺にまだ一撃も与えられてはいない。そして肝心の儀式を再現している『核』である『道具^{アイテム}』も、俺が空間制御で魔法空間内に隠した。お前に、俺を倒す事の出来る要素は無い．．．．
．．ッ！　不可能だっ！」

「いや」

漣はただ静かに、清一の勝利宣言を遮る。

「依頼^{やくそく}の為に不可能を可能にしなきゃならないのが、探偵なんだよ」

漣は手の中の『SYSTEM - Gamma』を『SYSTEM -
Beta』へと変形させる。

そして、ただ一点を見据え、銃口を清一へと向ける。

「一つだけ言っておく。この一撃で、お前の儀式は崩れ去る。そして、俺の勝ちだ」

「……………減らず口をッ!!」

ボンッ!! と、漣の背後の床から、レーザーが襲い掛かる。恐らく、あらかじめ漣が下の階に叩き落とされると想定しての空間破壊^{トラップ}を仕掛けてたのだろう。今思うと、屋上に来るまでのトラップも、この設置していた空間破壊^{トラップ}を隠すための物だったのかもしれない。その光は的確に、ドッ!! と漣の右肩を貫いた。ハンドガンを持つている方の手だ。鮮血が飛び散る。赤い血がボタボタと床を汚す。

「……………ッ!!」

しかし、それでも、漣はハンドガンを握り締めた手を下に降ろさなかった。ただひたすら、一点を見据えていた。

「なっ!?!」

これにはさすがに清一も驚いた。いくらなんでも肩を貫かれて、それでもハンドガンを降ろさないとは。これは魔法^{やくそく}も何も関係が無い。ただ漣にあるのは、探偵としての、依頼^{まねる}を完遂という『信念』。

「なぜだ．．．．．なぜそこまで出来る．．．．．ッ!？」

現在優勢なのは、言うまでも無く清一だ。漣はただ、銃弾を構えているに過ぎない。なのに、勝手に言葉が紡ぎだされてしまった。

「俺は、絶対に帰らなきゃいけない——らしいからな。だから．．．．．」

フツ、と微笑む。たじろく清一。そしてその刹那。漣は見た。

清一のすぐ側にある、空間のゆがみを。

漣が『それ』を見つけた事に気づいたのか、清一はあわててレーザーを放つ。しかし、漣にとっては映像化ようぞうありだった。

少年は、その『信念』と、『誇り』と、『約束』を、弾丸にこめる。そして、

「——こんな所で、死ぬわけにはいかねえんだよッ!！」

弾丸が、放たれた。

レーザーをかくぐり、弾丸は的確に、その清一の側の空間のゆがみを捉えた。そして、弾丸は的確に中の『核』を射抜き、『術式破壊』により儀式の術式を破壊した。その直後。ビキッ、という音と共に空間から突如『何か』が床に落ちた。そして。

漣へと放たれたレーザーが全て、消えた。

儀式系魔法の術式が完全に破壊されたからだ。

そしてぼうぜんとする清一に、漣はゆっくりと口を開く。

「アンタは言ったよな？」
『核』^{アイテム}は魔法空間の中に隠した、ってな。その魔法空間の中にある『核』は言うなれば儀式の生命線だ。そして、精密なコントロールを行う為には常に手元に置いておくのが一番だ。だから、『核』を隠している魔法空間も、常に自分の側に待機させていると俺は考えた。そして、アンタが魔法を次々と再現している時に、見たんだ。一瞬、かすかにだが、空間が歪んでいるのを」

それは確かに小さなゆがみだったのだが、漣の目はそれを見逃さなかった。

「この儀式の儀式名称は『孤高の運び屋』。どんなに離れても、あらゆるポイントから、様々な物を転移させる事が出来る空間制御系の儀式魔法。しかし、場所の制約が無い分、この儀式は『一度に一つしか転移』出来ないというリスクがある。だからお前は、攻撃魔法を転移させる際には、ワザワザ転移^{さいげん}していた魔法を消滅させて、一つの魔法しか転移出来ないようにしたんだ。でも、それでも不安定だった。なぜなら、『常に核を隠した魔法空間を転移していた』から。制約を破り、『一度に二つ』転移させていたから、魔法を転移させていた度に小さく、空間がゆがんでいたんだ。．．．．．破ってはいけない儀式の制約^{やくそく}を破った。それが仇になった」

そして漣は、清一を見る。焦りにまみれ、切り札を失った男の顔を。

「たった少しでも、大規模儀式系魔法の制約を破った。それがアンタの敗因だ」

「くっ．．．．．！ そっ．．．．．！」

ギョゴツ！！ と、清一の目の前の空間がゆがむ。これは儀式では無い。清一本来の魔法だ。

しかし、漣はその光景を見ても、物怖じ一つみせず、ただ静かに『SYSTEM - Alpha』へと変形した刀を握り締める。

「俺は言ったハズだぜ。—— 敗因^レつてな」

ゴツ！！ と、漣は清一へと踏み込む。そして、刀を振るった。

刀の峰は、的確に清一の腹部を捉えていた。

「ぐっ……………」

漣は、魔法を解除した。
打ち抜かれた肩が痛む。

「探……………偵……………」

しばらく気を失っていた清一が、意識を取り戻した。そして、漣に向かって呟く。

「トドメは刺さなくて……………いいのか」

「……………言ったハズだ。俺は探偵だ。だから、『依頼は必ず達成させる』」

「何……………?」

漣の意図を理解しかねる清一。その時。

「兄さんっ!!」

ビルの中から、清二がかけよってきた。

「なっ・・・・・・・・!! 清二・・・・・・・・!!?」

驚く清一に対して、漣は静かに告げる。まるでそれが、当たり前だとも言つように。

「アンタが創^{MAKES}り出す者達だろうと関係無い。俺は依頼通り、『アンタと清二を会わせる』」

「・・・・・・・・ッ!!」

漣は清一が気を失っている間に、霧彦達に連絡していた。

そして、漣は彼を待つ仲間たちの姿を見つけると、くるりと清二達に背を向ける。

「・・・・・・・・依頼は達成だ。『後の事は、俺達には関係ない。警察にも、俺達はこの状況に関与していないから何も言えない』」

それだけ言い残すと、漣は仲間達の元へと、足を引きずっていった。

まるで兄弟に向かって、残された時間を大切にしろ、と言つかのよう。

第十二話 事件の終わりと事件の始まり

その後、清一はすぐさま突入した警察に確保されてしまった。創り出す者達という犯罪グループに所属しているのだからあたりまえだろう。

確保時の様子を清二に聞いてみると、特に抵抗もする事無く、あっさりと捕まったという。

そして、あの事件で傷を負った漣は現在、病院に入院中だ。

「無茶したなあ」

「……………ほっとけ」

ニヤニヤ顔の霧彦に、ぶすつ、とした顔で漣は答える。

全身の所々と頭に包帯を巻き、そして右腕はギプスか何かで固定されている。治癒魔法も無い事は無いのだが、これ程の重症の怪我を治そうとすると、まずは肉体の再生から行わなければならず、それにくわえて消費魔力や時間がかかるため、病院全体の事を考えれば、まだ魔法を再現するよりも最新科学で治療した方が効率的だ。

「で、清二さんからの報酬の方はどうなったんだ？」

「食堂の食事券一週間分をくれた」

「おおっ！ 良い物貰ったな〜！ これで一週間食料に困らないぞ」
「」

「西人は一体どんな生活を送っているんだ。つか何しに来たんだ」
おまえ

「？ 勿論目の保養だよ。純白天使のナースを見に来たに決まっているじゃねーか」

西人は悪びれずにきよとした顔で言う。そして丁度そのタイミングで、病室のドアがガラリと開いた。入ってきたのは、ハルだった。

「全く、毎回毎回無茶ばかりして。仕方が無いわね。アンタは」

「……………面目しだいもございません」

そんな漣の様子を見て、西人が霧彦にこっそりと耳打ちする。

「どうしたんだ？ 漣の奴。なんだかやけに大人しいけど」

「あ……………入院してから何かとハルが世話をしてくれてたから頭が上がらないんじゃないか？」

「将来尻に敷かれるタイプだな」

そしてそんな西人と霧彦の会話を聞いた、いや、感じ取ったハルがぎろりと西人と霧彦を睨む。

「何か言った？」

「「いえ。何も」」

そしてハルは漣のベッドの側に座り、しゃりしゃりとリングをむき始めた。

「．．．．ハル？」

「何よ」

「別に俺にかまわなくてもいいんだぞ？　ハルだって忙しいだろうし」

漣にとつてはそれは確かに本心だったのだが、今このセリフを聞いた霧彦と西人の二人は、

（（じ、地雷を踏みやがった．．．．っ！！））

としか思えなかった。

そしてハルがかゝつ、となつて、あわてて口を動かす。

「べべべ、別に忙しいわけじゃないし！？　アンタの事なんかかまってもなんでもないしっ！！」

ハルは一気にリンゴの皮をむき切り、ズボオッ！！と漣の口にむき終わったリンゴを突っ込んだ。

「ふ、ふごっ！？　（訳：な、なぜっ！？）」

そんな二人の様子を見た西人が、

「良い夫婦だな」

とポツリと呟いた。

「ん？」

西人のポータブルから、通話が入る。

「はい。ん？ ああ、はい。解りました。漣。お前に電話だ」

「俺に？」

漣は、西人のポータブルとの通話機能を繋ぐ。

「もしもし」

「お久しぶり」

その声は、漣には聞き覚えがあった。

「・・・・・・・・伊波直美・・・・・・・・」

創り出す者達のメンバーにして、あの『連続誘拐事件』にも関わっていた人物。伊波直美。警察のデータベースに西人がハッキングして情報を収集した結果、伊波は逃走中という事は知っていたのだが、まさか向こうからコンタクトをとってくるとは思わなかった。因みに、なぜ小野田清一があのような犯行を行ったのかはまだ明らかになっていない。

「ちょっと西人君にアドレスを教えてもらってね。最近はそれなりに情報交換をしてただけど、今日は思い切ってアナタに電話をかけてみたの」

「で、何のようだ？」

「小野田清一について」

「何？」

小野田清一は既に刑務所に収監されており、伊波には何も手を出す必要が無いハズだ。むしろ、得られる物は何も無い上に、リスクが高い。

「今の内にあの人の周囲になんらかの手を打っておいた方がいいわよ」

「どついう事だ？」

漣の言葉に伊波はそつと告げる。

「事件はまだ、終わってないという事よ」

「.....!」

その言葉でようやく、漣はその事に気づいた。

そもそも、今回の事件の黒幕は犯罪組織MAKES創り出す者達だ。漣はその末端の事件を処理したにすぎず、更にその処理を完全には終えていない。

MAKES創り出す者達を止めなければ、まだ事件は完全に決着をしたとは言えない。

「小野田清一は警察の証言によれば、MAKES創り出す者達を抜けて、また

やり直そうと思っっている。それは創り出す者達にとっては裏切りであり、創り出す者達は裏切った者をそうやすやすと生かしておかないわ。多分、小野田清一には制裁が加えられる。……例えば居る所が、刑務所の中でもね」

その伊波の言葉に、漣はぎゅつ、と唇をかむ。

小野田清一は、やり直そうとしているのだ。その事を、漣は確信していた。なぜなら清一が儀式の『核』として使っていたのは、写真盾に綺麗に収められていた、『家族の写真』だった。

これは儀式との相性が良いという『道具』では無い。しかし、清一はあえてそれを重要な儀式の『道具』として、『核』として選んだのだ。もしかしたら、迷いがあったのかもしれない。

だから漣には、証言を知った瞬間、確信があった。清一はやりなおそうとしたのだと。

大切な人達と。

一度闇の中に落ち、そしてまた光をつかもうとしている。

しかし、創り出す者達はそれも許さない。

光を求めようとした者を、再び闇の底に突き落とす。

「かくいう私も創り出す者達を抜けた身だからね。何時追って来るか解らないわ」

楽しそうに笑う、伊波。

それは追ってから逃げている逃走者の笑みでは無い。どこか吹っ切れたような、楽しげな笑み。

「何時制裁が行われるのか、解らないのか」

「無理ね。制裁を行う人間だけは解るけど、今も何処に居るのか解らないし、何よりその人は気ままだからね」

「．．．．．ソイツの特徴は」

「事件を未然に防ぐ気？　今のアナタじゃ無理よ。止めておきなさい．．．．．と、言いたい所だけど、どうせ行くんでしょうね」

漣は何も答えない。そして、その沈黙が答えだった。

「いいわ。教えてあげる、って言っても、私はその人の姿を知っているわけじゃない。知っているのはそいつが何て呼ばれているのかぐらいね」

「それでもいい。教えてくれ」

伊波はフツ、と微笑み、そして、口を開く。

「——『天才』」

ゴウツ、と夜風が唸る。

ある一人の少年が、ビルの屋上に立ち、眼下にそびえる刑務所を見据えていた。

この刑務所は、魔法の再現という技術が現代にあるが為に、その設備も主に対魔法用を想定して構造されている。外部には勿論、内

部にも『対魔法用装甲』という物が設置されており、魔法攻撃を緩和する物だ。緩和する、と言っても、並みの魔法攻撃ではその装甲には傷一つつかない。

その冷たい瞳は、ただ一点。獲物の居る場所へと向いている。

少年は手に大剣を構成し、そして大剣を、振るった。

直後、ゴアツ！！と、魔力で構成された斬撃が刑務所を直撃した。厳密には、罪人を収監しているエリアを。

ボンツ！！と破壊された刑務所から、途端に警報が唸る。しかし、少年はそんな事を気にも留めずにフツ、と刑務所に着地する。そして、今は少年の手によって破壊された、罪人が収監されているエリア。破壊されたのは至ってピンポイントの場所。——小野田清一が収監されている監獄だった。

清一は、ゆっくりと迫り来る少年を見た。その冷たい瞳と目を合わせた瞬間、ゾワツ、と背筋が凍るような気がした。

「俺が誰だか知らねえだろうが、俺が何をしに来たかは、解るよなあ？」

警報が鳴り、少年の元に警備の人間がかけつける。しかし、少年はそれを気にも留める様子は無い。ただ、めんどくさそうに大剣を軽く振っただけで、ゴバツ！！という斬撃と爆発と共に、警備の人間達が吹き飛んだ。

この刑務所についている警備の人間は、ある程度、対犯罪魔法再現者用に訓練された者ばかりだ。それを、少年はいとも簡単に一掃してしまった。

体格も大剣を振るう程大きいとは言えない。むしろ普通だ。そして大剣を扱う者としては華奢といえるだろう。どこに大剣を振るう事の出来る力があの体の中にあるのだろうか。

清一は、この後自分がどうなるのか解っていた。しかし、それを知った上で、あえて言う。

自分の今の気持ちを。

慈悲を求めるように。

一度だけ機会を与えてくれと言うように。

「俺は．．．．．やり直したい。家族と、一緒に．．．．．！だから．．．．．！」

しかし、少年はまるで興味も無さそうに、ただその冷たい瞳で見下ろすだけだった。

慈悲等、一片も感じられない。

「そうかよ」

それだけ冷たく言い放つと、少年は大剣を無慈悲に振るう。

収監エリアが、一夜にして爆発と共に壊滅した。

その後、重症となった清一が発見されるのは、三時間後の事だ。

第十三話 昼休みの舞台裏

入院から五日後。漣は晴れて退院し、学園に再び通い始めた。腕の方はちゃんと完治している。この完治スピードは、再現された魔法と共に発達した医療技術の賜物といえるだろう。

「なんだかまだ三日目なんだよな。学校に通う事自体は」

「アンタが怪我したんだから、当然でしょ」

昼休み。

学園の中庭にあるベンチスペースに漣、霧彦、ハル、西人が集まって共に朝食をとっていた。

授業の方はというとちゃんとついていけている。元々成績自体は良い為、すぐに授業内容を理解する事が出来ている。

「それにしても、聞いたか？ あの『刑務所襲撃事件』の話」

西人がテーブルの上に置いていたパソコンを漣達の方に向ける。そこにはニュースサイトのTOP記事に、『刑務所襲撃！！ 犯人の狙いはいかに！？』と、デカデカと書かれた黒い文字が躍っている。

「犯人は収監スペースを襲撃しただけで撤収したってよ。その他は本当に何も無かったらしい。．．．．その襲撃犯を取り押さえようとした警備の人がやられたって話もあるけど。結構被害が大きいいみたいだな」

「・・・・・・・・」

漣も霧彦も、その事件についてはある程度調べた。そして、重傷者の中に小野田清一の名前も確認している。

——多分、小野田清一には制裁が加えられる。・・・・・・・・
例え居る所が、刑務所の中でもね。

伊波の言葉を漣は思い返す。

襲撃を防げなかった事に対する無念の気持ちで漣の心を支配する。怪我で動けなかった事など、漣には関係無かった。幸い、なんとかまだ清一は生きている。しかし、もう襲撃が来ないという保障は無い。

今後の行動をどうすべきか、漣は考える。そこで、漣はじーつ、と自分を見つめている視線に気がついた。

——ハルだ。

「？ ハル？」

「ああ、アンタ、腕はまだ痛むの？」

「いや。ちゃんと完治し・・・・・・・・」

「右腕が痛むなら仕方が無いわねっ！ 私が食べさせてあげるわっ
！」

いや、いいって、と漣が返答する前に、ハルの手にある箸が漣の口まで迫ってきた。漣は観念した様子で、それに応じる。

「あ、あーん」

「あーん……………?」

わけのわからないまま、ぱくつ、とハルの箸から肉じゃがが漣の口へと運ばれ、もぐもぐと咀嚼する。

「ど、どう……………?」

「うん。美味しいけど」

「そ、そう」

パアッ、と笑顔を見せるハル。

「?」

漣はもぐもぐと肉じゃがの咀嚼をしながらきょとした表情をしていた。西人が「おーおー。お熱いねえ。お二人さん」とひがみ百%の目で漣を見つめる。

霧彦はまるでいつも通りという風に、「お、こりやもしかしてハルの手作りか?」とケラケラと笑うと、「ちっ、ちちち、違うわよっ!」と、顔面に右ストレートを受けた。

コトツ、と、陸上競技でよく使われるバトンのような筒を置く。少年は最後の一つを設置し終えた。準備は完了だ。周囲には同じ筒が何本も置いてある。そしてその真上には黒い、火薬のような物が詰められてあった。

このボタンは通称『炎砲筒』という物だ。一般的には、炎系統の魔法の再現が苦手な人や、手軽に炎の魔法を再現出来る物で、よくバーベキューは、キャンプ等の時に使われる事が多い。

しかし、知識のある者が少しいじれば、火力を自在に調節出来る。例えば、複数本集めた『炎砲筒』の火力を一気に大量の火薬に集約させ、爆発を行わせる事も出来るだろう。

今、この少年がやろうとしている事はまさにそれだった。

しかも、火薬として使っているのは、打ち上げ花火等で最近よく使われている、『連火源』という火薬で、少量の火種でも、次々と連鎖し、火力を爆発的に高めてくれる物だ。

そして、もしも。

少量の火種で花火を起す事に足りる程の爆発を生み出す火薬と、集約させる事で大規模爆発を起す事の出来る炎を合わせるとどうなるか。

恐らく、学校の校舎ぐらいは軽く吹き飛ばせるだろう。

少年はニヤリと笑みを浮かべ、その場を後にしようとした。

その時。

「悪いが、そうはせんぞ」

「ッ!!」

少年は背後を振り返る。そしてそこに居た少年の右腕には、学園の校章に、その両端に翼が描かれたマークのプレートが付けられていた。

そのマークが意味する物。

それは。

「生徒会執行部所属の那覇信也だ。校舎爆破未遂の現行犯だ。貴様を確保する」

「やはり生徒会かつ！」

少年は信也の元から逃亡をはかる。少年はすぐさま魔法を再現する。再現した魔法は脚力強化系魔法だ。少年は、通常の人間にはありえないぐらいの高さをトンツ、と軽く地面を蹴るだけで飛んだ。

「逃がすかつ！！」

信也も同じく脚力強化系の魔法を再現して、後を追う。そのスピードは、逃走する少年よりも速い。

元々、那覇家が得意とするのは風を操り、自身の体に纏わせて戦う、スピードタイプの魔法だ。

相手よりも早く動き、敵を斬る。

相手の方が早く動いてもそれよりも早く動き、敵を斬る。

常に相手よりも早く。

常に相手の速さを超える。

それこそが那覇家の魔法の特徴。

よって、信也に『逃走』という選択肢は実は不利な選択だったと言える。

一度校舎の屋上に着地し、そして再び飛ぶ。信也はポータブルから『モーメント』を再現する。これは簡単に言えば、『使い手の早さを高めてくれる剣』だ。元々スピードには名のある那覇家の者がこれを使った場合、その加速スピードは計り知れない。

そして、信也は『モーメント』の能力により、加速し、一気に逃走する少年との距離を詰める。しかし、相手はそれを見越していたのか、ポケットから『連火源』が詰め込まれた『炎砲筒』を信也に向かって投げつける。

「ッー!!」

うつかり斬りつけてしまった、なんて事は信也はしない。ただ、問題は相手の少年が手に持っていた（魔法で再現した）小型のピストルのような物を持っていた事だ。

これは信也を狙う物では無い。むしろ、狙ってくれた方がありがたいと信也は思った。相手の少年の銃弾ごとき、信也にとってはどうという事は無い。

問題は。

そのピストルが、『連火源』が詰め込まれた『炎砲筒』を狙っていたという事だ。

（くそっ！ 自分ごと、俺をまきこむつもりか……ッー!!）

捕まるよりはマシだと判断したのだろう。その引き金は空中で迷わず、引かれた。

ダアンッー!! と、轟音が空に響く。

信也は一瞬、爆発を覚悟したが、何も起こらなかった。空中の『炎砲筒』は依然とくるくると空中で回り続けている。

弾丸は、一切当たってはいない。

「何!？」

「.....!」

信也の判断は素早かった。

元々、那覇家の魔法は風を操作して加速する魔法が多い。よって、空中で風を操り、加速し、一気に『炎砲筒』を奪い去るのは用意だった。同時に、少年への距離を詰める。

「チェックメイトだ」

ズガッ!! と、『モーメント』の剣が少年へと激突する。その鋭き一閃は的確に相手を捉えた。

『モーメント』には峰という物が存在しない。

よって、目標を傷つけないように（正確には殺してしまわないように）『魔力コーティング』という作業を行い、刃の片面に魔力で構成した峰のような物を施すのが生徒会の規定となっている。

空中での攻防は、アッサリと決着した。

「.....」

信也は、校舎の屋上を見上げる。

そこに居るのは、スナイパーライフルを構えた同僚が居る所だった。

ヒヨオオオオッ．．．．．と、風が頬を優しくなでる。

少年は、信也が目標を確保した事を確認すると、そっ、とスコップから目を離す。

いがらししゅつと
五十嵐驚斗。

これが、この少年の名前だった。

驚斗が行ったのは、簡単な事だった。目標が『炎砲筒』に向けて放った弾丸を、自分が放った弾丸で撃ち落したのだ。

そして、驚斗その屋上から、別の地点を見下げる。

眼下に居たのは、ハルに顔面を殴られて痛そうな顔をする霧彦。

「後藤．．．．．霧彦．．．．．」

驚斗はフツ、と微笑むと、校舎の中へと消えていった。

第十四話 十二

「痛々しいな……」

ポツリと西人が呟く。

漣は、探偵部のメンバーと共に、襲撃されたという刑務所の跡地へと赴いていた。一応はまだ正式に放棄されたわけではないのだが、刑務所は壊滅的なダメージを受けており、最早『跡地』という表現しか当てはまらなかった。

清一はまだ病院に隔離されている。なんとか一命は取り留めてはいるが、まだまだ予断を許さない状況だ。

門はひしゃげ、瓦礫が元あった刑務所の大半を占めていた。

「これだけの破壊力。並みの再現者じゃねーな」

霧彦が冷静に分析をいれる。

「とにかく、何か手がかりを見つけねえとな」

と、漣が刑務所へと一歩足を踏み入れる。

が。

「待て。ここは立ち入り禁止だ」

壊れた門の前で、漣は聞き覚えのある声に呼び止められた。声のした方へと振り返ると、そこに居たのは、信也だった。

「那覇？」

「なっ！ 天野漣！ どうしてここに！？」

信也がかけよってくる。

「お前こそ。どうしてここに？」

「僕は生徒会だ。ここの警備の一部を任されている。当然だろう。
．．．ハルさん。こんにちは」

にこりと、信也はハルに向かって挨拶する。対してハルは「こ、
こんにちは」ときこちなく返事をした。

生徒会は、言うなれば各学園の代表だ。その権限は学園内に留ま
らず、学園外でも発動する事が出来る。通常の生徒よりも一段階上
の権限を持っている、といえれば解りやすいだろうか。
よって、このような警備も任される場合もあるのだ。
信也の右腕には、生徒会の証であるプレートが光っている。

「そういえば最近、学園の侵入者を捕らえたみたいじゃねえか」

「ふん。まあな。相手はどうやら『新生対抗戦』の妨害をする為
に学園を爆破しようとしたらしい。ま、僕が爆破をする前に捉えた
が」

まんざらでもないような顔をする那覇。勝手に内容をペラペラと
話す所を見ると、恐らくハルに対するアピールなのだろう。

そして漣はタイミングを見計らい、

「そんじゃあな」

「ああ」

それだけ言うと、漣はつかつかと中へと入った。

「って待て!!」

「何だよ」

中へ入ろうとする漣をあわてて押しとめる信也。

「だからここは立ち入り禁止だと言っただろう!」

「なんだよ。ケチだな。通らせてくれよ」

「だから禁止だ!」

結局、中へと入らせては貰えなかった。そして信也にしては以外と、漣はあっさり引き下がった。

漣達は門を後にした。

「なんか、やけにアッサリと引き下がったな?」

と、西人が呟く。

対して、漣はニヤリと微笑む。

「正面から入れなくても、方法は他にもある」

刑務所をざつ、と見回した所、どうやら周囲には生徒会の警備が

張り巡らされているらしい。漣達が侵入できるスペースは限りなく0に近い。

「で、どうするんだよ」

刑務所から少し離れた公園で、西人が漣に尋ねる。対して漣は学生服の内側からゴソゴソと携帯端末を取り出す。それは小型のテレビのような形をしていて、ディスプレイは黒くなっているまま、沈黙を保っている。

「それは？」

「セブンス・アイテム アイテムディスプレイ だ。そしてこっちが……」

今度はポケットから取り出したのは鳥の形をした機械だった。

「『多目的鳥』 マルチバード。これも小型のポータブルみたいな物で、この鳥の えいぞう 見る景色をこっちの『道具表示』 アイテムディスプレイ で映す事が出来る」

「要するに、その機械の鳥を操って偵察に使う事が出来るって事か」
「そういう事だ」

漣はそう言うと『多目的鳥』 マルチバード を手から離れた。『多目的鳥』 マルチバード はすうつ、とスムーズに空を飛んでいった。

『多目的鳥』 マルチバード は、目的のポイントをあらかじめ入力すれば、自動でそのポイントまで飛行する事が出来る。

そして、途中から手動操作に切り替える事も可能だ。

警備の生徒会の生徒を上空から潜り抜け、『多目的鳥』 マルチバード は刑務所跡地の中へと侵入する事に成功した。

送られてきた映像を、『道具表示』から見てみる。辺りはまさしく『廃墟』となっていて、瓦礫が大半を占めていた。

「収監エリアは確か……………」

「そこから百メートル東に行った辺りだったと思うぜ」

西人の指示に従い、『多目的鳥^{マルチバード}』は空を飛ぶ。そしてたどり着いた収監エリアも、やはり瓦礫が大半を占めていた。むしろ、他のエリアよりも酷い。

「ここで、小野田清一は、襲撃を受けたんだよね……………何か手がかりは無いのか……………」

しかし、辺りを探索しても何も見つからなかった。ある程度予想はしていたが、相手は犯罪グループ、『創り出す者達^{MAKERS}』だ。

そう簡単に現場に証拠を落としていくとは思わない。

逃走の際に証拠となるような物はちゃんと処分しているのだろう。

「手がかりはあの映像だけか……………」

漣はここに来る前に、警察のデータベースにアクセス（ハッキング）して、刑務所が襲撃された際の映像を入手している。

清一が襲撃された際に、襲撃者の映像が映し出されている。敵は襲撃の際に『ジャミング』を行っていた為に映像自体は鮮明とは言えないが、襲撃者の形だけはなんとか捉える事が出来ていた。

（あの形からして、敵は男……………それも大剣の魔法を持つ……………年は俺達と同じぐらい、か？）

今はこれぐらいしか解らない。

圧倒的に敵の情報が少ないからだ。

結局、今日は特にこれと言った情報が得られないまま撤収した。

そして、新たに始まった事件は動き出す前に、また別の事件が動き出す。

数日後。

事件はこれと言った進展を見せなかったが、学園内では新たな事件が巻き起こった。

近々、『新入生対抗戦』という物が開催されるらしい。

この『新入生対抗戦』は、文字通り新たに学園に入学した新入生達の実力を確かめる場だ。ルールは簡単で、まずは新入生同士でチームを組み、そして他のチームと魔法を用いた対決を行う、という物だ。

この大会の目的は『新入生のやる気と魔法再現技術の向上』にある。

そして、生徒達はこのイベントに大きな盛り上がりを見せている。なぜならこれは全校生徒が見る物であり、その注目度合いも半端では無い。

各々、この『新入生対抗戦』に向けて魔法に磨きをかけてくるだろう。

そして、その『新入生対抗戦』に備え、二日後に学年全体で模擬戦のような物を行う事になったのだ。

「はあ……俺はこんな事やってる場合じゃねえんだけどなあ」

「ま、そう言うなって。息抜きも必要だしな」

教室の片隅でため息をつく漣を、西人がなだめる。

机の周りにはハルと霧彦も居た。そもそも、こうやって『探偵部』の面々が集まっているのも、ある目的の為だった。

この『新人生対抗戦』はチーム戦。当然、模擬戦もチーム戦となってくるだろう。実際に先頭に参加するのは三人だが、規定で一チーム六人のメンバーを必要とする事が義務づけられている。

つまり、今の『探偵部』全員が参加しても足りない、というわけだ。

「チームが出来なかったら出来なかったらで余った奴等と組む事にはなってるんだけど、どうせそうなるなら今からそれなりに実力のある奴等を捕まえておいた方がいいよな」

と、西人がはりきっているが、霧彦がふとした疑問を述べる。

「それについては否定はしないが、アテはあるのか？」

「んー。そうなんだよなあー。俺のデータベースはまだ一年生全員分を把握しきれていねえし」

「それにしても、アンタ、随分積極的ね？」

ハルの言葉に西人は目を輝かせる。

「あつたりまえだろ！　こんなイベント、情報収集の大チャンスじゃないか！　この一年生の情報はいずれ役に立つかもしれないだろー！？」

テンションの上がる西人にもはやついていけないと思ったハルは、ふうつ、とため息をついて、「はいはい」とだけ答えた。

そして机に漣はというと、

「で、肝心のその残り二人のメンバーはどうするんだよ」

と今、まさに直面している問題を再び持ち出した。同時に、西人から「そうなんだよなー」というため息が漏れる。

「すみませーん。もしかして、『新入生対抗戦』のメンバー探してる？」

「お、おおっ！ 探してる探してる！ しかも丁度二人っ！」

まず話しかけてきたのは、髪をポニーテールにまとめた少女だ。そしてその後ろに隠れるようにもう一人の大人しそうな少女が居る。

「ん？」

そして漣には、（勿論、霧彦、ハル、西人にも）その大人しそうな少女に見覚えがあった。

「陽子ちゃん？」

ポツリ、とハルが言ったと同時に少女の後ろに隠れていた陽子が顔を出した。

「い、ごぶさたしてます……………」

「ん？ 知り合いだったの？」

「えっと、まあ、知り合いってほどじゃないけど……」

ハルが探偵部を代表して答える。すると少女は嬉しそうに表情をばあつ、とさせ、

「そんじゃあ話は早い！　っという事で、私達もチームに入れてもらってもいい？」

「オッケー、オッケー！　いやあー、良かったあー！　なんとか見つかって！」

あつはつはつ、と漣達をほったらかして互いに笑う少女と西人。当惑したハルは陽子に説明を求める。

「あの、この子は？」

「えっと、友達、です」

「名前は、晴葉日向はればひなたって言うの。よろしくねっ！」

「えっ、あ、うん」

漣達がぼーんとしている間に、なにやら二人の新メンバーが追加されてしまったのだった。

ある一人の少年が、夜道を歩いていた。

その表情は楽しそうに微笑んでいるようにも見える。しかし、見る者によってはそれは悪魔の微笑みのようにも見えらるだろう。

その少年は、仲間内ではこう呼ばれていた。

——『天才』、と。

そして、そんな少年の手にあるポータブルから、通話が入った。

「シュロットヘンドラー」

「……………なんだ」

「小野田清一の件だが、あの『Aポータブル』の回収は済んだのか？」

「ああ」

少年、シュロットヘンドラー『破壊者』は真つ直ぐと、何かを見ながら、見つめながら、男の声の通話に応じた。その瞳は一体、何を見ているのだろうか。

「そうか。ならいい。……………あの『例の少年達』だが、見つけたぞ。今からデータをそちらに送る」

「……………」

シュロットヘンドラーは答えない。だがしかし、その表情は先ほどよりも楽しげだ。そして、ポータブルに送られてきたデータに目を通す。

「奴等は『第千百二十七学園』に所属している。二日後に模擬戦が

行われるから、そこが好機だろう」

「そうか」

「お前の任務は『オリジナル』の魔法の奪取だ。．．．．．しくじるなよ」

「解ってるつつってるだろーが」

それだけ言うと、シュロットヘンドラーは通話を切った。月明かりが、少年を照らす。

シュロットヘンドラーはただ静かに、獲物との邂逅を待ちわび始めた。

「天野漣と、後藤霧彦、か．．．．．せいぜい俺を楽しませてくれよ？」

第十五話 衝突↓フリーズ↓制裁

陽子に日向。

この二人に、『探偵部』の存在を知られるのはそう時間はかからなかった。

そもそも、『探偵部』、と一口に言ってもまだ申請はしていないので正式に部が立てられたワケではないのだが。

「どうして部活動申請をしてないの？」

放課後の教室で、ふと、日向が切り出した。

教室には漣、霧彦、ハル、西人、陽子、日向意外には生徒は居ない。元々、模擬戦のチームメンバーの自己紹介をかねて、最後に教室の鍵を閉める、という約束の下、この教室を一時的に借りているだけだ。

今は机を複数個くつつけた状態でチームメンバーで話をしていた、という状況だった。

「そっぴゃあ忘れてたな」

と、情報屋の西人が思い出した、というように声をあげる。それに同調するように霧彦も追い討ちをかける。

「でもま、作った後に当の本人の漣が入院しちゃったからなあー」

「悪かったな」

ぶくつ、と漣が膨れる。それを見た日向が、

「あはは。以外と可愛い所もあるねえー」

と何気なく言ったのだが、それがハルには地雷だった。

「って、何いつまでもデレデレしてるのよっ!」

「俺は別に……ぐほおっ!」

思いつきり右ストレートを顔面で受け止める漣。このままだとまた入院しそうだ、と思ったのは当然だった。

「そんじゃあ、一気に申請を済ませちゃおうか」

日向は自身のポータブルから部活動の申請画面を立ち上げる。部活動の創部を申請する際にはまず、部活動の詳細（部員等）を入力したデータを学園のポータブルインストールに提出し、許可が降りればその部は晴れて部活動を名乗る事が出来る。

因みに、この学園において部活動を創部する際に顧問の教師を必要としない。

そもそも、申請自体は各個人の自由で、人数も関係は無い。申請して許可が降りれば、もうそれは部活となる。

よって、この学園は部活動という物が数多く存在している。その全てに顧問の教師など配置出来るわけが無いのだ。

「まずは部活動名………探偵部………っと。それで、部長は、………晴葉日向………っと。」

「「ちよつとまで!」」

止めたのは漣と西人だ。

「部長は俺だろっ！」

そして同時に叫んだのも漣と西人だ。

「だからこそだよ」

「ッ!？」

「だって部長の取り合いになるのは目に見えてたんだから。だから私になるんだよ」

「……………」

まあそれなら文句は無いか、としぶしぶ引き下がる二人。
ハルはそんな漣の様子を見て、「バカじゃないの?」と言った
め息をついた。

模擬戦前日。

『探偵部』にとって、思いがけないトラブル、いや、幸運が舞い
込む事となった。

それは昼食の席の事。

「模擬戦を申し込まれたあ!？」

「そっ」

いかにも上機嫌、といった様子で、日向は答える。悪気など一切

感じられない。むしろ楽しげですらある。

「なんでも、模擬戦にむけて練習したいから相手にどうだ？　って」

「で、誰から」

西人が痛そうに頭を抑えながら尋ねる。

「那霸君」

(やらかしやがったこのアマアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！)

那覇家の實力を知っている西人としては、ぜひとも避けたい相手だった。西人に見れば、子猫がブルドッグに向かって「かかってこいよこのクズ野郎」と言っているような物だ。

「取り消して来い！ 今すぐ！ 閃光のごとく！」

「あつはつはつ。もうだめだめ。だってその対決、今日の放課後だもん。」

⌈
.
.
.
.
.
.
!
!
⌋

ガクツ、と両手を教室の床につける西人。

「那霸か。ま、肩慣らしにはなるだろ」

「まあなー。丁度練習にはなるだろうな」

「お前らだけだ。そんな事思っているのは」

「そつえば、陽子ちゃんは？」

ふと、ハルが話題をぶった切る。そもそもハルにとって信也はある意味天敵（？）であり、そもそもこの模擬戦の原因は恐らく自分にあるのだらうと察している為に、話題を変えたかったのだらう。

「陽子なら図書館だよー。多分。なんか返却する本があるとか何とかで。あつ。そーだ。漣君、呼んできてくれない？」

「俺？　なんで」

「ぶちよー命令です」

「へいへい………」

仕方が無く、と漣は席を立つ。

ハルはそんな漣を少し不安げな目で見送るのだった。

図書館には、紙媒体、データ、様々な形式で資料が保管されている。

それは『資料』、という形式だけではない。しかし、そこは学園という所であるが為に『小説』も当然ながら完備している。

陽子が図書館に行くのは、もっぱら『小説』の為だった。

そもそも『資料』を利用する生徒は少ない。

陽子は毎週図書館へと通っていた。小さい頃から陽子は本が好きで、よく読書をしていた為に、この学園に入学してもやはり図書館

へと通っていた。

今日の場合は本を二冊借りた。

片方には学園のカバンを手に持っているの、なんとか両手で本を持ち上げている状態だ。

ぽーっ、と、陽子は先日的事件の事を考える。

(カッコよかった．．．．．なあ．．．．．)

陽子は先日的事件で、自分を助けに来てくれた漣の事を思い出す。漣は、陽子の目から見ればそれはまるで物語の中に出てくる王子様で、そしてカッコよく自分を助けてくれた。

それからなぜか漣の事が気になっている。

(はあ。でもあんなに可愛い幼馴染がいるんだったら、私なんか．．．．．)

実は外見は悪くない(むしろ良い)陽子なのだが、何しろ自分に自身が持てない。

そして、ため息をつきながら陽子は廊下の曲がり角を曲がった。

タツタツタツ、と、廊下を漣は走る。

昼休みはあともう少しで終わってしまう。急がなければならない。

(にしても、どうして俺なんだ?)

疑問を抱きながら、とりあえず漣は歩を進める。

図書室は、この時間帯ともなるとあまり利用者が多いとは言えない(普段はそれなりに居るようだ)。

よって、図書室へとつながるこの廊下も今は人が居ない。

（放課後は那覇と模擬戦か。退院後の肩慣らしにさせてもらうか）

と、放課後の模擬戦に向けて思いをはせる漣。

——それが、いけなかったのだろう。

「ッ！？ 日田！？」

「えっ？」

漣は、持ち前のMT、『反応速度』で、日田との衝突は避けるように動いた。具体的には、陽子の目の前でなんとか足と止めた。

しかし、走っている途中で急に足を止めた場合、前のめりになつて倒れる事となる。

そしてもっと具体的に状況を説明すると。

漣が陽子を押し倒した形となった。

しかも、手が陽子のつつましいサイズの胸をつかんでしまった形で。

「……………」

「……………悪い^{わり}」

その漣の言葉を聞いて、かあつ、と顔が火照る陽子。
正直言つと、今、ようやく、状況を理解したのだ。

「いいい、いえっ、そのっ、あのっ」

あわてて何か言おうとする陽子。

しかし、その先の言葉が紡がれる事はなかった。

なぜなら。

何か嫌な予感がする。

ハルはふと、そう思い、教室を飛び出して、漣の後についていった。

途中、見慣れた漣の帽子が見えた。

「居たっ。漣」。ちょっと、待ちなさい……………」

廊下を曲がり、漣を追いかけようとした瞬間見えた光景とは。

漣が、陽子を押し倒していた所だった。

「よ……………」

一瞬、フリーズするハル。

そして。

「さっさとそこから退きなさい！ この変態！」

漣に渾身のドロップキックをお見舞いしてやった。

第十六話 過去からの挑戦者

あの図書室近くのゴタゴタの後、漣は顔を腫らして教室へと赴く事になった。陽子は顔がまだ赤いままだったのだが、ハルに対する謝罪（謝る相手が違うような気がするが）に精一杯だったので、声をかける所ではなかった。

陽子の口添えもあり、なんとか誤解も解け、そして六人は五時間目の授業に望んだ。

授業内容は模擬戦にむけた各チームの訓練的な物で、チームが決まっている所はそれぞれのチームで訓練する事となった。

この授業の狙いは訓練よりも、未だチームメンバーの決まっていない生徒への配慮とも言える。

「それじゃ、まずは戦力確認だね。漣君と霧彦君。まずは魔法を出してみて」

日向が手に持っているのは霧彦が纏めた、各個人の得意魔法の記載されている表だ。他のチームに漏れてはいけなかったので後で当然処分する。

漣と霧彦は同時に『システム SYSTEM - デルタ Delta』と『システム SYSTEM - エプシロン Epsilon』を発動させる。

漣の手には紅い刀が、霧彦の手には白いハンドガンが展開された。

「おおっ！ これがウワサの『オリジナル』の魔法！ 始めて見た」

日向は目をキラキラと輝かせながらじろじろと『システム SYSTEM - デルタ Delta』と『システム SYSTEM - エプシロン Epsilon』を見回す。

その目はもはや戦力確認、というよりも好奇心によって支配され

ている。

「お前、ただ単に俺達の魔法を見たかっただけだろ」

と、漣がため息混じりに言う。

「あはは。ばれちゃってたか」

オリジナルの魔法、という物は珍しい。

むしろただの学生が持っている事自体がおかしいのだ。

なにしろオリジナルの魔法のレア度は世界でもトップクラスに位置づけされている。

日向が興味を示すのも無理はなかった。

「これは放課後の模擬戦が楽しみだね」

「って待て。お前の魔法も見せろよ。人の魔法ばかり見たまんまはねえだろ」

「んー。まあいつか」

そう言うつと、日向はポータブルから術式を構成、そして魔法を再現する。

再現された魔法は、花だった。

小さな花が一輪、日向の手の中で咲いていた。

「ハンド・フラワー手の花。まあ簡単に言えば色んな花を咲かせる事の出来る魔法かな」

そう言うつと日向はフツ、と別に再現した種のような物を地面に落

とした。

すると、落ちた種が地面で急成長し、日向と同じぐらいの大きさのひまわりを咲かせた。

「今造りだしたのはただのひまわりだけど、勿論他の色んな能力を持った花も造りだせるよ」

実際、日向が再現出来る花は数百種類を超える。

それはただの花もあれば、魔法としての能力を持った特殊な花も再現する事が出来る。

一見華やかな魔法に見えるが、実は応用性がかなり高い。

「良い魔法だな」

と、言ったのは霧彦だ。漣もそれは思っているらしく、納得したような表情を見せる。

「そういえば日田の得意な魔法は？」

「私、ですか？」

「ああ。どんな魔法が得意なんだ？ 見せてくれよ」

「は、はいっ」

一度はビルの中で創り出す者達の一員に取り上げられた陽子のポータルだが、それは警察の手によって回収され、現在はちゃんと陽子の手にある。

そして、陽子は魔法を再現した。

手の中に再現されたのは、日向のような花の形をした、水。

トランス・ウォーター
「形在る水。一定の形をした水を造りだせるんです」

通常、水、という物に形は存在しない。

トランス・ウォーター
しかし、この形在る水は逆に術者が定めた形の水を造りだす、という魔法だ。

「後はハルちゃんと西人君だね」

「私が得意なのは基本的に治癒系だし」

「俺も得意なのは情報操作系だからな。その紙にも書いてあるけど、戦闘には向いてないな」

肩をすくめる西人。

「ふーむ。それじゃあ模擬戦の対策としてはどうしようか。こっちのチームって、何かと一点特化型の魔法を使う人が集まってるからね」

日向がうなる。

ハント・フラワー
この中で一番応用力があるのは日向なのだが、手の中の花は文字通り、手の中でしか種を生み出す事は出来ない。

そして、一度に手の中に生み出せる種は現在の所一種類で、一度花を出せば次にまた種を構成するのに時間のロスがある。

対して、その次に応用力があるのは陽子だ。

トランス・ウォーター
形在る水は様々な形の水を生み出せるが、一度出した水は、その形の水が消えるまでは他の水は生み出せない。

応用力のあるこの二つの魔法だが、一度再現した時点で、その種類、形のみの一点特化となってしまう。

問題は漣と霧彦だ。

『オリジナル』の魔法をポータブルの中にインストールしている場合、そのポータブルを使って他の魔法の術式の構成は出来ず、魔法の再現も出来ない。(しかし、それを克服するためのコンセプトとして、『SYSTEM - Delta^{システム}』は作られたわけだが)

とは言っても、『オリジナル』の魔法は他の魔法を再現出来ないかわりにそれを補って余りある程の能力を秘めている。

そして、漣達『探偵部』の勝機はチームでその一点特化型という状況を、チームメイト同士でどうカバーするかにかかっている。

その感覚をつかむためにも、放課後の信也達との模擬戦も案外良いたイミングで舞い込んだのかもしれない。

「チーム戦だからな。互いの弱点を補えるような組み合わせがいいだろ。それか、バランスの良い組み合わせとか」

漣が日向から紙を受け取り、その裏にサラサラと組み合わせを書き込んでいく。

「例えば俺、ハル、日田の組み合わせなら、俺が突っ込んでハルと日田で支援。回復が必要ならハルが俺か日田の回復を行い、日田はハルを守りつつ俺の援護とか」

「べ、別に守ってもらわなくてもいいわよ……あつ。何も陽子ちゃんが嫌ってわけじゃないのよ？ ただこのバカが私を少し見くびりすぎているからというかなんというか……」

「じいじによ」とハルが言う側で、今度は霧彦が紙に書き込んでいく。

「んじゃあ、例えばこれはどうだ？ 俺、漣、西人。まずは西人が相手の居場所をサーチして、俺と漣で近距離、遠距離の攻撃で攻めるとか」

「ちょっと。どうして私が入ってないの？」

日向が途中で割り込む。その疑問には、西人が答えた。

「まあ、この中でまだ一番応用力があるのは日向だからな。手の中ハンド・フラワーの花は『手の中で一つだけしか種を生み出せない』っていう制限はあるけど、日田の形在る水と違って一度再現した花を消さなくてもまた別の花を再現出来るし、その時の選択しだけで色んな面で活躍出来る。ぶっちゃけどこに放り込んでもやっていけるってだけだ」

「へえ。なるほどね」

西人は魔法についてもある程度熟知している。というより、情報屋として、様々な魔法の情報を仕入れている。その中に勿論、手ハンド・フラワーの中の花と形在る水も入っていた。

「ま、その組み合わせは今日の放課後で試せばいいだろ」

放課後の信也達との模擬戦の事を思い、西人のテンションがガクツ、と下がる。

結局、その後すぐに授業の終了を知らせるチャイムがなり、その後の授業も滞りなく終了し、放課後の信也との模擬戦の時がやってきた。

模擬戦が行われるのは学園の中に完備されている実習場だった。
この実習場は学園の中に五ヶ所存在し、今回使うのはその中の内の一つだ。

どうやら信也が事前に予約し、貸しきったようだ。

「はあ、それで、どうする？ 明日行われる本番の模擬戦と同じように三対三なんだろう？」

「ああ。で、その組み合わせについてだが、相手チームの申し受けて俺と霧彦は強制参戦だそうだ」

実習場の控え室で、漣が肩をすくめる。

「そんなの向こうが言い出さなくても当たり前だ。あんな化け物に對抗出来るのはお前らぐらいだしな」

「それで、残りの一人だが……………」

「私が行くわ」

漣が言い終わらない内にハルが自分から名乗り出た。

「向こうにはあの時の女も居るみたいだし、丁度いいわ」

そう言うハルの目はメラメラと紅く燃え上がっている。

「女ってこえ……………」

自然と、漣の口からそんな言葉が漏れた。

実習場のフィールドに出たのは、漣、霧彦、ハル。対して向こうは信也と、ハルともめていた女子生徒（名前は折口楓おりぐちかへでというらしい）、そして、漣達には始めてみる少年だった。

「天野漣．．．．貴様、せっかく俺がハルさんをチームに誘おうとしたのに当然のごとく．．．．ゆるさんぞっ！」

「相変わらず意味のわかんねえいがかりつけやがって。この前の決着をつけてやるよ」

「貴方．．．．あの時の決着をつける時が来たようね？」

「そうね。返り討ちにしてあげるわ」

互いに言い合いをする漣と信也、そしてハルと楓だが、信也と共にいるもう一人の少年はただただ、じつ、と霧彦を見つめていた。

「．．．．．？」

霧彦には見覚えがなかったので、どうして自分がにらみつけられているのが解らなかった。

「後藤霧彦。貴様の事は今までずっと覚えていた」

「と、いう事は前にも会った事があるんだな。悪い。俺は覚えてねえ」

「貴様は覚えて無くて、俺は覚えている」

遡る事一年前。

ある場所で、射撃魔法の大会があった。

ルールは簡単で、射撃系魔法を使った通常の射撃大会と思えばいい。

そして、少年、五十嵐驚斗いがらししゅうともそこに居た。

協議内容は、ターゲットをどれだけ早く、多く、射撃魔法で仕留められるかだった。そして、驚斗は今まで数々の大会で新記録を出し続けてきた程だった。

その大会でも、当然のようにトップスコアをたたき出し、そして新記録もたたき出した。

（つまらんな。周りはどういつもこいつも低レベルだ……これではやりがいが無い）

そう思った瞬間だった。

『おおーっと！ トップスコアだ！ しかも、大会新記録を更新だ！』

「ッ!？」

驚斗は思わずスコア表の所を振り返った。

確かに、驚斗は自分の全力を出し切った。その結果として、かなりのスコアを収めた。

しかし、そのスコアを一瞬にして塗り替えられた。

（バカな……！ 一体誰が……）

スコア表には、五十嵐驚斗いがらししゅうとという名前の上に、『後藤霧彦』とい

う無名の少年の名前が表示されていた。

その記録は、鷲斗の自己ベストすら大きく上回るスコアだった。

「……………ッ!!」

その後、霧彦を探してみたが、表彰式にも出ずにそのまま姿を消してしまった。

それ以降、鷲斗は小規模大会に突如現れた無名の少年、後藤霧彦の名を胸に刻み込み、密かにリベンジを誓った。

そして、入学式の日。

新入生リストの中に、霧彦の名前を見つけた。

そして、ようやくそのリベンジの機会が巡ってきたのだ。

「俺はお前を超える」

「なんだか解らねえが、こいよ。相手になってやる」

模擬戦の開始を告げる、ブザーが実習場に響き渡った。

第十七話 ハルの魔法

ブザーが鳴り響いたと同時に、漣は『SYSTEM-Delta^{システム} Ver^{バージョン}、SYSTEM-Alpha^{アルファ}』を展開。迫り来る信也のモーメントに対し、戦闘態勢へと移行する。漣の動きは、退院後間が無いながらも、一切無駄が無い。

しかし、信也はそれを目の当たりにしても動じない。
なぜなら。

（貴様なら、それぐらいやって当然だ……！！）

信也も、『モーメント』を再現する。

漣の魔法、『SYSTEM-Delta^{システム}』がオリジナルの魔法だ
という事は信也は、初めて漣に会った後に調べて、その情報を得て
いた。

その、能力も。

（『三段階の術式変化』や『術式破壊』は確かに恐ろしくやっかい
だ。……しかしっ！）

信也は迷いも無く漣へと突っ込んだ。

無策、というワケでは無い。

そもそも、信也の魔法、『モーメント』は、漣の魔法には相性が
そこまで悪いというワケではない。

そもそも、どんな魔法攻撃でも、もつと言えば『術式破壊』とい
う当たれば一撃の威力を秘めた攻撃であつても、要は『当たらなけ
れば良い』。

那覇家の魔法はスピードタイプの魔法を得意としている。そして
代々那覇家の者は常に『先制』の意思を持ち、また、『回避』の意

思を持っている。

例えば漣の『SYSTEM - Delta』に『術式破壊』という能力があるうとも、それが発動する前に『先制』し、そして『術式破壊』が発動すれば『回避』すればいい。

—— たった、それだけの事なのだ。

その点に置いて『モーメント』は信也という、那覇家の者に適していると言える。

使用者自身のスピードを上げ、そして那覇家の高速魔法を更に高めてくれる。

模擬戦には、魔法武器の魔力コーティングが義務付けられている。よって、信也は迷いもなく、『モーメント』を振るった。その太刀筋は常人の肉眼では捕らえきれない。

しかし。

「——ッ!」

ギヤリイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイッ! と、『SYSTEM - Alpha』
と『モーメント』の刀身が激突する。

一瞬、火花が散るが、互いの剣に変化は無い。

(ッ! やはり、あの時の一撃を受け止めたのはマグレでは無かったか……!)

信也は、今の一撃でようやく一つの疑問を解消した。
そもそも、那覇家の高速魔法をただの肉眼で受け止められるワケが無いのだ。

しかも、『オリジナル』の魔法はその威力、性能の代償としての魔法の術式をポータブルにインストールした時点で魔法の再現が出来なくなる。

よって、魔法による物では無いといえる。

そして、魔法でないならば、後は答えを出すのには苦労しなかった。

「天野漣。貴様、『反応速度』のMTを持っているんだな？」

「まあ、なッ！！」

ギャリイツ！！と、漣は『SYSTEM - Alpha』で『モーメント』を弾く。そして弾かれた反動でバックステップで後退する信也を更に攻める為に、バックステップによるタイムラグを利用し、『SYSTEM - Delta』を『SYSTEM - Beta』に変形させる。

そして、放つ。

ドガッ！！と、轟音が響いた。そして放たれた弾丸は三発。勿論、規則によりこの弾丸にも魔力コーティングが施されるように術式を少し改良している。

しかし、いくら魔力コーティングを施しているとはいえ直撃すればダメージを受ける。

信也は轟音と着地が同時に起こったと理解した時、『モーメント』を構えた。弾丸は既に目の前へと迫っている。

（――斬るッ！！）

信也は『モーメント』で三発の弾丸を、斬った。

剣は確かに、弾丸を捉え、そして一刀両断した。

「!?!」

「MTを持つのが、自分だけだと思ったのか?」

弾丸を狂い無く斬った事は、マグレでは無い。

モーション・アイ
『静止眼』。

高速で動く物体の動きを捉える事の出来るMT。さいのう

那覇家の魔法は高速魔法。そして、信也の使う『モーメント』は使用者の剣を振るうスピードを上げる魔法だ。それに加えて、信也は『モーメント』の術式の改良に成功している。当初は『剣を振るうスピードを上昇させる』だったのだが、現在は剣を振るうスピードだけでは無く、『使用者のスピードをのものを上昇させる』事に成功している。

しかし、どれだけスピードを上げようと、そのスピードに『眼』がついていかなければ意味が無い。

なぜなら眼で捉え切れていない場合は、的確に狙った場所に切り込める事が出来るかどうか解らないからだ。

MTというのはあくまでも『才能』であつて、元々持っている資質だ。

しかし、那覇家の人間は代々『モーション・アイ 静止眼』を持っている。それこそが那覇家の伝統魔法が高速魔法である由縁だ。

そして、信也が再び距離を詰めようとする。

漣もそれを見逃さない。

システム
今度もまた、『SYSTEM - Delta』の術式を変化させる。

変化させたのは、『SYSTEM-Gamma』。――盾だ。

（盾だっ！？）

盾を出した、という事は防御にまわる、という事であり、『相手の攻撃を受ける』という体勢だ。

（罨か？）

あえてこのタイミングで盾に変化させた、という事は、何かあるのだろう。

ワザワザあえて、敵の罨に飛び込む事はない。

『モーメント』の能力で加速し、そして一瞬にして漣の背後をとる。

漣の構える、緑色のひし形の、右手の甲に装着されている盾はもはや防御が出来ないでいた。

意味の無き盾。

迫り来る剣。

状況的には信也の圧倒的優位が明らかだった。

（この状況でどうする？ 天野漣ッ！！）

『モーメント』が容赦無く振るわれる。

しかし。

「お前の動きは、映像化^{わかっている}んだよ」

漣は信也の行動を、自身の持つ第二のMT、『映像化^{イメージ}』で予測済みだった。

ぐるんつ、と、体を少し後ろにバックステップで下がる同時に、裏拳の要領で『SYSTEM - Gamma』を『モメント』につける。

「ッ!？」

思わぬ反撃に動揺を隠せないでいる信也。

相手が考え付かないように攻める。

『盾ならば防御は行っても、攻撃は出来ないだろう』。そう考えたからこそ、反撃という選択肢には一切気がつかなかった信也。

そこに、隙が生まれる。

そして漣は、そこを突いた。

『SYSTEM - Gamma』で信也を押し切り、そして押し切った所で『SYSTEM - Gamma』を『SYSTEM - Beta』に変形させる。

そして、弾丸を放つ。

信也は、押し切られた程度では問題は無い。弾丸ならば簡単に斬る事が出来るだろう。

しかし、この時点で、信也は体制を崩していたために、体勢を立て直していた。

つまり、『現在はまだ体勢を立て直しているので、剣を振るう事が出来ない』。

体勢が崩れれば体勢を立て直すのは、もはや鍛錬された結果だ。自然と、体がそう行動してしまうのだろう。

——それが、致命的となった。

「——ッ!——」

剣の振るえない信也に、弾丸が直撃した。

ブザーが鳴り響いた。

楓とハルが、互いを見つめている。

先に口を開いたのは、楓だった。

「貴方、あの時の那覇さんへの言葉を取り消す気は、無いのね？」

「だ・か・ら！ 私はあんなのには興味ないの！」

イライラとしながら否定をするハル。そして楓は確認した、というようにポータブルから魔法を再現した。

「那覇さんへの侮辱行為を行った為、貴方へ制裁を加えますっ . . .
. . .!」

「やれるもんならやってみなさい！」

楓が展開したのは、二枚の『ディスク』。それは楓の頭の少し上の所に浮いたまま、回転している。

「ローテーション・ディスク
廻る円盤」

呟くと同時に、『ローテーション・ディスク
廻る円盤』が放たれる。それは真っ直ぐにハルへと放たれていく。

しかし。

ハルから放たれた一つの何かが、一瞬にして二つの『ローテーション・ディスク
廻る円盤』を撃ち落とした。

「ッ！？ 貴方、回復魔法が得意だったんじゃあ……………」

回復魔法が得意なならば、攻撃には適していないハズだ。
楓はそう予測して躊躇無く、なんの疑いもなく攻撃を仕掛けたのだ。

しかし、実際にはその予想は外れていて、そしてハルの手には、
一つの弓があった。

「アンタねえ。何か勘違いしてない？」

「……………っ!？」

「確かに『回復魔法は得意』だけど、誰も『攻撃系の魔法を使えない』なんて言っていないわよ？」

『サクサリ』
桜弓』。

それが、ハルの再現事つかうの出来る、『攻撃系魔法』。

「それに、『回復魔法』だけじゃ、あのバカバカについていけないしね」

ハルは再び『桜弓』を構える。

この矢も魔力コーティングを施しているので相手に致命傷は与えない。

ギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリ
ギリギリギリギリギリッ！ と、弓の弦が引かれる。

「何かしないと、このままやられちゃうわよ？」

「ッ!! 生意気なッ!!」

そして再び、『廻る円盤』を再現する楓。今度は、四枚同時に再現している。

「さっきが私の全力だと思ったの!? 残念ながら、私の『廻る円盤』は最大四枚まで再現可能。そしてこれは高層ビルでも一撃で粉碎する事の出来る物なのよ!」

楓の言葉は嘘では無い。

実際、『廻る円盤』は一撃で高層ビルを粉碎出来る威力がある。しかし。

ハルはふうつ、とため息をつく。

「御託はいいからかかってきなさい」

「.....! そういう所が、生意気っていうのよッ!」

『廻る円盤』が四枚同時に放たれる。

そして、ハルは『桜弓』から矢を放つ。

（一撃だけ.....? それなら一つは破壊されても、残りで攻めきる事が出来る.....!）

『桜弓』から放たれた矢が、『廻る円盤』の内の一枚に直撃する。直後。

ゴバツ!! と、爆発が巻き起こった後、同時に側にあった残りの『廻る円盤』が爆散した。

「なっ!?!まさか、その弓っ!」

元々、気にはなっていた。

初撃。

ハルはたった一撃で二枚の『ローテーション・ディスク 廻る円盤』を破壊した。
なぜか。

しかし、その理由も楓は今、解った。

『一撃で複数の物体を攻撃出来る攻撃』。それこそが、『桜弓』の能力。

まずは矢を放つ。そして放たれた矢は自発的に爆発を起す。そしてその爆発から一つ一つは小さな魔力の刃が、他の物体を攻撃する。
四枚の『ローテーション・ディスク 廻る円盤』も、そうして破壊したのだ。

矢から生み出された舞い散る爆発の刃が複数の敵を切り刻む。

ゆえに、『桜弓』。

「そんな……貴方はまだ私と同じ新生のハズなのに……
……！ それなのに、どうしてそんなに高度な術式を……
……！？」

「いったでしょ。これぐらい出来なきゃ、あのバカについていけない、って」

『桜弓』から、矢が放たれた。

そしてそれは的確に、楓を捉えた。

第十八話 (E/e) psilon

「・・・・・・・・・・？」

漣は違和感を感じ取った。

信也に放ったハズの弾丸。その弾丸は、直撃した、ハズだ。

「つ・・・・・・・・・・！」

しかし、信也はというと大したダメージを受けた様子が無かった。

「ふん。どうやら、助けられたようだ」

「助けられた？」

「・・・・・・・・・・同僚、にな」

「・・・・・・・・・・」

漣が視線を移す先。そこに居たのは、静かに霧彦と対峙する少年が居た。

五十嵐驚斗。

名前だけしか知らないその少年だが、その少年に、漣の一撃が妨害されたのだ。

その妨害、というのは簡単だった。

漣が『SYSTEM - Beta』^{システム}による弾丸を放った瞬間、驚斗も弾丸を放った。驚斗が放った弾丸が、信也に直撃した瞬間に、『SYSTEM - Beta』^{システム}の弾丸を砕いたのだ。

しかし、直撃時の衝撃を完全に殺す事が出来なかったため、ダメ

ージは免れなかった。しかし、それはなんの妨害も無しに直撃した時の事を考えると、まだマシだと言える。

「しかしどうやら……………」

チラッ、と信也は楓の方を見る。そこには、ハルの『桜弓』のダメージによって倒れている楓が居た。

「楓の方は『桜弓』の『爆発による刃』によってうかつに破壊する事も出来なかったのだろう。援護が間に合わなかったようだかな」

そして信也は、『モーメント』を再び構える。同僚がくれたチャンスで、信也は無駄にする気など一切無かった。

「ハル、邪魔するんじゃないぞ」

『桜弓』を構えていたハルに向かって、一応釘をさしておく漣。

「いくぞ、天野漣！」

「来やがれ！」

二人の少年が再び、激突する。

「もう援護は良いのか？」

「……………ああ。そろそろ傍観するのも飽きたしな」

鷲斗の手にあるのは、スナイパーライフル。

そもそもスナイパーライフルという物は遠距離からの狙撃を行う為の物だ。よって、目標ターゲットとの一対一の時にスナイパーライフルという武器は不利と言える。

——『通常の場合』ならば。

しかしこれはあくまでも再現された魔法。

術式の構成しだいで不利な状況もカバーできる場合もあるのだ。

ブザーが鳴ってから、鷲斗はただひたすら戦いの様子を見ていた。対する霧彦はというと、同じくただひたすら、戦いの様子を眺めていた。

そして突如、鷲斗はスナイパーライフルの魔法を再現し、援護射撃を行った。

「結構面倒見がいいんだな。兄弟でも居るのか？」

「お前には関係ない」

ガシャツ、とスナイパーライフルを片手で構える鷲斗。その構えはまさに洗練された物であり、なんの迷いも無い。

「そつちも魔法ぶきを出したらどうだ？」

「……ああ。そうさせてもらっ

霧彦は、自身のポータブルからオリジナルの魔法、『SYSTE
M - Epsilon』エプシロンを展開する。

「ハンドガンか……行くぞっ！」

驚斗が言葉を発した直後。

スナイパーライフルから弾丸が放たれた。そしてそれは的確に、狂い無く、霧彦に向かって放たれていた。

そして霧彦もハンドガンの引き金を引く。

放たれた弾丸は、驚斗の放った弾丸とぶつかり合い、そして砕けた。

そして、同時に二人は左右に動いた。

威力は互角だった。

ならば、ここからどう立ち回るのが勝負の分かれ目となるだろう。

（弾丸の速さは驚斗おどの方が速いな．．．．油断したらずぐに撃ち込まれる）

的確にステップを踏みながら、動き続ける霧彦。同時にハンドガンから弾丸を放ってゆく。驚斗も、霧彦が弾丸を放つと同時に弾丸を放ち、的確に弾丸を相殺していく。

狙撃は、通常ならば位置を固定して行う物だ。動けば動くほど、その命中率、難易度共に上がってゆく。

しかし、驚斗はそれを的確に、そつなくこなしている。

（成程な。射撃に関してはかなりの腕だ）

霧彦はステップのリズムを変更した。

左右に移動するステップから、前進のステップを取る。

「ッ!？」

「そろそろ、．．．．攻めるか!」

スナイパーライフルから再び、弾丸が放たれた。それをハンドガンで相殺しつつ、鷲斗へと接近していく。

「あんまり接近戦は得意じゃあ無い、がつ！」

霧彦は自分のリーチが届く所まで接近を行ったと同時に、右回転の蹴りを放つ。しかし、それをギリギリの所で鷲斗はかわす。

スナイパーライフルは銃口が長い分、長距離の射撃に適している。魔法による物ならなおさらだ。しかし、銃口が長い、という事は、懐に潜り込まれたときの対応の不備を表す。

よって、霧彦の判断は間違っではないといえる。

「もう一撃ッ！！」

再び、回転の反動で右足の回転蹴りを放つ。しかし、今度はそれを、スナイパーライフルの銃口でガードされた。

しかし、これで隙が出来た。

「もらいつ！」

ガガガッ！！ と、霧彦の『SYSTEM - Epsilon』から銃弾が放たれる。そして、弾丸は確かに鷲斗を捉えた。

直後。

ビギッ！！ バキッ！！ とガラスが割れるような音が響き、鷲斗が数メートル宙に浮きながら後ろに吹き飛ぶ。

（防御用の魔法を再現していたのか？）

そのせいか、鷲斗に対するダメージは少ない。霧彦は追撃として

また、弾丸を放つ。

迫り来る追撃の弾丸。しかし、今度は空中でスナイパーライフルから銃弾を放った。そして、次々と弾丸を相殺する。

（！ 空中での不安定な状態で射撃を．．．．．）

そして、鷲斗は地面に着地すると同時に、ガシャツ、と、『銃口を外した』。

「なっ！？」

銃口が外れ、鷲斗の両手には二丁のハンドガンが現れた。同時に、二丁のハンドガンで弾丸を放つ。すさまじく連射される弾丸の雨。

「ッ！！」

なんとか霧彦も迎撃しようとするが、一丁対二丁では手数が違う。相手の魔法のギミックに驚いたという事もあったのだろう。

弾丸の雨による、ダメージは避けられなかった。

まるで獣の牙が食い込んでいるかのように、体にダメージが広がってゆく。

「ぐッ．．．．．！ がッ．．．．．！」

ハンドガンでの迎撃を止め、腕をクロスしてなんとか銃弾の雨をやりすごす。『集中』のMTを使えば、銃弾の一撃や二撃を避けたリ、相殺したりする事が出来るだろう。しかし、銃弾の雨ともなると、『集中』のMTを使おうとも、全てを避ける事は難しい。

「ッ．．．．．！　その魔法．．．．．」

「『デュアル・ガン』。二銃』。コイツはスナイパーライフルとハンドガン、二つの武器となる魔法だ．．．．．手の内をさらすようだから、出来れば使いたくなかったがな」

ガシヤッ、と二丁の銃の銃口を霧彦へと向ける。

もう一度まともに銃弾の雨を受ければ、霧彦のダメージはそれこそ膨大な物となる。

状況的には圧倒的に驚斗の方が有利だ。

「．．．．．チッ」

しかし、霧彦は自分の敗北など、一切イメージしていない。

むしろ。

勝利のイメージを抱いている。

「ったく。仕方が無^ねえ。こっちもあまりコイツは使いたくなかったんだが．．．．．」

ポウッ、と、霧彦の左手に、光の粒子が集まる。

そしてその光は、次々とある巨大な『何か』を構築してゆく。

「っ！？　まさか．．．．．」

「その『まさか』、だ」

霧彦の左手に構成させたのは、巨大な『キャノン砲』。

長さが約二メートルもある巨大なロングバレル。肩で担がなければいけないほどの大きさだった。

「バカな．．．．．『オリジナル』の魔法は一つしか扱えないハズだ！」

「ああ。確かに、普通ならそうだ。けどな、この『SYSTEM - エプシロン Epsilon』は、『弾丸換装』の他にも『術式反転』の能力を持っている。術式の表面が、『SYSTEM - Epsilon』。そして裏面が、この『SYSTEM - epsilon』、っていう風にな」

『SYSTEM - Epsilon』は様々なタイプの弾丸に換装する事の出来る銃。

それに対し、術式を反転させた『SYSTEM - epsilon』は巨大なエネルギーを秘めた、キャノン砲。

一つの術式で、二つの魔法を発動させる事の出来る魔法。

それこそが、『(E/e)psilon』の能力。

「ッ！」

素早く反応したのは驚斗。すぐさま二丁のハンドガンから大量の弾丸を放つ。

『SYSTEM - epsilon』は恐らく、巨大な攻撃力を秘めたキャノン砲。しかし、膨大な攻撃力を秘める、という事は、その攻撃を放つにはしばらく時間がかかるハズだ。

よって、導き出される答えは速攻。
しかし。

「おっと」

霧彦は『SYSTEM - Epsilon』システム エプシロンから弾丸を放つ。その弾丸は拡散し、鷲斗の放った弾丸の雨と激突する。

「なっ!？」

「『散弾』だ」

弾丸の換装。

それこそが、『SYSTEM - Epsilon』システム エプシロンの能力。弾丸は互いに相殺しつくした。

そして。

「テン十カウント」

『SYSTEM - Epsilon』システム エプシロンが発動してから、十秒が経過した。

これは、『SYSTEM - Epsilon』システム エプシロンのエネルギーのチャージ時間だ。

「行くぜ」

霧彦の左肩に構えられている巨大なキャノン砲、『SYSTEM - Epsilon』システム エプシロンから、魔力の塊が放出された。

「——ッ!——」

鷲斗を、エネルギーの塊が直撃した。
防御魔法を打ち砕いて。

「存外、良い戦いをするじゃねえか」

アリーナの天井はドーム式となっているが、現在は解放されており、アリーナからは上を見上げると、青空が広がっている。

そして、開け放たれたアリーナの天井から、漣達の戦いを見下ろす少年が居た。

シュロットヘンドラー
破壊者。

「ははっ。なんだ。模擬戦まで別に待たなくてもよかったじゃねえか」

ニヤリ、とシュロットヘンドラーは表情をゆがめる。
楽しんでいるのだ。
漣達の戦いを。

「『オリジナル』の魔法。俺と同じその力、見せてもらおうじゃねえか」

平和だったハズの学園に、全てを壊す破壊者が降臨する。

第十九話 破壊者

「バカか．．．．．あいつ等」

ポツリと、アリーナに完備されているモニタールームに待機していた西人が、呟いた。

「何が『手を出すなよ』、だ！　むしろ『手を出すため』のチーム戦だろうが！　あいつ等、もしかして擬似タイマンか何かと勘違いしているんじゃないのか！？」

「まあ、確かにそう思う所はあるけどさ、実際面白い状況にはなってるよ？」

「むっ．．．．．」

確かに、『面白い状況』と言われるとそうなので、西人は黙る。

那覇家は高速魔法の名家。

名家、という事はそれなりに名のしれた、格式のある魔法の家系なのだ。

そんな家系の少年と渡り合っている、というだけでも、それはかなりのレベルである事を示している。

「それにしても、どうして『術式破壊』を使わないんだろうね？　それさえ使えば、あの『モーメント』だって一撃で破壊出来るのに」

「ま、うかつに使うと相手の魔法の術式じゃなくて、自分の魔法に施している『魔力コーティング』の術式が破壊されちゃって、

相手に致命傷を与える事になるからな。多分、明日行われる模擬戦でも『術式破壊』は使わないだろうぜ」

一口に『模擬戦』、と言っても、そこはやはり学生同士の実習のような物だ。相手に多少の怪我だけならともかく、致命傷を与えてしまうのはあまり好ましい事態とは言えない。よって、生徒の生命の保証を行う為に模擬戦では『魔力コーティング』という術式を用い、魔法攻撃のプロテクターのような物を施さなければならない。

「でもま、多分漣達が勝つだろうな。状況的には。それに、魔法の応用力、戦闘技術も漣達の方が．．．．．ん？」

「どうしたの？」

「いや．．．．．なんか．．．．．アリーナの天井の所に、誰か居るような．．．．．」

西人はパネルモニターを操作して、アリーナの天井部をズームする。そこには確かに、人影のような物が映っていた。

「誰だ？ あんな所に．．．．．」

西人は、その人影から何か大きな物が現れるのが見えた。恐らくは魔法だろう。そしてその直後。

アリーナの地面が、一刀両断された。

同時に、大規模な爆発が起こり、モニターが不鮮明なノイズの嵐を巻き起こした。

「なん．．．．．だ？」

漣と信也が戦闘を行っている最中。

突如、アリーナの中央部から巨大な爆発が起こった。丁度その位置に居た漣と信也は、分断されるように爆発に煽られて、アリーナの中央部から吹き飛んだ。

（信也^{アイツ}の魔法じゃ、無い．．．．．とすると、誰か別の？）

丁度、別の場所で霧彦が『SYSTEM - epsilon^{システム}』の『十カウントキャノン』^{イプシロン}を放っている直後起こった爆発だったが、『SYSTEM - epsilon^{システム}』の銃口はアリーナの中央部には向いていない。そもそも、漣の知っている『SYSTEM - epsilon^{システム}』の『十カウントキャノン』はこんなに綺麗に地面を一刀両断出来ない。

この一撃はまるで、『刀でアリーナの地面を切り裂いたような一撃』だった。

「ちょっと！ 漣！ 大丈夫！？」

ハルの声が聞こえた。

声から察するに、あちらの方は全員無事みたいだ。アリーナの中央部を切り裂いた一撃でアリーナの設備事破壊され、瓦礫や地面にむき出しとなった岩や残骸で、完全に漣はあちらのメンバーとは分断されてしまった。

こちらに残っているのは、漣だけだった。

「ああ！ そっちはとにかく早くアリーナから出てくれ！ 西人達

の事も気になる！」

「わ、解った！ アンタも早く……………」

その先のハルの言葉は、漣は聞く事が無かった。
全く別の、第三者の声が、漣の耳を支配したからだ。

「分断成功、つてトコだな。なあ？ 探偵野郎」

「……………」

自分に向けられている凍てつくような視線と、声。
漣はゆつくりと、その声の主へと顔を向ける。

目に飛び込んできたのは、自分と同じぐらいの年齢だと思われる
少年。

真っ黒な髪に、紫色に光る瞳。そして、手には大剣。恐らくこれ
が、アリーナを一刀両断した魔法^{ぶき}なのだろう。

その大剣は、所々キラキラと紫色に輝いている。

「お前は……………」

「シロツトヘンドラー^{MAKES} 『創り出す者達』の一員つつたら、解りやすいか？」

「なっ……………」

MAKES
創り出す者達。

先日、小野田清一を襲撃したのも、創り出す者達の者だった。た
だ、手がかりが完全に抹消されていたので、漣は一応は搜索を断念
したのだが。

「ついでに言えば、小野田清一を襲撃したのも、．．．俺だ」
ニヤリ、と、シュロットヘンドラーの顔が、歪んだ
それは、笑みだった。壊す事に対しての。

「．．．お前、どうして小野田清一を襲撃したりなんかした？」

漣は、うつむきながらシュロットヘンドラーに対して問う。
自分がたどり着けなかった真実。それを、つかむために。静かに、
怒りを抑えながら。

「ああ。何でも、アイツは創り出す者達を抜けようとしてたらしい
からな？ だから裏切り者に制裁を与えなきゃいけないらしいんだ
よ。だから、壊した」

「それだけか？ 他に、何の感情も無かったのか？ 助けようとは思
わなかったのか？」

漣の言葉で、何かを思い出したようにシュロットヘンドラーは首
を傾ける。

「そう言えば、あいつも『助けて』だのなんだの言ってたな」
歪む。

シュロットヘンドラーの歪んだ笑顔が、さらに歪んでゆく。
あの時の、清一を襲撃した時の事を思い出して。自分を倒そうと
する警備員。自分に慈悲を求めてくる清一。それら全てを壊した時
の事を思い出し、喜びの歪んだ笑顔を見せた。

ガガッ！ ガガガガッ！！ と、『SYSTEM - Beta^{システム ベータ}』から弾丸が敵を撃ちぬくために連射される。

しかし、シュロットヘンドラーは大剣をいとも簡単に振るう。弾丸一発一発に丁寧に併せて大剣で斬ってゆく。完全に、見切られている。

「ハッ！！ なるほど、『術式変化』か！ おもしれえッ！！」

漣は追撃の手を緩めない。弾丸を放ちながら、そのまま前進する。対して、シュロットヘンドラーは放たれる弾丸を切り裂きながら、前進する。

両者の激突はすぐだった。

既に『術式変化^{アルファ}』により『SYSTEM - Beta^{システム ベータ}』を『SYSTEM - Alpha^{システム アルファ}』に変化させた漣はシュロットヘンドラーの大剣と、刃を激突させていた。

「がああああああああああああああああああああああああああああああッ！！」

体を回転させ、刃を弾く。

同時に、回転の反動を利用してそのまま回転斬りをシュロットヘンドラーへと向ける。

しかし。

漣の放った刃は、空を斬った。

「……………なッ！？」

刹那。

真後ろ。シュロットヘンドラーが現れていた。

「怒りは冷めたか？」

そして現れると同時に、大剣を振るう。

(ッ！！ 速いッ！！)

『術式変化』が間に合い、なんとか『SYSTEM - Alpha』
から『SYSTEM - Gamma』へと変化させ、刃を防ぐ。しかし完全に衝撃をガードしきれず、五メートルもの距離を、宙に浮きながら後ろに吹き飛んだ。

「……………くッ！」

なんとか空中で体勢を立て直す。

「良い反応だ。『反応速度』のMTでも持っているのか？」

「……………っ」

実際、そうだった。

しかし、一番不自然なのは、全く『映像化』のMTが発動しなかった事だ。

そしてもう一つ不自然なのは。

「お前……………その光は……………まさか……………」

シュロットヘンドラーから放出されている、謎の紫色の光。

それがさっきのシュロットヘンドラーの速さに関わっている事は、明らかだった。

「フォトン、か？」

「ご名答。お前なら、俺がさっきどうやって移動したのか、解るよな？」

「．．．．．！ まさか、量子テレポーション．．．．．！？」

シュロットヘンドラーの顔が、笑顔で歪む。
それはつまり、『Yes』という回答を示していた。

「ま、俺は『クオラムムーブメント量子移動』、と呼んでいるがな」

量子テレポーション。

離れた場所同士の状態の絡み合いの事を示す『量子もつれ』と、古典的な情報伝達手段の効果を利用する事によって、離れた場所に状態を転送する事だ。

シュロットヘンドラーの能力により、まずは自分自身を量子で纏う。その後は決められたポイントへと自分自身を転送させる。

しかし、一口に転送と言っても、転送する物質が消える、というワケでは無い。これはあくまでも、量子の道を通って行う移動なのだ。そしてその量子の道は最早別次元の物。

よって、シュロットヘンドラーはさっき漣の背後に回りこんだ際には、漣には瞬間移動したように見えたのだが、実際には量子の道を通り、ただ漣の背後に移動しただけだ。言うなれば『肉眼では見えないトンネル走って回り込んだ』ものだ。『ただ、見えなかっただけだ』。

しかし。

（くそツ．．．．．！ 『見えない』 から、映像化のMTが發動しないのかッ！？）

原理が解ったとしても、実際には状況が変わるといえば、変わらない。

見えなければ、『映像化』^{イメージ}で先読みをする事も不可能だ。

「はっ。まさかそんな魔法を再現する事が出来るなんてな．．．．．」

「はあ？ 何言ってるんだ？ コイツは『再現された魔法じゃねえ』」

「ッ！？」

ブンッ、と大剣で空気を切り裂く。

同時に、周囲に巻き起こっていた土ぼこりが一掃された。

「『量子移動』^{クオラムムーブメント}はあくまでも、俺のMT、『量子操作』^{クオラムオペレーション}の一部にすぎねえ．．．．．それに俺の魔法は再現された物じゃねえ。コイツは『オリジナル』の魔法だ」

「なっ．．．．．！」

これだけの能力以外にも、まだ他に魔法がある。

そして、この力が、たった一人のMT^{さいのう}だったのだ。

漣は伊波の一言を思い出す。

今、目の前に居る破壊者の異名^{シュロツトヘンドラー}。

『天才』。

「『SYSTEM - Omega^{オメガ}』。コイツが俺の『オリジナル』の魔法だ」

ゴウッ！ と、シュロットヘンドラーの周囲から、紫色の量子が巻き起こる。

「ついでに、コイツの能力を教えてやるよ」

直後。

シュロットヘンドラーは『量子移動^{クオントムムーブメント}』を発動。
漣の、目の前に移動した。

「——ッ！」

漣は『反応速度』のMTでなんとか『SYSTEM - Alpha^{アルファ}』を『SYSTEM - Gamma^{ガンマ}』へと『術式変化』させる。

しかし。

「そんな魔法^{もん}、役に立ちはしねえ」

シュロットヘンドラーが大剣を振るっ。

そしてその刃はいとも簡単に、『SYSTEM - Gamma^{ガンマ}』と、漣の左肩を貫いた。

「ぐッ！ があああああああああああッ——！」

ガクッ、と地面に膝をつく漣。

左肩からは、赤い血が流れ落ちていた。

そしてシュロットヘンドラーはその凍てつくような瞳を、漣へと向けていた。

「『システムSYSTEM - オメガOmega』の能力は『現象破壊』。あらゆる現象を破壊する。勿論。魔法という現象もな」

全てを破壊する破壊者、シュロットヘンドラー。

『天才』のMTと、破壊の魔法が、漣に牙をむく。

第二十話 奇妙な静けさ

「現象．．．．．破壊．．．．．！？」

漣の目には自分の手の中にある、『システム - Omega』
によって砕かれてしまった『システム - Gamma』。恐らく
この盾は現在の状況では使えない。

「休んでていいのか？」

「ッ！！」

地に伏す漣に向かって、シュロットヘンドラーが『システム
- Omega』を横なぎに振るう。ズドッ！！と大剣の振るった
後の地面が裂けた。

（くそっ！ 他のバージョンは使えるか！？）

漣は砕けてしまった『システム - Gamma』を『術式変化』
させる。『術式変化』はなんとか成功し、『システム - Beta』
へと姿を変えた。

そして体勢を立て直すと同時に、弾丸を放つ。

ズガガガアアアアアアアアッ！！ という轟音と共に、
『システム - Beta』から複数の弾丸が放たれた。

しかし、シュロットヘンドラーは大剣を再び横なぎに振るう。

それだけで、弾丸はビギッ！！ という音と共にいとも簡単に、
砕け散った。

『システム - Omega』による『現象破壊』が発動し、魔
法攻撃が破壊されたのだ。

「ッ!？」

「なんだあ!？ その生温い攻撃はよおおおおおおおおお
おおおおおつつつ!！」

ゴバツツ!! とシュロットヘンドラーが『システム - O
mega』を地面に叩きつける。そして大量の光り輝く量子が漣に
向かって牙をむく。

この量子はシュロットヘンドラーの魔力により、高い攻撃性を持
った物となっている。

小野田清一を襲撃する際に使った攻撃も、この量子による物だ。

「ぐッ! がっあああああああああああああああああああ
あああああああッ!！」

攻撃を避ける事は出来なかった。

大量の量子による衝撃波を受ける漣。なんとか両手でガードを試
みてはいるが、無防備な腹部には容赦なく攻撃が襲う。

体が宙に浮き、地面をバウンドする。地面に体が叩きつけられる
度に痛みが走る。

「.....ッ!」

アリーナの地面は本来ならば人工芝が敷かれているのだが、今は
シュロットヘンドラーが放った数々の攻撃によって荒れている。

体勢を立て直そうとする漣に対して、シュロットヘンドラーは漣
の目の前に『量子移動』によって自身を転送する。

転送と言っても、厳密には移動しかし、その移動速度は最早高速

移動というよりもやはり転送に近い。

よって。

漣に『体勢を立て直す』時間等、与えられるワケが無いのだ。

量子を体に纏い、移動したシュロットヘンドラーは高らかに大剣、

『SYSTEM-Omega』システム オメガを振り上げ、そして、地面に落とす。

直後発生する魔力による爆発。

漣はなんの防御もとる事も出来ずにその衝撃に煽られる。

「があっ……………」

再び、無様に地面をバウンドする漣。

しかし、『SYSTEM-Beta』システム ベータだけは手放さなかった。

（くそっ……………！ どうなってるやがる……………あんな距離で、あんな爆発を起せば自分だってタダじゃすまないハズだぞ……………！？）

爆発がボウツ、となぎ払われる。

そしてその中から、シュロットヘンドラーの姿が現れる。

ゆっくりと、一歩ずつ漣の元へと歩を進める。

「不思議に思ってるんだろーなあ？ なぜアイツだけが爆発に巻き込まれないのか？ ってなあ。答えは簡単だ。言ったよな？ このSYSTEM-Omega』システム オメガの能力は『現象破壊』。つまり、自分に襲い掛かってくる爆発という現象すらも破壊する、って事だ」

「……………ッ！！」

もしも、『量子操作』クォンタムオペレーションというMTだけの場合ならば、シュロットヘンドラー自身も爆発に巻き込まれてしまっていただろう。しかし、

シュロツトヘンドラーの持つ『オリジナル』の魔法、『SYSTEM-M-Omega』には『現象破壊』という能力が備わっている。これにより、自らに襲い掛かる爆発という現象も破壊しているのだ。

しかも、漣に対する爆発の攻撃的エネルギーを破壊しない程度に。

（くそっ！ 何か手は無いのか．．．．．！ 何かっ．．．．．！）

考える時間すら、無かった。

シュロツトヘンドラーは再び『クオントラムムーブメント』で自身を転送する。転送先は、漣のより五メートル真上の位置。

そこから、シュロツトヘンドラーは『SYSTEM-Omega』を振るい、量子の衝撃波を放つ。

「オラオラオラア！！ もっと楽しませろっ！！」

「ぐっッ！！」

漣は『反応速度』のMTによりなんとか回避に成功する。そして回避した直後、弾丸を放つ。

しかし、その弾丸は空しくも『SYSTEM-Omega』の『現象破壊』で打ち消されてしまう。

だからと言って、何も策が無いワケでは無い。漣には、狙っている瞬間があった。それは、シュロツトヘンドラーが地面へと降りる瞬間。

つまり着地。

着地の瞬間は一瞬だけだが、無防備となる。そこを狙う。

漣はその瞬間を狙うため、空中のシュロツトヘンドラーに向けて『SYSTEM-Beta』を構える。が、着地の瞬間は訪れな

った。

なぜなら。

シュロットヘンドラーは漣の目の前へと現れたからだ。

「余所見たあ随分余裕じゃねえか」

「なっ!？」

一閃。

それはまるで獣が獲物に対して牙で噛み砕くように。『SYST
テム オメガ』が、容赦なく『SYSTEM - Beta』を砕
いた。

『クォンタムムーブメント 量子移動』は『量子もつれ』という現象を利用して発動する物
だ。よって、足場だろうが空中だろうが関係ない。

地面から空中へ。

空中から地面へ。

そこに量子の道があるならば、遮蔽物があるうと自在に様々な位
置へと転送する事が出来る。

よって、『着地の瞬間』など捉えられるハズが無かった。

漣はなんとか反応する事は出来たのだが、とっさにガードした『
SYSTEM - Beta』は『現象破壊』によりアツサリと砕けて
しまった。

手元に残ったのはハンドガンの残骸のみ。

そしてそのままシュロットヘンドラーは大剣の柄で漣の腹部を打
つ。

量子の威力も混ざっているのか、ただ突いただけでは得られない

であろう力で漣は六メートル程吹き飛ばされた。その間に二度程地面をバウンドする。

痛みが広がる。

貫かれた左肩の痛みも広がってきた。

「はっ。なんだなんだあ？　こつとも一方的じゃあ全っ然、楽しくねえぞお？」

「くっ………！！」

漣は既に左肩を貫かれ、そして魔法の三つのバージョンの内二つを既に破壊されている。

対して、シュロットヘンドラーは無傷。

圧倒的な魔法。
チカラ
圧倒的な才能。
チカラ

これが、犯罪グループにおいて『天才』と称されている者の力だった。

（どこか、どこか隙があれば………！！）

隙があれば、反撃の糸口がつかめるのかもしれない。

しかし相手は自在に量子を操り、どのような場所でも転送する事が出来、さらに魔法攻撃、爆発等の現象を破壊してくる。

よって着地の瞬間等狙えるハズも無い。

他の隙を見つけ、そこを狙うしかない。

（見つけるんだ。一見隙の無いと思われるヤツの隙を。思い出せ。今までのヤツの戦いの中にきつとヒントが隠されているハズだ……

．．．！）

シュロットヘンドラーは自在に位置を転送し、既に大剣を構えた状態で現れていた。

そしてこれまではなんとか『反応速度』のMTで対処してきたが、次からはどうなるか解らない。

———そこで。

（．．．．．までよ？）

一筋の光を、漣は見つけた。

漣は、^{システム}『SYSTEM - Beta』を^{アルファ}『術式変化』させ、^{システム}『SYSTEM - Alpha』に変化させる。そして紅い刀を握り締め、その切っ先をシュロットヘンドラーへと向ける。

「見つけたぜ。シュロットヘンドラー。テメエの隙を」

「ハア？」

シュロットヘンドラーに、焦りの表情等一切無い。

^{クオントムムーブメント}『量子移動』の能力は、厳密に言えば『自身を^{フォトン}量子で覆い、^{いどう}転送』させる』能力。

量子を纏った状態で『量子もつれ』による道を通って移動する。それはもはや移動であり、転送でもある。

自分自身が量子になっているワケではないが、量子を纏っている状態。

肉眼では確認が不可能であり、そして速い。

そんな能力に隙などあるはずが無いと、シュロットヘンドラーはそう思っていた。

「寝言は寝て言え」

「寝言かどうか、確かめてみるよ」

漣の目には一切迷いなど無かった。

そしてその目が、シュロットヘンドラーを苛立たせる。

「だったら．．．．．死ねッ!!」

シュロットヘンドラーは『クォンタムムーブメント量子移動』を発動。

量子を体に纏い、『量子もつれ』によって構成された道を通り、そして漣の背後に回りこむ。

そして、シュロットヘンドラーの腹部に激痛が走った。

「!?!」

視界から漣が遠ざかっていく。いや、自分が遠ざかっているのだと気づいたのは、すぐだった。

正確には、『システムSYSTEM - アルファAlpha』の峰が、シュロットヘンドラーを捉えた瞬間、シュロットヘンドラーが吹き飛んだのだ。

「な．．．．．に．．．．．!?!」

シュロットヘンドラーが地に膝をついた。

「一体．．．．．どういう．．．．．!?!」

「どうした？　かかってこないのか？」

「デメエツ！！」

ゴッ！！　と、シュロットヘンドラーは量子による衝撃波を漣に向けて放つ。しかしそれを漣は、『SYSTEM - Alpha』で受け止め、そしていなした。

本来ならば『現象破壊』の能力によって破壊されるハズの魔法という現象が、破壊されなかった。

「ッ！？」

「こつちも教えてやるよ。この『SYSTEM - Delta』の能力は、『術式破壊』だ」

『現象破壊』の衝撃波と、『術式破壊』の刀。

本来ならばどちらも魔法を破壊するはずの能力なのだが、この場合は恐らく両者の『破壊する』という能力がぶつかり合い、能力エネルギーを相殺したのだろう。

しかし『SYSTEM - Delta』の場合は発動タイミングがずれていれば今頃『SYSTEM - Alpha』が粉々に砕かれていただろう。

「クッソがあああああああああああああああああああああああああああああああああつ！！」

シュロットヘンドラーは『量子移動』を発動。

量子を纏い、道を通り、漣の真上へと転送する。

しかし、その瞬間を待ち構えていたかのようにカウンターの『SYSTEM - Alpha』が、シュロットヘンドラーの一撃よりも

早くに入る。

「じつ．．．．．！　がああっ！！」

「お前だけは．．．．．絶対に許さねえッ！！」

二撃目。

空中で無防備に停滞するシュロットヘンドラーに対して、『^{システム}STE M - A l p h a^{アルファ}』の刃が振るわれる。

しかし。

シュロットヘンドラーは^{フォトン}量子と共にその姿を消す。

『^{クォンタムムーブメント}量子移動』で転送されたのだろう。気がつくまで漣から五メートルの距離にシュロットヘンドラーは居た。

「デメエ．．．．．まさか、『^{クォンタムムーブメント}量子移動』の転送直後の瞬間を狙ってやがるのか？」

「．．．．．」

漣は答えない、が、シュロットヘンドラーにはそれが答えなのだという確信があった。

転送直後の瞬間。

それはつまり、転送をし終えた瞬間なのだ。

『^{クォンタムムーブメント}量子移動』は確かに移動中は肉眼では捉えきる事の出来ない能力。それは量子の道があるならば、たとえ遮蔽物があろうとも『量子の道』という現実の次元とは別の道を通って転送される。

よって、移動中を狙おうとしても通常の攻撃では当たりはしない。しかし、転送をし終えた一瞬。

そこだけは、完全に無防備となる。

今まではあらかじめ大剣を構えるなどしてその隙を生まないようにしていたのだが、『反応速度』のMTにより、反応されてしまった。

その一瞬を正確無比に、完全に捉えるそのバトルセンス。

『天才』といわれているシュロットヘンドラーですらも驚くべき事だった。

『現象破壊』という魔法も相殺され。
のつりよく

『量子移動』という完全な移動手段も攻略され。

もはや目の前の天野漣という少年が、自分と同年齢の少年が、シュロットヘンドラーにとっては脅威だった。

しかし。

それだけの事で、戦意を失う『破壊者』では無い。
シュロットヘンドラー

彼は静かに、『SYSTEM - Omega』を構える。
システム オメガ

そして、周囲からゴウツ！！と量子が放出される。

その量子はシュロットヘンドラーを纏っていく。そして、背中に大量の量子が集約された。

『クォンタムアクセラレーション
量子加速』。

先ほどまで発動していた『量子移動』が『攻撃されない絶対的な移動手段』だとすれば、『量子加速』は『圧倒的な加速』。
クォンタムアクセラレーション

その速さは、速さだけならば、『量子移動』すら凌ぐ。
クォンタムムーブメント

ボツ！！と、シュロットヘンドラーは加速する。

背中に集約された量子がシュロットヘンドラーを加速させた。那覇家の者すら凌ぐ程の圧倒的な速さ。しかし、漣にとってはその方が都合だった。

なぜなら。

（――映像化出来る………！ ヤツの、動きがッ！）

映像化。
イメージ

シュロットヘンドラーは今まで『量子移動』で転送し、攻撃をしかけていた。通常の次元とは違う量子の道を通っていた為にその動きが見えず、映像化が發動しなかった。
イメージ

ただ、今は。

ただ、加速しただけならば。

その動きは、映像化。
みえる

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ！！」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああッッッ！！」

ギャリイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイッ！！ と、互いの刃が激突する。

『術式破壊』の力と『現象破壊』の力がせめぎあい、エネルギーの相殺を起してゆく。

力は互角。

しかし、量子によって加速しているシュロットヘンドラーの方がパワーは増えていく。

その時。

――『システム - アルファ』の刀身が、紅く輝いた。

同時に、一気に漣は刃を振りぬく。

ビギッ！！ と、『システムSYSTオメガEM-Omega』の刀身が、切断された。

漣の右肩からはドッ！ と血が飛び散り、シュロットヘンドラーの右肩からも血が飛び散った。

それをキツカケに、漣とシュロットヘンドラーの両者は倒れ去った。

戦闘は、集約した。

後はただ、奇妙な静けさが二人を覆った。

エピソード（前書き）

これで第一章はラストです。

エピローグ

アリーナでの出来事は『事故』として処理された。

生徒会が漣を発見した際には既にシュロットヘンドラーの姿は無く、ただ意識を失った漣だけがアリーナに残されていた。

恐らく空間制御系の魔法によりシュロットヘンドラーは転送されたのだろう。

そして漣が発見されてから一時間後。

「今回はセーフ」

「いや、アウトだろ」

と、西人が呆れながらも。それでいてため息をつきながら、左肩をギプスで固定している漣に向かってアウト宣言を下した。

「どう考えても入院レベルだろ」

「まあ一番重症なのは左肩だったからなあ。他はなんとかなったし。いやー。最新の医療って凄いねえ」

霧彦がニヤニヤと笑いながら、「それにハルもかなり頑張って直してくれたみたいだし？ 体の傷の回復」と言う。

現在は放課後の教室のど真ん中で、漣、霧彦、ハル、西人、陽子、日向で集まっている所だった。

「で、ところで結局。明日の模擬戦はどうするの？」

日向が「まあ大体回答は予想ついているけど」と言った面持ちだ。

「出る」

いつもの漣ならば「ゆつくり休んどくよ」「ぐらいの事は言っていただろう。しかし、今の漣の中には、ある時から、そしてもっと言うならば、シュロットヘンドラーと戦った事で芽生えてしまった事が一つあった。

強くなりたい。

完全に事件を解決出来る様に。
守る物を未然に守れるように。

だから、何かしていたかった。

何かしたい。

していたい。

序盤。

シュロットヘンドラーには全く。足元にも。及ばなかった。

それはただ相手が天才で、強かっただけの話だ。

しかし現実としては、漣自身の弱さもあった。

二つの魔法を破壊されてようやく。相手の隙を見つける事が出来たのだから。

「んー。出るのはいいけど、実際どうするの？ 二つの^{バージョン}Verの魔法は破壊されたままでしょ？」

そんなに簡単に魔法が修復されれば苦労しない。

造られたのが人の手ならば。

直すのも人の手だ。

「そうだな．．．．．まあでも、『システム SYSTEM - Alpha』
だけは使えるし．．．．．」

そこでふと。

あの時の。
シュロットヘンドラー

天才との対決を思い出す。

最後の激突の瞬間を。

紅く輝いた、『システム SYSTEM - Alpha』の刀身を。
アルファ

『アレ』は一体なんだったのだろうか。

今まで、『システム SYSTEM - Delta』を使ってきてあのよう
に刀身が輝くなんて事はなかった。ましてや、威力が増大したなんて

(――いや)

威力の増大、などでは無いのかもしれない。

『アレ』は隠された機能とか、威力が上がったとか、そういう物
では無いのだ。

ただ、返ろうとしただけなのかもしれない。

『システム SYSTEM - Delta』の、元の本来の力に。姿に。
デルタ

(近い内に、師匠に会わなきゃいけないのかもしれないな)

ある一人の女性の姿を思い浮かべる漣。

その女性こそまさしく、『システム SYSTEM - Delta』を、そし
て、『システム SYSTEM - Epsilon』を造った人物だった。
エプシロン

そんなに簡単に魔法が修復されれば苦労しない。

造られたのが人の手ならば。

直すのも人の手だ。

そして人に直せ^{つた}ないのならば、他の人に頼む^たしかない。

チラリと目線があつた霧彦を見てみると、どうやら漣と同じ事を思っていたようで。軽く肩をすくめていた。

「全く！ アンタはいつつつつつつも！ バカばかりやって！」

やがて、何かに耐えられなくなつたかのように。

糸がぷつんと切れたかのように。

急に立ち上がったハルが、言った。

「治すこつちの身にもなつてみなさいよ！ このバカッ！！」

要するに、素直じゃないハルの言葉を翻訳すると、「心配ばかりかけるなこのバカ」だという事で。そしてそれは漣には良く解っていた。

「そうだな。今度からは気をつける」

それだけ聞くと、その顔の漣を見ると。

ハルはただいきなり「そ、それならいいけど………」と顔を少し紅くして座つた。漣が自分の気持ちを解ってくれていると解っているから。

「……………」

目を開くと、そこはただの闇だつた。

寝転がっているので天井しか見えないが、隣をチラと見てみると、

そこには月明かりが差し込んでいた。

シュロットヘンドラーはある工場の片隅で、目覚めた。
漣との戦闘で生まれた傷は全て完全に修復されていた。

そして、側に置いてあった携帯電話から着信が入る。

表示されていた番号は全て「0」が並んでいた。これは組織の者からの番号だ。

黙って携帯に手を取り、通話に答える。

「失敗したようだな」

「……………ああ」

言い訳はしない。

それだけは、決めていた。

「お前の魔法はある程度修復はしておいた。感謝するんだな。まあ、完全に直りはしなかったが。いや、直せなかった、というべきか」

『術式破壊』。

少なくとも、それが影響している事は解った。

もう『SYSTEM - Omega』の刀身は完全に修復される事は無いだろう。

それはもう中途半端な刀身のままだろう。

「……………だが、何故負けた？」

そんな事はこっちから聞きたいぐらいだった。

しかし、『負けた理由』は解らないが、『自分と漣では何処が違うのか』ぐらいは解っていた。

相手には、ただ一つの信念があった。

シュロツトヘンドラーには知る由もなかったが、それは『必ず依頼を達成させる』という信念。

確かにあの時。太田ビルで清二からの依頼は達成されたのだが、事件そのものは終わったとは言えない。それはつまり、依頼を達成出来ていない、という事なのだ。

しかし対して。

シュロツトヘンドラーはその信念が無い。

ただ、壊すだけ。

ただ、破壊するだけ。

言うなれば。その差、なのだろうか。

解らない。

解らなかった。

そもそも、自分に解らない事を理解しろ、と言う方が無茶なのだ。解らないからこそ、理解出来ないのであり、解っているからこそ、理解しているというのだ。

「知るか」

ただそれだけを、無造作に言い放った。「そんなのこつちが聞きてえよ」とは言わない。

自分で知りたかった。

自分で、自分と相打ちとなった少年の強さを、知りたかった。解りたかった。

だから、他人から教えるをこうような事は言わない。

「……………そうか。まあ、いい。お前には次の仕事をやっても

らっ

直後。

シュロットヘンドラーのポータブルに、あるデータが転送された。そこに表示されていたのは、ある一人の少女の顔。経歴。データ。

「仕事は簡単だ。その女を——浚え」

漣達の知らない所で、もう一つの物語が動き出す。

序章？ 邂逅

仕事。

それは少年にとってはただの暇つぶしであり、破壊行動でもある。そこに何かしら特別な私情や事情を挟んだ事は一度も無い。いや。

もしかすると、私情や事情を挟んだ事が一度も無いのは、私情や事情が無いからなのかもしれない

シュロットヘンドラー破壊者には、破壊者の心の中には、破壊という行為しか、無いのかもしれない。

それ以外は、無といえるぐらい、何も無いのだろう。

よって、これから行う仕事に関しても、特別何かしらの私情や事情は挟まない。挟む物が、無い。

内容は、ある少女の拉致。

もしもこの仕事を遂行するのがシュロットヘンドラーではなく、ただの通りすがりの、優しく善良な平凡の中の平凡の、とてつもなく普通な一般市民であるならば、そこで私情や事情が動くだろう。私情や事情が動く方が普通なのだ。

ただ。

そんな普通な一般市民は、あくまでも一般市民であり、例えば漫画やアニメやドラマの中では通行人役でしかない。

エキストラそんな通行人役は、そんな場面に、状況に行き着く事は無い。

例えば一般市民がそんな特殊な状況に行き着いたのならそれはもう通行人役では、無い。エキストラ

それは俗に主人公と言う。
それは俗にヒーローと言う。

しかし、シュロットヘンドラーは主人公でもヒーローでも無い。
それは本人も自覚している。

そしてシュロットヘンドラーは主人公でも無く、ヒーローでも無く、彼はただ純粹な――

悪役だ。

ターゲット
目標が居るのは、とある屋敷。

その事からかなりのお嬢様だと察する事が出来る。

しかし、ただ、それだけなのだ。

ただそれだけでしかなく。

それ以上でもそれ以下でもなく。

それだけなのだ。

シュロットヘンドラーにとっては。

シュロットヘンドラーは、いとも簡単に屋敷に忍び込む事に成功した。

彼のMT、『クォンタムオペレーション量子操作』を用いた、『クォンタムムーブメント量子移動』を発動させれば、簡単だからだ。

例えとてつもなく高い壁に囲まれていようとも。

例え絶対に破壊する事が出来ない防壁に囲まれていようとも。

例え千人のガードマンに囲まれていようとも。

例えば炎に囲まれていようとも。

量子を纏ったシュロツトヘンドラーは量子の道を通り、いとも簡単に侵入する。

簡単だ。

彼にとっては簡単なのだ。

そして仕事自体の難易度もそれほど高くなく、むしろ、簡単だ。何も変わらない。

いつもと。

何も、変わらないのだ。

防壁の上に立ち、眼下にそびえる豪邸を見下ろす。

セキュリティはかなり高いと見て良いだろう。

しかし、まずはターゲットが現在何処に居るのかを把握し、知る必要がある。

そう思った矢先、シュロツトヘンドラーの指輪型ポータブルから通信データが入る。

そこには屋敷内の構造が表示されていた。

内部はかなり、広い。
しかし。

「問題は、無え^ね」

問題は、無い。

夜という名の闇の中で、シュロツトヘンドラーの手の中から紫の光が発せられ、そして一つの大検を構成する。

『SYSTEM - Omega^{オメガ}』。

破壊の力を持った、オリジナルの魔法。

しかし、その刀身は途中から折れてしまっている。切っ先は無く、ただ断面があるのみ。

そして侵入だが、いくら『量子移動』があるとはいえ、内部の状況までは把握出来ない。自分が見える範囲でのみ、その効力をいかななく発揮出来る。

もしも、移動した先に敵が居れば？

もしも、移動した先に何かしらの罠があれば？

そういった可能性を考慮しなければならない。

よって、移動先は見える範囲でするのが望ましい。もしくは、何もないと確信出来る場所でなければ。

そういった可能性を考慮して、シュロットヘンドラーは『量子移動』を発動した。

量子を纏ったシュロットヘンドラーが、紫の光と共に、移動する。

移動した先は、屋敷の端。

そしてそこをめぐって。

量子の衝撃波を、放つ。

光が屋敷の壁に激突し、そして爆発が巻き起こり、轟音が空気を奮わせる。

やはり屋敷のセキュリティはしっかりとしているらしく、直後に爆発が起こったポイントに警備の人間がやってくる。

迅速だ。

しかし、その迅速さが仇となる。

シュロットヘンドラーは『量子移動』を発動。

屋敷の端から、端へと移動する。

この屋敷はなまじ広い代りに、端から、また逆の方向である、端

へと移動するとなると、時間がかかる。しかし、シュロットヘンドラーにとっては『量子移動』があるので、その距離もあまり意味を成さない。

この程度の距離ならば、距離を距離と感じないだろう。

そして、目標の居るポイントが、その爆発の起こした端の逆の端だった。

見えるのは窓。

そしてカーテン。

そしてテラス。

明かりが見える。

つまり、居る、という事だ。

ガシャンッ！ と、空中に移動した直後、勢いよく量子で加速し、テラスの手すりに着地する。

あまりの衝撃に手すりがひしゃげたが、しかし壊れず、崩れず、その形を保ったままにして、シュロットヘンドラーの足場となった。

そして、窓は鍵がかかっているらしく、無理矢理窓をつかむ、そして、引き抜くようにして、腕の引つ張る方向に、『量子加速』で、腕を加速させる。

するとバキッ！ と、いとも簡単に窓が、引っこ抜かれた。

同時に、部屋の中へと足を踏み入れる。

ゴウッ、と夜風が部屋の中に入り込み、シュロットヘンドラーの髪がなびく。

その冷たい瞳を、部屋のベッドで上半身だけ、身を起している少女へと向ける。

その少女は。

まず、髪が長かった。サラサラとした黒髪のロングヘア。夜風でその黒髪がなびく。

そして表情はきょとん、としていて、まさに何がなんだか解らない、と言った様子だった。

いつも通り。

いつも通りだ。

こういった拉致はシュロットヘンドラーは初めてではない。

今日と同じ手口で潜入し、そしてターゲットはいつも同じ表情をする。

「・・・・・・・・・・」

言葉は、無い。

必要が無いからだ。

シュロットヘンドラーは一步。その少女へと歩をすすめる。それを見た少女は、

「・・・・・・・・ふああ。入るなら窓、閉めておいてくださいね？」

そう言って、そのままもぞもぞと布団の中へと潜り込んでいった。

「・・・・・・・・・・は？」

あまりの行動に、言葉が思わず出てしまった。

今、屋敷の端、つまりこの部屋の反対側は爆発が起きている（起された）。そして、その最中自分の部屋に侵入者。

普通ならば、布団にもぐりこむような状況では、ない。

「おい待て」

「？ 何か、用ですか？ それとも相談？ 私、それほど人生経験が豊富じゃないのでお力になれるかは解りませんが、それでもよろしいのですか？」

「……………」

今度は逆に言葉が出なかった。

「……………お前、今の状況を解っているのか」

「？ いえ」

直後。

少女の目の前の空気が揺れた。

そして、ゴバツ！！ という音と共に、部屋の壁が吹き飛ばされた。

シュロットヘンドラーが『SYSTEM - Omega』システム オメガを振るい、量子の衝撃波を放ったからだ。

パラパラ、と、ベットに壁の破片が零れ落ちる。

「これで解つただろうが。俺はお前を拉致しに来たんだよ」

「そうですか」

そう言うと、少女はベットから立ち上がり、

「それでは少々お待ちを。今から鞆を用意しますので」

と、言い出した。

「バカか。そんな暇、あるわけねえだろ」

思わず、普通に言ってしまった。言い返してしまった。

「うーん。困りましたねえ。私はこんな日の為にちゃんと準備してたんですけど．．．．．ダメですか」

「あ？ 準備、だと？」

「はい。何分、ここではいずれ殺されそうですので」

「殺される？」

シュロットヘンドラーは、組織から転送されたデータ以外の事しか知らない。知ろうともしない。

この少女でも、例外ではなかった。

ただ浚え、としか言われず、それをそのまま実行するしか、ない。

「えーっと、私にはちょっとした能力があるのですよ。それが原因というかなんというか」

能力。

それは恐らくMTの事なのだろう、とシュロットヘンドラーは思った。

「能力．．．．．」

「はい。それが何なのか私には解らないのですが。でも何かあるらしいのですが、それを引き出すために毎日、色々とありまして」

そう言った少女の表情はどこか、切なかった。

「・・・・・・・・その、痣、か」

月明かりに照らされて、そして今改めて少女を見下ろすと、よく少女が見えた。

そして、その服の隙間からチラリと見える、痣も。

「あはは。もう慣れっこですよ。生まれた時からこうですから。私にとっては、これが普通ですよ」

私、元々孤児だったんです、と笑って言った。

孤児。

それはシュロットヘンドラーだってそうだった。

その才能を、組織に目をつけられて、気がつけば、組織に居た。似ている。

目の前の少女と、自分が。

普通じゃない。

自分も、目の前の少女も。

「・・・・・・・・気にくわねえな」

目の前の少女は、まるで自分みたいで。

そして切ない表情を見せる。

そうやって不幸を笑って過ごせる人間が、気にくわない。
むしろそれが自分に似ているのだったら。

ただ、壊すだけの。

ただ、破壊するだけの自分。

それはもう変わる事は出来ない。
この道を、選んでしまったのだから。

選んだのは自分。だけど後悔していない。
今でも闘うのは楽しい。壊す事が楽しい。

ただ強くあればいい。

強ければそれでいい。

どうしたら強くなれる？

(アイツは．．．．なぜあれだけ強い)

——先日闘った少年。

圧倒的な力の差があったハズだった。実際、シュロットヘンドラーの方が、実力的には高い。

しかし、負けた。いや、実際には引き分けなのだが、しかしシュロットヘンドラーにとっては負けた。

どれだけ攻撃を重ねても、あの少年は倒れなかった。諦めなかった。

なぜ？

あの少年からは謎の強さを感じたのは明らかで、そしてそれをシュロットヘンドラーはうつすらと自覚していた。

初めて負けたのだ。

誰かに。

初めての敗北。

初めて自分を負かした相手。

その相手が今の状況に置かされたら、どうする？

（アイツは．．．．あの探偵なら、この状況をどうする？）

いや。と、シュロットヘンドラーは、呟く。

（あんな探偵の事なんざ関係ねえ。俺はただ、．．．．壊す
だけだ）

そして、シュロットヘンドラーはがつ、とパジャマ姿の少女の手を掴む。

「——行くぞ。俺が、お前の普通を、破壊してやる」

自分がもう、変わる事が出来ないというならば。

自分と同じ、この少女を変えてやればいい。

自分が破壊する事しか出来ないのならば。

だったら少女の普通を破壊してやればいい。

なぜ、シュロットヘンドラーがこのような選択をしたのかは、解らない。あの少年の強さはなんなのかは解らない。しかし、こうすればその答えが見つかるような気がした。

シュロットヘンドラーは、目の前の普通じゃない少女の普通を、破壊そうとしていた。

そしてそれは、自分自身の変化、だった。

序章？ 反乱

シュロットヘンドラーは、飛んだ。

少女を抱えて。

合流ポイントまでたどり着けば、組織の空間制御系の再現者がシュロットヘンドラーと少女を別ポイントに移動させてくれる。

そこから先は、未だ解らないが。

クオントムムーブメント

『量子移動』は、他の人間を巻き込んで使用する事は出来ない。

クオントムアクセレーション

よって、『量子加速』での飛行による移動が必要だ。

ボツ！ と、紫色の量子が夜空を照らす。

少女を抱えた破壊者が、夜空を舞う。

立ちはだかる、警備システム。

屋敷の防壁には、侵入者を逃がさないように、魔法による防壁が展開するように術式が張り巡らされている。

しかし。

それが、仇となる。

「邪魔だ」

ゴアッ！！ と、シュロットヘンドラーは『システムSYSTEM - オメガOmega』

メガega』を、振るう。量子による衝撃波。

一気に、壁がなぎ払われた。

現象破壊。

あらゆる現象を破壊する力が、『システムSYSTEM - オメガOmega』には備わっている。

例えそれが、魔法という現象だとしても。

一気に、防壁を駆け抜ける。加速する。

「ふわあ。凄いですね」

「黙ってる」

「初めてです。外に出るのって」

「……………黙ってる」

警備の人間が来るよりも早く。

シュロットヘンドラーは、加速する。
振り切る。

（初めての外、か……………確かにコイツは、外に出たことが無いらしいな……………）

話を聞く限りでは。

少女の送ってきた普通の日常は最早、地獄と言える物だった。

「私は、姫野琴菜ひめのの ことなと申します。あのー。貴方様のお名前は？」

「名前なんざねえ」

名前など、無い。それは、本当だ。

『シュロットヘンドラー』。これは名前ではない。ただの、暗号コードネーム名。

「……………ただの、負け犬だ」

合流ポイントは、屋敷から数キロ離れた森の中だ。

到着したと同時に、それを見計らったかのように、突如、シュロツトヘンドラー達の前に人影が現れた。

『MAKES創り出す者達』のメンバー。

「かしだあらき．．．．．榎田荒欺」

「ご苦労。シュロツトヘンドラー。ソイツが、ターゲットか。確かに、な」

「．．．．．あの、この人、は？」

「さあな。とつとと降りろ」

姫野をそつ、と地面へと降ろす。

しかし姫野は不安を隠しきれない様子だった。じりつ、とシュロツトヘンドラーの後ろにまわる。

「まあ、そう不安がるな。気持ちは解るがな。私達はお前に危害を与えるつもりはない」

「だだよ。とつとと行け」

「．．．．．」

元々、『MAKES創り出す者達』が姫野を拉致しろ、と言ったのも、とりあえずは『保護』が目的だ。

保護した後の事は、知らされては居ない、が。

「……………榎田」

「なんだ。シュロットヘンドラー」

「コイツをこの後、どうする気だ？」

「おや。意外だな。まさかお前がターゲットの事を気にするとは」

「さっさと話せ」

「言っただろう？ これはただの保護、だ。それ以降の事はまだ決定されていない」

「……………」

「嘘か。」

「本当なのか。」

「それはどちらなのかは解らない、が。」

「とりあえずは、身の安全が保障されるようなので、シュロットヘンドラーは姫野に行くように促す。」

「姫野は一歩ずつ。」

「一歩ずつ、榎田へと近寄っていく。そして最後にシュロットヘンドラーの方を、振り返る。」

「あの、ありがとう、ございます」

「それだけ言っで。」

「榎田と姫野は、空間制御系の魔法により、消えてしまった。」

「ありがとう。」

その言葉が、シュロットヘンドラーの頭の中に残り続けた。

これで、少女のあの普通という名の地獄は、変わったのだろうか。まだ少しでもマシには、なったのだろうか。

「…………ハッ。まさか人から礼を言われる日が、俺に來るとはな」

だが。

それだけだ。それだけ、なのだ。いつもと何も変わらない。仕事をただ、やり終えただけ。

少女をただ見送って。

それで、おしまい。

——のハズだった。

しかしまだ。

終わってはいなかった。

これはただ始まりに過ぎず。

そして少年を大きく変える物語の、始まりだった。

姫野の一件が終わってから、数日がたったある日。シュロットヘンドラーは街中を散策していた。

特に目的があって行われている物では無いのだが、しかし彼は時間を使い方、という物があまりよく解らなかったで、フリーの際には大体こうして散策を行っているのだ。

あれから。

特に姫野については連絡が入ってこなかった。
しかし自分から探りを入れるような事はしない。
別にそこまで気にかけているわけじゃない。

しかし、そんなシュロットヘンドラーの思いとは裏腹に、不意に
ポータブルに通信が入る。

コードはオール0。

『MAKES創り出す者達』の、メンバーからの物だった。

「……………誰だ」

「はい。初めまして。裏切り者です」

女の声、だった。

それもシュロットヘンドラーが初めて聞いた、声。

（裏切り者……………確か、先日、別のプロジェクトの騒動で裏
切り者が出たと言ってたな……………）

自分が制裁を加えた、小野田清一の一件。
そこで出た、裏切り者。

「伊波……………直美か」

「あつたり」。『天才』に知ってもらえてるとは光栄ね」

「何の用だ」

「あの女の子の事、良いの？ ほつといて。かなりヤバイ事になっ
てるわよ」

「……………どういう事だ」

『あの女の子』、と言うのが、姫野を指している事ぐらい、すぐに解った。

「知らないようなら教えてあげなくもないけど、一つ条件があるわ」

「条件？」

「裏切り者に手を貸す気、ないかしら」

「……………」

それはつまり、『創^{MAKES}り出す者達』を裏切れ、という事だ。
裏切り者に手を貸す事は、裏切り者になれ、という事だ。

まず現在伊波は、戦力を欲しがっている。

そして突きつけてきたこの条件。

もしもシュロットヘンドラーが承諾すれば、その瞬間シュロットヘンドラーは伊波と同じ裏切り者となるだろう。そうする事で伊波側へと入る事は確定し、伊波側の戦力が増強する事となるだろう。

もしもシュロットヘンドラーが断れば、姫野の情報は得られないワザワザ聞けばすぐ手に入れるような情報をこのような交渉には持つてこないだろう。

どちらを選んだとしても。

シュロットヘンドラーからすれば、なんらかの変化がある。

「デメエ。良い性格してるじゃねえか」

「あら。それは光栄ね」

ただし、この交渉には一つの穴がある。

それは、シュロットヘンドラーからの、姫野の価値観。

それによつてはシュロットヘンドラーの被害は最小限に収まり、もしくは最大限に広がる。

「『行くぞ。俺が、お前の普通を、破壊^{こわ}してやる。このセリフは嘘だったの？ あの子を助けたくないの？』なんて綺麗事は言わないわ。私が一つ聞きたいのは、組織に喧嘩売^{けんか}る気があるの？ 無いの？」

「．．．．．本当に、良い性格してやがる」

この言い方ならば。

姫野の事など、関係無くなる。

「そろそろこの巢も飽きてきた所だ。今まで居た巢^ほつつーのも、壊しがいがある」

「そうこなくっちゃ」

通話の向こうで、伊波がニヤリと微笑んでいるような気がしたが、まだ顔も知らないのでその顔は解らなかった。

破壊者の反乱が、始まる。

少女の地獄を、破壊する為に。

序章？ 巨人

伊波直美という人物から得られた情報によれば。

あの少女、姫野は現在、『創り出す者達』^{MAKES}の持つ廃ビルに居るらしい。いや、居る、というよりは、閉じ込められている、という方が正しいのかもしれない。

そして現在、シュロットヘンドラーは『量子加速』^{クォンタムアクセラレーション}で飛行を行いながら、姫野が閉じ込められている廃ビルへと向かっていた。

「どうしてそんな所に閉じ込められている？」

「さあ？ 多分、あの子には何かしらのMT^{のつじく}があるみたいね。でも、それが何かは解らないけど。でも『創り出す者達』^{MAKES}はそれが何なのかしってるみたいね。だから、貴方を使ってあの子を助け出した……いや、奪い取った、と言う方が正しいのかしら？」

「つまりは、横取り、って事か？」

「正解。察しがいいわね」

元々、姫野が居た所も、同じような事をしていた。

しかし、どうやればいいのか。どうすればその能力が発現するのか解らないが為に、姫野は、生まれた時から地獄を見てきたのだろうが。

そして今もその地獄は続いている。

ただ単に、場所が変わっただけだ。

どちらがマシだったのかは、解らないが。

「んー。でも中の警備はまあ、そこそこって所かしら。貴方一人でも問題無い？」

「当たり前だ」

「でしょうね。けど、そうはいかないわ」

「あ？」

「私がやるわ」

それはつまり。

警備の大半、いや、ほぼ全てを、敵にまわす、という事だ。そしてそれを伊波一人で相手にする、という事。

「……………やれるのか？」

「愚問ね。覚えておきなさい。私は、負け戦が嫌いなものよ」

それだけ言つて、伊波は通話を切った。

廃ビルから半径五kmの地点に入った。

ここからは盗聴の恐れがあるので、残りの概要はデータによってやりとりする。

敵の数は約二百。

こちらの戦力は顔の知らない女と、少年のたった二人。

「ハッ。おもしれえ。こうでもしないと壊しがいがねえからな」

ゴウツ！！ と、量子をさらに加速させ、そこから一気に『量子移動』を発動。シュロットヘンドラーは、ビル内部へと侵入した。

伊波は、ビルの入り口から堂々が入っていった。

右手には、一本の槍。

スネイク・ランス
蛇の槍。

伊波の、本来の魔法。

この魔法は、伊波が調整を行っていた、伊波が元々、本来使っていた魔法。

複雑な術式を施しているが為、一度調整を行っていた魔法であるために、漣との戦闘時には別の魔法で対処していたのだ。

自動ドアの前に立つ。

ドアが、開く。

「ハアイ♪ 裏切り者の到着よん♪」

目の前には、約二百人の組織の者達。

入り口にこれだけの人数が集中的に待機している事は、通常は有り得ない。

しかし、伊波は事前に情報を流し、伊波が襲撃する事をあらかじめ向こうに伝えていたために、ピンポイントでこれだけの警備が集中したのだろう。

それも全て、伊波の狙い通りだ。

「さて、始めましょうか。バカな飼い主に飼われているだけの哀れな犬達と、裏切り者の戦いをね」

直後。

伊波は、踏み込む。

そして槍を、振るう。

群れの中へと。

衝撃波が、一筋の刃となって群れを襲う。

一閃。

衝撃波が曲がり、そして、さらに曲がる。――なぎ払う。

蛇のように自在に曲がり、そして組織の人間を襲う。

これが、スネイク・ランス蛇の槍の能力。

衝撃波のコントロール、と言うよりは、実際には魔力コントロール、という言い方が正しい。

魔力とは魔法を使うために必要な力。

それを攻撃へと転じるも、防御に転じるも、そして衝撃波として発した形を変える事も、可能。

それはまさしく変幻自在。

自在に形を変えて。

自在に相手を襲い。

自在に防御に徹する。

集団戦に向いた力とも、言える。

そして今度は、槍の先端から魔力を放出し続ける。

それはまるで一本のムチのように、しなる。

ゴウッ！！ と、魔力のムチが更に、なぎ払う。

相手に攻撃の隙を与えず、こちらから常に先制をとる。後出しなど、許されない。

一撃で、先制する。

最早、伊波一人で完全に圧倒していた。
やがて殆どの敵を倒し終えた頃。

「あら」

伊波の目の前に、突如巨大な石で出来た巨人が現れた。
それはまさしく、魔法。

（どうやら、他にも待機していた奴が居るみたいね）

ストーン・ジャイアント
岩の巨人。

儀式系魔法の一種だ。

恐らく、このビルのコンクリートを素材として儀式を行ったのだ
ろう。

儀式に必要なのは儀式場と儀式の核を成す道具。

儀式場はおそらくこの一階フロア。そして道具は、

「……………まさか、人？」

巨人の儀式系魔法は、本来ならば人形を核とする事が多い。
人ならざるもの。人を模した魔法。よって、その核も人を模した
物でこそ、百パーセントの威力を発揮する。

相性の良い道具を核とすれば、その威力を上昇させる。

そして巨人系の儀式魔法に相性が良いのが、その人形なのだ。
しかし、伊波は巨人の中に、人の気配を感じていた。それはつま
り、

「人を核にして無理矢理、再現させているようね」

人を模した物ではなく、人そのもの。

人形の代わりに人を差し出すという禁じられた行為。
それはまさに、『儀式の条件』を破る行為。

「人形の代わりに人を核にすれば、威力が上がると思ったのかしら。
だったらそれは思い違いね。むしろ適合出来なくて劣化してるわよ
？」

伊波のその言葉の通りに。

人を核として再現された巨人はぼろぼろと、その形をかるうじて
維持しているだけの、無残な人形と化していた。

伊波は魔力のムチを振るう。同時に、衝撃波を放つ。

変幻自在に曲がるその衝撃波は、巨人に直撃した瞬間に、弾かれ
てしまった。

「へえ。どうやら巨人系の魔法の特製はかるうじて機能しているみ
たいね」

巨人の魔法のその特徴は、『防御力』にある。

シンプルな特徴だが、巨人の防御力は並みの魔法では、破れない。

「オ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオッ！！」

轟く咆哮。

直後。

劣化した巨人はその大きな拳を、伊波に向けて放つ。

「ッ！！」

ゴッガアッ！！ と床に拳が直撃した所で、床が大きく碎ける。

伊波はバックステップで回避したのだが、空気の震えがビリビリと頬から伝わってくる。

「この威力．．．．．！ 劣化した巨人にしては攻撃力が高すぎる．．．．．！？」

確かに、巨人は儀式条件を大きく破ってしまった所為でぼろぼろとかろうじて形を維持しているように見えた。

しかし、いつまでたっても、『崩れない』。

むしろ、威力が（巨人系の儀式魔法にしては劣化してはいるが）、やや上昇している。

「．．．．．！ まさか、儀式を行っている術者本人が、核となっているとでもいうの！？」

それならば、説明がつく。

確かに巨人系の儀式の条件を大きく破ってはいるものの、しかし術者本人が魔力ちからの供給を魔法に対して直に行い、形を維持すれば、威力は微力ながら上昇する事が可能だろう。

儀式自体も維持出来る。

「でも．．．．．まさか。そんな．．．．．！」

しかし、それは同時に多大なるリスクも意味する。

自らの体を媒体とし、条件を破った儀式を無理矢理、維持し続ければ、いずれは力尽きるだろう。

術者本人も。そしてその、命も。

力尽きるだろう。

（まさか、ただの警備にそこまでさせるなんて．．．．．！）

たつた一人の侵入者の為に二百人も人間を配置し。たつた一人の侵入者の為に一人の人間の命を捨てる。

（これが・・・・・・・・・・『創り出す者達』・・・・・・・・・・）

伊波自身も、組織の暗部は見てきたつもりだった。どういふ組織か、解っていたつもりだった。しかし、違った。

実際には伊波が思っているよりも、もっと重い。黒い。ただただ純粹な、黒。

「ゴツ、ガアッ、ガッ、アアアアアアアアアアアア
 アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
 アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
 アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

まゆゑ。

リミットが近づいていた。

術者の、タイムリミット。命が尽きるまでの時間が。

「やるしかないわね」

このまま放っておけば。

確かに力尽きるだろう。

伊波は勝つ事が出来るだろう。

役目を果たし、そのまま先へと進む事が出来るだろう。

しかし。

彼女は、引き下がらない。

それではやってる事は『創り出す者達』^{MAKES}と同じだ。

今更自分は『創り出す者達』とは違う、等とは言わない。これまでに数多くの人間をこの手にかけてきた。しかし、同じままでは居たくない。

変わりたい、と。

今までの自分はただ、わがままを言っただけ。

自分の意思ではなく、ただのわがままだ。

あの少年に言われた通りの、わがまま。

関係の無い人を巻き込む事は、復讐じゃない。

だからもう、巻き込まない。

自分の戦いに巻き込まれた目の前の一人の、巨人^{にんげん}を、助ける。

(この魔法を解除するには、核の破壊以外には……儀式場の破壊しかない。だけど、それは不可能。……だったら、)

核を破壊する事は出来ない。

儀式場も破壊する事は出来ない。

儀式解除に必要な二つの要素の破壊は、不可能。

しかし、伊波にはある一つの勝機があった。

槍を握り締め、そして、

(――！)

ボッ！！ と、巨人の拳が、伊波を襲う。

しかし、逃げない。

そしてそのまま伊波は、襲ってくる拳に向かって、踏み込む。

槍対拳。

そして相手は驚異的な防御力を持った巨人の拳。

防御力は、攻撃を防げば防御力として機能するが、攻撃に転じればその防御力は攻撃力へと変わる。

もしもそれが巨人の防御力ならば。

そしてそれが攻撃力に転じたのならば。

勝敗は、目に見えて明らかだろう。

——通常ならば。

ゴッ！ ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイッ！！ と、槍が、拳を貫いた。
それどころか、もはや腕全体を貫いている。

「……………見えたっ……………!!」

ぼろぼろと崩壊していく巨人の胴体。その中に、人が、見えた。
それこそまさに、この儀式魔法の術者。

ズグッ！ と、槍で術者の肩を突き刺す。そしてそのまま、魔力
のムチで術者を縛りつけ、一気に、引っ張り上げる。

直後に、ついに巨人が、崩れ去った。

ゴトゴトツゴトツ、と、石や岩や瓦礫が、巨人の形から解放され
て、崩れ落ちる。

つまりは。

破壊が出来ないのならば、取り除いてやればいい、という発想だ
った。

核という物はそこにあつてこそ初めて威力が発揮される物だ。
ならば、もしもその核が無くなれば、どうなるのか。

それはつまり、術式の崩壊。魔法の解除につながる。

そして巨人の腕を砕いたのは、蛇スネイク・ランスの槍という槍の、その特性にある。

槍とは、斬る物ではなく、貫く物。

貫通。

先ほど、巨人の術者が条件を破って魔法を再現していた事とは逆に、伊波の場合は『本来の魔法の使い方』をしたために、威力が上昇したのだ。

条件を破った者と、条件を貫き通した者。

勝敗は、その差。

その上で、伊波は相手を救い出した。

完全に、伊波の勝利であった。

序章？ 破壊

シュロットヘンドラーは、ビルの内部の侵入に成功していた。
現在、六階のフロアにシュロットヘンドラーは居るのだが、肝心の姫野の居所が見つからない。

「チツ。何処に居るってんだよ。アイツは」

六階のフロアに居る、という事は解っている。しかし、六階の何処に居るのかは解らなかった。

そもそも、さっきから何度も同じような所を廻っているような感覚すら、シュロットヘンドラーにはあった。

下では轟音が響いている。伊波が戦闘を行っているようで、実際のその戦闘に関しては問題は無いようだった。

シュロットヘンドラーは伊波の実力を信頼しているワケでは無い。彼はただ、姫野の奪還を目的に行動している。

伊波は、伊波の目的がある。

互いはただ、打算で動いているに過ぎない。

「.....待てよ」

シュロットヘンドラーは足を止めた。

もう、このフロアは全て調べつくしたハズだ。全ての部屋を確認した。

しかし、それでも一向に姫野が見つからない。

拘束場所を移動したのか。

いや、ありえなかった。姫野の能力を引き出すにはそれなりの儀式か何かが必要になるはずだ。

儀式とは、基本的には一定の領域で術式を構成しなければならな

フィールド

い。それはつまり、場所を移動出来ない、という意味だ。
つまり。

（俺が姫野^{アイツ}を見つけれないんじゃないやねえ。姫野^{アイツ}を見つけれないよ
うに『なっている』のか……？）

魔法。

その力が、なんらかの魔法が再現されているのならば。
説明はつく。

「空間制御系の魔法か。だったら話は早い」

再現されている空間制御系の魔法は『迷い人』。

空間と空間を切り取り、接続する魔法。

その領域に踏み込んだ者は、接続された二つの空間を行き来する
しかなくなる。

「ハッ。この程度の魔法で俺を完全に封じ込められると思ったのか
？」

シュロットヘンドラーは右手の『システム - オメガ』を
構える。

そして一気に、振るう。

一閃。

ズッギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ
ッ！ と、その一閃は空間を、切り裂いた。いや、破壊した。
これこそ、オリジナルの魔法、『システム - オメガ』の
能力。

現象破壊。

あらゆる現象を破壊する能力。

そしてその破壊の力は、魔法という現象すら破壊する。

シュロットヘンドラーはいとも簡単に、敵の罠である『迷い人』の魔法を破壊した。

そして空間を脱出した所に、先程までさんざん見てきた部屋、ではない部屋が見えた。

扉は分厚い鉄板のような物で構成されていた。

これは『対魔法用硬度防壁』という物で作られた物だ。

防御力は物理攻撃よりもむしろ魔法攻撃に対して重点を置かれて作られた物で、かなりの性能を誇る。

通常の魔法攻撃では傷一つつかないだろう。

しかし。

「邪魔だ」

シュロットヘンドラーは、その大剣、『システムSYSTEM - オメガOmega^ガ』を振るうだけで、いとも簡単にその扉を破壊した。

部屋の中は、辺りに大小様々なケーブルが散らばっていた。

そしてそれらのケーブルは、たった一つ。一点に集中していた。

姫野琴菜に。

「……………」

正確には、姫野の頭に取り付けられている、装置に、だ。

そして姫野は、力尽きたように床に寝転んでいる。いや、倒れて

いる、という表現が正しいのだろう。

「やあ、シュロットヘンドラー」

コツ．．．．と、シュロットヘンドラーの後ろから、靴音と共に一人の男の声が響く。

そしてシュロットヘンドラーはゆっくりと後ろを振り返る。

そこにあつたのは、見知った顔、だった。

かしだあらぬ
榎田荒欺。

姫野を保護した男だった。

「どうした？ そんな機嫌の悪そうな顔をして」

「コイツは一体どういう事だ．．．．．？」

シュロットヘンドラーは床に倒れている姫野を目で指して、榎田に問う。

「ああ。保護だよ」

「保護、だと？」

そして榎田は何も悪びれずに、そのまま口を開く。

「ああ。保護さ。あんな所に居るよりも、『組織の目的達成の為に部品として保護』していた方が、よっぽどいいだろう？」

元々。

榎田に姫野を引き渡した時も、組織の計画に必要なのならばある程度の待遇はあるだろうと思っていた。

そしてその計画とやらまではまだ少し間があり、この少女もまだちゃんとした保護をされるだろう、と思っていた。

しかし、シュロットヘンドラーはその自分の認識が甘かった事を痛感する。

違うのだ。

確かに組織にとって、姫野は計画とやらに必要な人物だろうが、あくまでも扱いは部品なのだ。部品を保護する事と、人を保護する事は違う。

計画を果たせば、そこに人間らしい扱いなど必要無い。

これでは、こっちの方が地獄だ。というよりも、どちらも地獄で、シュロットヘンドラーはただ、最悪の地獄に少女を突き落としてしまったのと、なんら変わらない。

自分を信頼してくれた姫野。

そして信頼した者に勧められた先は、さらなる地獄。

姫野は、少女は、一体どんな気持ちでこの部屋に居たのだろうか。恨んでいるだろう。

それこそ、自業自得だった。

「.....」

「なんだ、この部品パーツがそんなに気になるのか？」

「.....」

榎田はもう、姫野を人間として扱っていなかった。

ただの、単なる計画を成功させるための、部品——。

「自分自身に似ているから、自分自身と重ねて見ているのか？」

シュロットヘンドラーも、特殊なMTまことがある所為で、地獄だった。

元々居た孤児院でも、一人だった。

そして組織に入ってから地獄だった。

一般人から見ればその地獄も、それをもつ地獄とは思わないぐらい、地獄だった。

姫野も同じだった。

特殊なMTさいのうを持つている所為で、こんな事になった。

もしも、姫野がなんの才能も持たない、普通の女の子として生まれてこれば、こんな事にはならなかったのだろうか？

恐らく、そうだっただろう。

シュロットヘンドラーにはたまたま、戦う為の力があつた。

しかし、姫野にはそれがなかった。

抗う事も、足掻く事も、出来なかった。

笑うしか、笑顔で居るしか、無かった。

だから、笑うのだ。

辛くても、笑うのだ。

笑う事しか、出来なかったのだ。

笑顔でいる事しか、出来なかったのだ。

姫野は言うなれば、シュロットヘンドラーの別の可能性だった。

もしも、シュロットヘンドラーが力を持っていなければ、同じように笑うしかなかっただろう。

「．．．．．さあな．．．．．で、アイツはなぜ倒れている？」

「あの頭の装置は脳に直接術式を流し込む為の儀式の為の道具だ。まあ扱的にはオリジナルの魔法に近い。ただ、設置段階でかなり頭に負担をかける。なにしろ自分の物とは違う魔力を無理矢理頭に馴染ませなければいけないのだから」

自分の物では無い魔力を無理矢理、頭に馴染ませる、という行為

は危険だ。

それはつまり、形の合わない穴に無理矢理、別の部品をねじこむような物だ。もし、仮に、その穴に部品を入れる事が出来たとしても、穴の形も変わってしまう。壊れてしまう。

そして、正常な、穴の形の合う部品を入れた時に、不具合が出る恐れがある。

姫野に行っている事もつまりは、そういう事なのだ。

恐らく足元に散らばっているケーブルも、魔力供給用のケーブルだ。

「ああ、そうだ。今、一階に侵入者が来ているんだ。さつさと始末してくれないか。今頃は恐らく一階で戦闘が始まれば一定時間後に作動する、術者を生贄に捧げる巨人の儀式が発動しているハズだ。無理矢理劣化した儀式を行っているから、まあ相手に実力があればもうやられていた頃だろうな」

榎田には、罪悪感、という物が一切感じられなかった。

無理に別条件を使うと劣化すると解っている儀式を、平気で行う
榎田は正に、組織の一部の黒い部分をそのまま凝縮したような人
間だった。

「あぁ。始末してやるよ」

直後に。

『SYSTE-M-Omega』を振るい、『周囲のケーブルを全て、ゴバツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツと、システム オメガ』と、破壊する』。

そして発動する、現象破壊。

この装置も、オリジナルの魔法と言うのなら、破壊は可能だっ
た。

そして予想通り、姫野に取り付けられている頭の装置も、ケーブルも全て、粉々に砕け散った。

「デメエをな」

「シュロットヘンドラー……貴様ツ……！何をツ！？」

さすがの榎田も、驚きを隠せないで居た。

そもそも榎田は、シュロットヘンドラーが裏切った事など、知らなかった。さつきも、味方と思って話していたのだ。

そして組織の計画に必要な装置を、破壊した。

状況を自分の頭に追いつかせる事には、時間が少しかかった。

そうしている間に、シュロットヘンドラーは第二波を撃つ。

「ッー！」

榎田はとつさにバックステップで回避しようとするが、この部屋は戦闘空間としてはスペースは、狭い。

避けきれぬハズも無いので、とつさに魔法を再現する。

再現した魔法は、『ワン・ジャンプ一步跳躍』。

一步の跳躍力を強化する魔法で、一步だけでかなりの距離を移動する事が出来る。そしてその反動を利用し、壁を砕き、そのまま部屋から脱出した。

シュロットヘンドラーは、それを確認すると、姫野の側へと近寄る。

今の戦闘の所為か、それとも魔力供給が途絶えたからか、姫野はそのタイミングで目を覚ました。

「ん……………」

姫野は、自分の側に居るシュロットヘンドラーに気がついたよう
だ。

その瞳は真っ直ぐと、シュロットヘンドラーを捉えている。

「負け犬のお方．．．．．」

「テメエ。喧嘩売ってんのか？」

確かに名前は名乗らなかったが、こう呼ばれるのは予想外だった。

「あの．．．．．どうしてここに？」

「ただの散歩だ」

「助けに来ていただいたのですね？」

「ただの散歩だっつってんだろっが！」

姫野は言った。

助けに来てくれた、と。

それはつまり、ここで過ごした数日間は、それこそまさに地獄だ
った、という事だろう。

人が、シュロットヘンドラーが来た事によって、『助けに来た』
と解釈出来る程に。

直後。

ゴアッ！！ と、装置を破壊した時の余波で、周囲が破壊された
時にできたであろうこのフロアの瓦礫の雨が、シュロットヘンドラ
ーに向けて放たれた。

「ッ！」

バンツツツツッ！　と、シュロットヘンドラーは『SYST
E M - O m e g a』の現象破壊で瓦礫の雨をそのまま破壊する。

現象破壊で破壊出来た、という事はそれはつまり、魔法だと言う
事だ。

そしてそれはつまり、榊田はまだ、生きている。

「やれやれ。とんだ裏切り者だ」

「・・・・・・・・」

榊田の言葉に対して、何も返答しない。

そして榊田は続ける。

「・・・・・・・・全く、残念だよ。貴重な組織の『天才』を消す事になろうとはな。言っておくがシュロットヘンドラー。貴様は『天才』であつても、決して負けないというワケでは無いのだぞ？」

「ハア？　消されるのはデメエだろ？」

姫野には、自分を変える為の、力が無い。――しかし、シュ
ロットヘンドラーには、ある。

組織を裏切った者と、組織の黒を凝縮した者との戦いが、始まる。

序章？ 爆発

自分自身に似ているから、自分自身と重ねて見ているのか？

否定は、しない。

自分と境遇が似ているから。

両親からも捨てられて、そしてたまたま特殊才能があり、そして地獄を見てきた。

シュロットヘンドラーには力があつた。

姫野には力がなかった。

それぞれ違う地獄を見てきた。

シュロットヘンドラーにとっては、地獄ではなかったのかもしれないが、しかし、普通の立場から見れば、やはりそこは地獄だっただろう。

そもそも、地獄を地獄と感じなくなったのも、その環境に慣れるしかなかったからだ。

姫野は自分と似ている。

話を聞いただけでも解つた。

自分のもしもの可能性。

一般的に『もしも』という言葉はなんの意味もない、という人が居るが、その『もしも』が、自分にとってのもしもの可能性を持った人物が、目の前に居たら。
その時人はどうするか。

「―――！」

ドッ、と、シュロットヘンドラーは『クオントムアクセラレーション量子加速』で、加速する。

一気に榊田の懐へと潜り込んだ。
一閃。

「……………」

榊田の目の前を、『システム・オメガ』の欠けた刃が切り裂いた。それに加えて、『現象破壊』も発動させてあるので、例え何かしらの魔法が再現されていたとしても、それすらも破壊するようになっている。

しかし。

「さすが、速いな」

「ッ！」

ボンッ！と、シュロットハンドラーの目の前、というよりも、真下が爆発した。

しかし、『システム・オメガ』の『現象破壊』が発動しているので、『爆発という現象を破壊した』ので、ダメージは無い。シュロットハンドラーが爆発に気をとられている間に、榊田は一旦距離をとった。しかし、それを見逃すシュロットハンドラーではない。

「逃がすかよッ！」

今回は『量子加速』、つまり『加速』、ではなく、発動させたのは『量子移動』。
クオラムムーブメント

量子を纏い、そして量子もつれによって生み出された道を通る。そして、転送したのは、榊田の背後。

現象破壊。

魔法すらも破壊する必殺の一撃を再び振るう。

しかし、榎田はそれを避けた。先程と同じように。

さっきは、榎田の前を切ったのではない。榎田が避けた後を切ったのだ。

そして、榎田の目の前の空間を切り裂いた直後。
再び爆発が起こる。

「チッ！」

ゴアッ！！と、『システム・Omega』を横薙ぎに振るい、爆風を薙ぎ払った。

爆風によって悪くなっていた視界がクリアになる。

その時には既に、榎田はシュロットヘンドラーとは距離をとっていた。

「……ふざけてんのか？」

「ふざけてなどいないさ」

その事は、質問しなくとも、解っていた。

そもそも、さっきからの攻防でおかしい事はある。

シュロットヘンドラーが『システム・Omega』で一度も榎田を切り裂いてはいない。

切ったのはあくまでも、『榎田の側にある空間』だ。

しかし、空間を切った瞬間に、爆発が起きる。

そのカラクリが、シュロットヘンドラーには解らなかった。

（現象破壊で魔法は破壊してるハズだ。だが、今の爆発は間違いなく魔法の物だ……）

考えても解らない。

ならば、動くしかない。

シュロットヘンドラーは『SYSTEM - Omega』を構え、
そして、加速した。

その動きを確かに榎田は、見ていた。捉えていた。

そして、シュロットヘンドラーは『SYSTEM - Omega』
の欠けた刃を、縦に振るう。

そしてそれを、体をそらすだけで、かわす。

それは最小限の動き。

それは、無駄の無い動き。

つまり、反撃が用意になる、という事だ。

シュロットヘンドラーはそれを理解していて、そしてあえて、かわし易いように、大振りの攻撃を放ったのだ。

反撃を受ける事を承知の上で。

相手の能力を知る上で、多少のダメージは仕方が無いと、シュロットヘンドラーは考えている。

しかし。

「……………ッ!？」

シュロットヘンドラーが驚いたのは、その能力では、無い。

榎田が、反撃をしてこなかった事だ。

そして再び、榎田の側の空間から、爆発が巻き起こった。

「チイツ!!」

相手を誘うためにあえて大振りをしていた分、とっさの爆発に反応が遅れる。

なんとか『SYSTEM - Omega』システム オメガを振るうが、現象破壊の効果が発揮しきれずに、シュロットヘンドラーに、多少のダメージが通った。

しかしこのダメージは全くの計算外。

元々このダメージは、相手の能力を解明出来なければ意味が無い。つまり、意味の無い、ただのダメージ。

「ッ……………」

「やはりまだ子供だな。その程度の誘いに乗ると思っているのか？」

「ハッ！ テメエならこの程度の誘いで十分だと思ったんだよ」

「やはり餓鬼だな。生意気な所が特に」

相手は、シュロットヘンドラーの手の内を知っている。

しかし、シュロットヘンドラーは相手の手の内を知らない。

戦闘において、相手に手の内を知られているという事は、かなり厳しい状況下にある。

そして例え相手の能力を解明出来たとしても、ダメージが無いとは限らない。

今までシュロットヘンドラーが戦ってきた敵は、そういった事を考える必要が無かった。

というよりも、その意味が無かった。

現象破壊。

その能力は、あらゆる現象を破壊する。

よって、相手がどんな魔法を使おうとも関係無かった。その魔法の能力が解らなくても、関係無かった。

しかし、今は、状況が違う。

確かに現象破壊は発動している。

ただ、破壊してもなぜか相手の魔法が再現されている。
榊田は、共に今まで仕事をしてきたが、主に実行するのはシュロ
ットヘンドラーで、そしてサポートをするのが榊田だった。
よって、主にサポートを主体とする魔法しか再現してこなかった。
つまり戦闘においては全くといっていいほど未知数。

（上等だ）

そして、それだけでは無い。

シュロットヘンドラーは姫野を守りながら戦っている。

普段通りの動きを出来ていなかった。

そもそも、誰かを守りながら戦う、といった事も、シュロットヘ
ンドラーも未知数だった。

「そろそろ、こちらも反撃するか」

パチンツ、と指で音を鳴らす榊田。

直後に、シュロットヘンドラーの周囲の空間が爆発する。

「ッ!？」

周囲の空間が爆発しているのは、恐らく、魔法が再現されている
からだろう。

そして避け続けていたのも、恐らくは空間に爆発するように罠を
仕掛けていたからなのかもしれない（榊田は空間制御系の魔法を使
ってシュロットヘンドラーのサポートを行っていた）。

爆発に巻き込まれても、シュロットヘンドラーはダメージは無い。
ただ、これだけの規模の爆発となると、部屋全体にその爆発が及
ぶだろう。

それはつまり――、

(狙いは姫野か！^{アイツ})

とっさの行動であつたのにも関わらず、シュロットヘンドラーの体は動いた。

クオントムムーブメント

『量子移動』を発動し、姫野の元へと転送する。

即座に現象破壊を発動。

システム

押し寄せる爆風を、『SYSTEM - Omega』でなぎ払う。

オメガ

なぎ払われた爆風。

視界が晴れ、そして部屋の中を見渡す事が可能になった。

「無事か」

「は、はい。なんとか……………」

部屋は既に崩れており、もはや廃墟と化していた。
そしてそこに。

檜田の姿があつた。

「テメエ。なんだ？ その姿は……………？」

シュロットヘンドラーの視界が捉えたのは、檜田であつて、そうでない物だつた。

まず、姿が変わっていた。

体が、岩で覆われていた。

顔以外の部分が、全て覆われていた。手や足も、岩で覆われており、それが魔法だという事が一目で解つた。

ストーンアーマー

「岩巨人の鎧。巨人の力を、纏う魔法だ」

「その魔法を再現する為に、さつきからチョコマカと逃げていたのか？」

「ああ。この魔法は再現する際に再現時間がかかる分、隙が大きくてね。お前のような奴が相手だと、こうするしかなかったんだよ」

「それを使えば、俺に勝てると思ったのか？」

シュロットヘンドラーの『システム - オメガ』には『現象破壊』の能力が備わっている。

それはつまり、^{ストーンアーマー}榎田の岩巨人の鎧も現象破壊で破壊出来るという事だ。

あの魔法には何か、ある。

それを、シュロットヘンドラーは感じ取っていた。

「.....」

じりつ、と。

シュロットヘンドラーは両手で『システム - オメガ』をいつでも振るえるように構えつつ、距離を測る。

「どうした。来ないのか？」

後ろには姫野が居る。どのみち、引き下がる事など、出来ない。

シュロットヘンドラーは『^{クオントムアクセラレーション}量子加速』により加速した。

同時に、その加速を利用して、大剣を振るう。

それを榎田はやはり見切っており、そしてその太刀筋を、右腕を盾にして受け止めた。

（何？）

このまま、真正面からぶつかれば現象破壊で再現した岩巨人ストーンアーマーの鎧が破壊されてしまう。

シュロットヘンドラーには、榎田が何を企んでいるのか解らなかった。

しかし、その答えはすぐに見つかった。

ボンッ！ と、榎田が盾にした右腕が爆発した。

「ッ！！」

現象破壊を発動させているので、シュロットヘンドラーにダメージは無いが、その代わり、視界が塞がった。

「しま——ッ」

ゴッ。と、鈍い音が、シュロットヘンドラーのわき腹辺りから響いた。

岩巨人ストーンアーマーの鎧によって強化された榎田の拳が、シュロットヘンドラーのわき腹を捉えた音だった。

「がッ！ ぐッ……………」

シュロットヘンドラーの体は、まるで人形のように、あっさりと拳によって殴り飛ばされた。

岩巨人ストーンアーマーの鎧。

巨人の力を、纏う魔法。

つまり、榎田自身の力も、巨人の力によって強化される、という事だ。

倒れは、しない。

ぐっ、と『SYSTEM - Omega』システム オメガを床に突き刺し、なんと

か立ち上がる。

「おや。死ななかったのか。見かけとは違い、なかなか頑丈だな」

「テメエ．．．．．一体どうなっている？」

「さて。なんの事だ？」

先程からたびたび巻き起こる謎の爆発。

それが魔法であるならば、巻き起こるのがおかしい爆発。

「魔法は『現象破壊』で破壊しているハズだ．．．．．なのになぜ、テメエは魔法で爆発を起こす事が出来る？」

「シュロットヘンドラー。貴様の魔法は確かに、私の魔法を破壊している。ただ、だからこそ、再現さいげんしているのだ」

「どついう事だ」

「それは」

榎田は足を一歩踏み出し、それだけでぐんっ！と、シュロットヘンドラーに近づく。この脚力も、巨人の力だろう。

「——ッ！」

「自分で考えてみる」

榎田の拳が放たれる。そしてそれを、シュロットヘンドラーは確実に、『SYSTEM-Omega』システム オメガを盾にしてガードした。

因みに、この時、現象破壊は発動していない。

「む？」

「……………！」

爆発は、起きない。

直後、シュロットヘンドラーは『量子移動』クォンタムムーブメントでその場から、移動する。

そして纏った量子が消え去り、姿を現す。

「言っておくが、その『量子移動』クォンタムムーブメントの弱点も解っているぞ？ 移動可能距離は約十メートル。そして転送直後の隙もな」

「……………俺も解ったぜ。テメエの魔法のカラクリもな」

「ほう」

その発言をむしろ、榎田は楽しんでいるようだった。

「魔法を破壊すると再現される魔法、いや、正確には、魔法が破壊されると再現する^{はっけん}ように術式を組んだ、と言った所か？」

「正解だ」

榎田の口が、表情が、歪む。

楽しそうに。いや、実際に楽しんでいるのだろっ。

その笑顔は、まるで先生が問題を解いた生徒に向かってなげかけるかのような笑顔だった。ただ、それよりももっと、不気味だが。

「だが、それがどうした？」

再び起こる爆発。

しかしそれはシュロットヘンドラーが現象破壊で魔法を破壊し
るでは無い。

自発的に爆発させたのだ。

爆発させたのは、足裏。

狙いは加速。

爆発の反動を利用した、加速だ。

「がッ！？」

予想外、というよりも、新たな攻撃パターンにより一瞬だが、反
応が遅れた。その一瞬の隙をつかれ、強烈なアッパーカットを喰ら
い、宙を舞う。

そこで榎田は再び足裏から爆発を自発的に起こし、飛翔する。

そして、シュロットヘンドラーの腹部を、両手で叩きつけた。

当然、シュロットヘンドラーは床に叩きつけられる。叩きつけら
れた際に、ゴバッ！！と床が爆発を起こした。

紛れも無い、必殺の一撃。

もはや自身の能力を理解された上での、全力の、勝負を終わらせ
る為の一撃。

「ガッあああああああああああああああああああああああああ
あああああああッ！！」

くるり、と、倒れたシュロットヘンドラーになどには目もくれず、
部品である姫野にその視線をむける。

「う……………あ……………」

「さあ、お前を守ってくれる騎士^{ナイト}はもう居ないぞ。さあ、どうする」

姫野は、大人しく捕まる事も、逃げる事も、しなかった。

彼女がとつた行動。

それは、

「……………何？」

立ち向かう事。

逃げずに、立ち上がり、立ち向かうとした事だった。

例え力が無くとも。

目の前のシュロットヘンドラーを見捨てて逃げる事など、姫野には出来なかった。

「……………」

「愚かだな。仕方が無い。多少は痛めつけても計画に支障は……………」

「」

「——おい。一つ聞きてエんだけどよ」

「……………ッ!？」

ボンッ! と、シュロットヘンドラーが落下した地点の床が、爆発した。いや、破壊された。

そして中から現れたのは紛れも無い、破壊者^{シュロットヘンドラー}だった。

ボロボロになりながらも、多大なるダメージを追いながらも、彼は、立っていた。

「俺はいつから、騎士^{ナイト}になったんだ？」

「なっ……………！」

「言っておくが、俺は破壊者だ」

『システム^{システム} - オメガ^{オメガ}』を軽く振り回し、辺りの粉塵を切り裂く。

「だから、俺はお前を、破壊する。その小賢しい術式^{アーツ}ことな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8131w/>

魔法再現者

2011年11月14日06時13分発行